面白半分 全

面白半分

序

此書の全篇其悉くが皆斬新の觀察と云ふべきではないが、奇拔の筆、烈熱の文、到底他人の摸せんとして摸し能はざる所がある。或人は著者の文を評して、「其人格の寫眞である」と云つたが、成る程、冷嘲熱罵、當面の人を嘲罵し盡さずんば止まざる其熾烈の文中にも、燃ゆるが如き憂國の至誠と、溫藉玉の如き人情美が含まれて居る點は、確に著者の半面が髣髴として眼前に浮び出るの觀がある。それに著者の文の今一つの特色は、簡潔明瞭、齒ギレのいゝ點であつて、それがさなきだに痛快な文章を一層痛快に感ぜしめる。近來凡ての著書が低調に成り愚劣に成つて殆どロクな本の無い今日、私は眞の意味に於て、これ程痛快な本は斷じて他にあるまいと思ふ。

霜下傑人

例言

○大正六年の春以來、文武堂主人の希望に應じて、舊記を集めた小單行本四册を發行したその標題は面白半分、つむじまがり、裸に虱なし、奇想凡想等である、就中、面白半分は第六版を重ねるに至つた程の好評であつたが、其後事情のため絶版になつて注文を斷つて居た、それを今度和紙和裝の物として試みに發行するのである

但し本書は前の面白半分の記事の幾分を捨てゝ、裸に虱なし、奇想凡想等の中から塡充したのもある、新らしく筆を執つたものは一項もない

○舊記といふは、滑稽新聞、此花、有名無名、不二雜誌、奇、ザックバラン、袋雜誌、スコブル等に掲載したのが主であつて、又他社の雜誌に寄稿したのもある、故に或項は時文體、或項は口語體など文體の一致しないのは、其時其事の便宜に由つたものと諒したまへ

大正十二年七月十日著者識

目次



面白半分

著者　廢姓外骨

緒言

人類が社會を組織するに至つたのは共益の爲めである、其共益主義は僞惡醜を排して眞善美に就かねばならぬので、社會は則ち眞善美を標準とする事になつた、古今内外此標準に據らない社會は無い、今其卑近の例を擧げやう、何人でも「今日は天氣だ」と云ふであらう、天氣とは天空の氣象、雨が降れば雨天氣、曇れば曇天氣である、然るに「天氣」と云つて晴天を意味して居る、又「人格の人」と云ふ語がある、善いも惡いも人格、即ち其人の性格であるのに、之を高潔の士と云ふ意に使用して居る、又燒薯「十三里」と云ふのは「九里四里」である、「栗より」にては、栗よりも旨いのか不味いのか分らない筈であるに、栗よりも旨いと云ふ意に使用されて居る、其理由如何、これ皆社會が眞善美を標準として居るからである、現代社會に於て此標準を失はない人々が果して幾許あるだらう乎、滑稽半分にマヂメ半分の著者ではあるが、常々此標準に背かないツモリである

政教文藝の起原は悉く猥褻なり

進化說を骨子とせる新科學の上より見れば、道德觀念は原人が社會を組織する必要上發生せし思想の習性たること明かなり、而して其道德觀念の一たる羞恥の感の如きも、生存競爭の一事象より起りしものたること論なき所とす、裸體にして恥ざりしは原始時代の常態にあらずや、後世の政治家は其道德觀念を維持せんがため、普及せしめんがために法律を制定し、今は公然の猥褻行爲を禁じ、猥褻物品の販賣陳列を禁ずれども、享保七年十一月迄は春畫の出版を許し、明治五年十一月迄は猥褻行爲を罰するの法律は無かりしなり

抑も猥褻と云ふこと果して醜陋なりや否やと云ふに、これ人類存續上の最大必要事物にして、毫も恥づべき事、恥づべき物に非ず、然るに之を猥褻と目するに至りしは、原人時代に於ける生存競爭上の習慣、即ち掠奪防禦の必要上より出てたる秘密行爲の習慣が道德觀念に變化せしなり、故に猥褻とは人道の大本を客觀したる事にして、生殖の機關、性慾の遂行そのものは神聖と稱すべきなり、夫婦の同衾は道德法律の禁ずる所にあらず、只之を客觀的に露出し客觀的に描きて公表すること初めて猥褻たるなり

玆に述べんと欲するは、俗文學と猥褻との關係なるが、啻に俗文學のみならず、社會百般の事物は概ね性慾事物即ち猥褻に起因するものなり、人間の身體が所謂猥褻の行爲によつて生出せると同樣、人間の精神は所謂色氣によつて活動し、其精神の發作たる政治、宗教、文學、美術等、悉く猥褻に起因するものと斷言して憚らざるなり

◎政治　先づ政治の起原を說かん、抑も社會とは團結的生活を云ひ、其團結的生活は生存競爭上の必要より生じたる事なり、語を換へて云へば、自然淘汰の結果が社會を形成するに至りしなり、而して其社會の民衆を統御する政治は、超越せる剛勇者、即ち優勝者の壓制執行と云ふ點もあれど、要するに共益によつて成立せしものなり、其政治は原始時代に於ける人々の衣食住を安全ならしむると云ふよりも、尙一層烈强の事由たりしは、男女關係の問題なりとす、即ち分業協力といふ夫婦關係を馴致せし徑路は、性慾上の暴擧たる掠奪婚を制止し、次は種族生存に不利なる雜婚を禁ずるに至りしものにて、政治の本源は食物爭奪の爲めに起る格鬪よりも、其數の最も多かりし婦女掠奪の爲めに起る格鬪を防止すること、即ち男女間の性慾を牽制せし

にありと見るべし

宗教◎◎　の起原は生殖器崇拜にありしこと今や殆ど論なき所たるべし、陰陽和合、萬物生々の原力は神なりと信じて男根の模形物を道路の分岐點（即ち股間に似たる所）に祭りたること後の道祖神にて知るべし

道祖神を古代にては久奈止の神と云へり、久奈は男根の義なり（女陰はアタ）鶺鴒をニハクナブリと云ふ、庭にて男根を振る鳥との意なり

個人主唱の宗教は、人文稍發達したる後世の事なり、生殖器崇拜は自然に起りし宗教の本源にして、又偶像崇拜の率先たり、道祖神の變體と目さるゝ後世の大聖歡喜天に二股大根を供ふるも亦女陰を供ふるの意なり、春宮と稱し、子宮と稱するが如きも皆生殖器崇拜の餘習と見ざるべからず

文學◎◎　の起原も亦猥褻にあり、歴史は「みとのまくばひ」「交接教鳥」に初まり、『古事記』『日本書紀』の所載は今日譯して公表し難き所多々あるにあらずや、和歌は素盞嗚尊の「八雲たつ出雲八重垣妻ごめに」を濫觴として戀歌を和歌の生命とせり、『萬葉集』所載の戀歌を今日の俗語に譯すれば其淫靡聞くに堪へざるものあり、國文亦然り、小說の祖たる『竹取物語』は娘一人に婿八人の醜態を描けるもの、古草子『伊勢物語』は「昔男ありけり」の助倍談、『源氏物語』は好色の媒書なりと古人既に評せり、隨筆本たる『徒然草』は「色好まざらん男は玉の巵底なきが如し」と云へる艷法師の作なり、此外『風葉集』に引ける古物語本百數十種は、只その外題のみを見るも春畫目錄に均しきものならずや

われ恥かしき物語　ちゞに碎くる物語　ゆるさぬなか物語　忍ぶもぢずり物語　妻戀かぬる物語　夢の通ひ路物語　二世の友物語

美術◎◎　繪畫は生殖器の圖としてのしこし山或は草鞋蟲の如きものを描きしに初まることは、古今東西の繪心なき兒童が白壁又は便所の壁に怪しきものを描けるにても知るべし、彫刻も亦木材或は石材にて道祖の神體を刻せしに初まるなり、後世の考古學者が雷槌と稱して珍重する石棒の如き物も、原人の包莖時代に於ける石神本體なるべし、舞踊の起原も男女のドチ狂ひに初まること、今日尚行はる盆踊り又は西洋ダンスを見て推知すべし

斯くの如く、政治、宗教、文學、美術、等の起原は猥褻にありとすれば、其軟派文學、俗文學の起原も亦猥褻ならざるを得ざるべし、俗文學とは何ぞや、曰く、戯曲、小說、滑稽、雜俳等これなり

●●●淨瑠璃の祖と云へるは、小野お通の作『淨瑠璃十二段草子』なり、此物語は源義經が舍那王丸と云ひし十五の春、奥州に下る途次、三州矢矧の長者の家に宿り、其家の一人娘淨瑠璃姫に通じたる色事、所謂濡れに濡れたる言の葉を十二段に書き綴りたるものなり、當時のお國歌舞妓亦淫靡の節多し、元和偃武の後も尚戰亂の餘習として、剛壯を主とせる岡淸兵衞の金平本の如きもの一時盛んに行はれたれども、これに代りしは東洋のセキスピーヤ淨瑠璃中興の祖たる巣林子近松門左衞門なり、文學者某は「巣林子の作は絢爛高潔なれども後輩たる竹田出雲、並木宗輔、近松半二、西澤一風等は淫靡猥褻の作のみ」と云ひたれども、其巣林子の作『堀川波の鼓』には下女の部屋に夜這する醜狀を描き『冥途の飛脚』には「そんなら私はお湯わかいて腰湯して待ちます」と云ひ『關八州繋駒』には御殿女中の裸相撲を描き「脇へずつと外れては手負鳥見るやうで凄しかろと吹き出す」など猥褻至極のものも數多し

●●●假名草子の最も古き版本たる元和版の『秋の夜長物語』『鳥部山物語』、寛永版の若道物語』、承應版の『犬つれ〲』等は悉く男色の淫猥本にして、後の好色本(浮世草紙)は皆これに倣へるなり

●●●落語本の祖は安樂庵策傳の『醒睡笑』よりも古き『昨日は今日の物語』なり、此落語本全篇の過半は猥褻談にして、今日若し其一節にても拔載する者あらば、直ちに發賣禁止の處分を受くべきものなり、其後の『鹿の卷筆』より『噺の尻馬』に至る凡そ數百種の落語本は悉く皆淫靡の極を盡せるものなり

●●●浮世草紙は一名好色本と云ふ、其開祖は井原西鶴にして、天和二年の『好色一代男』を筆頭とす「消した所が戀の初まり」、世之助は五十四歳迄に三千七百四十二人の女を犯し、其六十歳の時には床の責め道具を船に滿載して女護島に渡りしと云ふなど、全篇色氣に醉はされてウンザリする物語なり、『好色二代男』『好色三代男』亦これに劣らず、『好色一代女』『好色五人女』は世之助に負けざる淫亂婦人、外に『男色大鑑』等のケツ作あり、これに續いて吉田半兵衞、石川流宣、都の錦、西澤よし、北條團水等、元祿の末までに二百餘種の好色本を著はし、錦文流、奥村政信、八文字屋自笑、江島其磧等の亞流者亦安永までに三百餘種の好色本を著はして世に公刊せり、明治の小說大家尾崎紅葉は西鶴崇拜の巨擘たり、小杉天外亦其尻甜りなり

享保七年十一月、徳川幕府は好色本禁止の令を下したれど

も、社會の要求は其禁令を無視せしめて止まず、寶曆の平賀源内は『痿陰隱逸傳』『長枕褥合戰』等の著を公刊せり

●●洒落本一名蒟蒻本と稱す、遊里に於ける賣女蕩兒の淫猥物語、享保の『兩巴巵言』寶曆の『異素六帖』明和の『遊子方言』天明の『吉原楊子』寬政の『仕懸文庫』『辰巳婦言』等、享和までに三四百種の公刊あり、主たる著者は山東京傳、十返舍一九の徒なり、是れ皆誨淫の書なりしが、當時著者及び版元の罰せらるゝ者續出せしがため終に閉塞し、これに代りしは人情本なり

●●人情本は文政二年の一九作『峯の初花』を初めとして傾城明烏の艶物數種出で、續いて爲永春水の『春色梅曆』『春色辰巳の園』『春色惠の花』等二百餘種あり、いづれも春畫を去ること遠からざる淫書なり

●●川柳本これも亦猥褻が其主要を占むるなり、安永五年の公刊本『滑稽末摘花』四冊全篇數百千句、悉く皆猥褻の句ならざるなし、川柳子の取材も亦色氣、即ち末番にありしこと之を見て知らる

●●吉原本と云へるもの寬文後に百四五十種あり、遊里研究家の重寶なれども、是亦悉く淫書の部類なり

此外、俗謠の起原も猥褻なり、俚諺の起原も猥褻なり、地口、物は付、冠付と云へる事も亦其起原は猥褻にありしこと古刊本にて知り得たり、只其例證を玆に擧ぐることを憚るのみなり

荷田春滿は元祿の頃に於て、中世以降の歌道が專ら淫靡に流るゝを慨し、之を矯正せんと欲して生涯戀歌を作らざりしと云ふ、又曲亭馬琴は寬政の頃に於て、蒟蒻本の如き誨淫の書は我ものするを好まずとて終身其著なかりしと云ふこれ超世的の見識として感賞すべき逸事なり、兩者その和歌の本源、戲作の本源、共に色氣猥褻にありし事を知らざるに非ざるべし、世の進歩と云ひ、文明と云ふ徑路の上より云へば、右の如き見識の人々ありて、社會の道德觀念を發達せしめ、趣味性を向上せしめ、其道德觀念終に法律制裁と成り、法律制裁あるがために又道德觀念を一層强からしめたる結果、今日の純潔高雅なる醇化の美域に達し得たるなり、起原猥褻なるが故に永久其猥褻を主とすべしと云ふは、文化の何たるを解せざる蠻的思想にして、人間の身體は所謂猥褻の行爲によつて生出せしものなるが故に、人間は日夜公然猥褻の行爲をなすべしと云ふに均しき愚論なり、予は只其起原の概略を述べて、學者の研究、政治、宗敎、美術家等の參考に資せんと欲するのみ

要は原始時代に於ける百事の起原は悉く自然の發作として天眞爛漫、毫も虚僞なきものたりしが故に、後の政治家たり宗教家たり文學家たり美術家たる人々は、其本源に顧みて、現今の如く表面の虚飾にのみ苦心して、其内實は猥褻以上の醜陋事態あることとなく、正直に露骨に、虚僞を避け形式を避けて、俯仰天地に恥ざる、所謂ザックバランの態度に出てられん事を望むにあり

本篇は予が大正四年四月二十三日、大阪文藝同攻會の講演會にて「俗文學と猥褻」と題して口述したる事の大意なり

美人の墓石に小便

穢多族の起原には種々ある、エタは餌取のヱトの轉訛である、エタをヱッタと云ふのは「備中」をビッチウと云ふのと同じ音便である、エタに穢多と云ふイヤな字を當篏たのは足利時代末期の坊主である、さて其穢多には、古代の鷹の餌取、牛馬の屍體拔ひ、犬殺し猫殺し、皮細工毛細工、膠製造など、不潔の職業に從事した者と、其身分が敵の俘虜(降服者)逃込みの罪人(潜伏者)除籍漂浪人(落魄者)等であるが、玆に一つ珍らしいのがある、それは事實か否か知らないが、特殊民視察として各地に巡回した人の直談であるから、全く無根の事とは思へない、それは斯うてある

丹波國のダン畠といふ所に一つの特殊部落がある、此部落の起原は、往昔その領主が管内巡視の際に、川端で洗濯をして居た妙齡の娘があつた、それが頗る非常の美人であつたので、領主の目にとまり、其心を動したので、領主は早速、案内役の代官に「あの美人を御殿へ上げよ」と命じた、そこで代官は、其娘の親と平常から仲が惡いので、今彼娘を殿の簾中へ入れたならば彼は娘のお蔭で時めくに違ひないと、即座の構ひ言に「あれは穢多の娘でございます」と云つた、有繋の領主も穢多と聞いて煩惱心も失せ「そうか、それなら止めろ」との仰せがあつた、さて代官は殿に穢多と言上した者を、普通民にして置く譯にゆかぬので、それよりあのダン畠の者は、素性を洗つて見ると穢多の筋である、穢多村だ／＼と云ふ事にして了つた、それで今日までも穢多部落と呼ばれて居るが、其部落の者は彼の美人たりし女のために代々汚名を被る事になつたのであるからとて、部落民一同は毎年四月幾日とかに、彼の女の墓所に行き、代る／＼其墓石に小便を垂れかけて、口々に罵ると云ふ事である、小便を垂れかけるのならば、代官某の墓石に對してすべきであるに、所謂お上の御威光を恐れて仕なかつたのてあらうが、美人はトンダ災難である

進步の究極は普遍的一致にあり

去る明治二十九年の六月、三陸地方大海嘯の時、予は友人木村大尉と共に、其被害地の視察に行つた、東京の上野から出發して仙臺で一泊し、翌朝一の關驛て下車して一里ほど歩き、舞草と云ふ北上川の岸から川舟に乘つて四里（小道廿四里）の溪流を下り、薄衣から猿石川の畔を通つて其夜は千厩で一泊し、翌日の正午頃初めて海岸地たる氣仙沼に着き、晝食のため或る宿屋に上つた、軈て出て來た女中が何かムニヤ〳〵云ふが一向解らない、兩人呆れて「解らん〳〵」と首を振る、女中が立去り入替つて來たのが三十男の番頭「ヘイ、御入來ませ、旦那方は御晝食でございますか、御宿泊でございますか」と明瞭に云ふ、前の女中とは異つた言葉てあるので、其理由を尋ねて見ると、東京の上野で驛夫を長く勤めて居たものだと云ふ、扨それから上下三里の綱木峠を越えて其夜高田と云ふ所で一泊したが、同じく女中の言葉が通じないので、番頭を呼んで見ると是亦明瞭に對談し得られた「君は話せるが何處の生れだ」と尋ねると「私は此土地の者てございますが、徵兵で仙臺へ行つて居たのと、平常東京の新聞を讀んで居ますので、旦那方の御言葉も能く解り、斯様にお話も出來るのでございます」と答へた、予は此時新聞の勢力の偉大な事を知ると共に、言語の一致も新聞紙の力に依つて全國一致の時が來るであらう、同じ日本國民てありながら、東京人と岩手人とが對談し得られない樣な狀態では、一國の進步は覺束ない、交通機關たる汽車汽船と、通信機關たる新聞雜誌とが全國に普及すれば、今の東京語が日本語に成るであらうと感じた事があつた

總て事物の進步は、普遍的一般的にならねば其究極に達したものとは云へない、啻に言語の一致のみでなく、知識、服裝、住居、體格等が普遍一致てなくば、一國の進步とは云へないのである

平安朝時代には文學が盛んであつたと云つても、それは宮仕の人か寺の坊主位に過ぎなかつた、足利時代から德川時代に移つてからは漸々學問が盛んに成つて、四民共に學問をする者が殖えた、軟文學の開祖と云ふべき井原西鶴は大阪の商人、漢文學皷吹の泰斗五井蘭洲の父は大和の農民であつた、斯の如く學問が町人百姓の間にまで行はれる樣には成つたが、マダ一般的普遍的とは云へない、明治の聖代に大中小學校の制定があつて以來、初めて敎育の普及、知

識の進歩といふ狀態に成りかけて居るのである

服裝も亦一致しなければならぬ、あれは武家の者だ、あれは町家の者だと云ふなど、服裝に階級制定がある間は蠻習の失せない時代と云つてよい、近頃婦人の服裝を見て嘆息する頑固人がある、奥樣だか藝妓だか女優だか妾だか解らない樣な服裝をする事が流行るのは、亡國の兆など云ふが我輩はそれに反對する、服裝の一致は結構である、互に他の長所を採つて容姿を美裝するのは好い事であつて惡弊ではない、頑固連は單に婦人の服裝のみを咎めるが、近頃の男子の服裝は如何であるか、殆んど四民一致ではないか、先刻此壇上で講滿された原桂堂君などを、大阪毎日新聞記者と云ふ事を知らぬ者に、只其服裝と風采とに據つて職業を判斷せよと云つたならば、醫者か辯護士か官吏か會社員か、或ば金持の若旦那かサッパリ解らないと云ふであらう或る職服は例外として、四民一致の服裝をする樣にならねば、服裝の進歩とは云へない、服裝一致は人權同格の表裝である

此外、體格でも住居でも、同じく全國一致の進歩を遂げなければ、文明國とは云へないのであるが、我輩は單に我日本のみでなく、世界的に觀察して、全世界の言語、知識、服裝、住居、體格等が一致しなければ、人類の進歩即ち文明世界、理想世界とは云へないと思ふのである、日本語だの支那語だの獨逸語だのと云ふ區別があつて、通辯人がなくては對談が出來ない樣な間は、マダ言語の大進歩とは云へない、各國の長所を採つた世界語が出來、世界服が出來ねばならぬ、人種も今の樣に幾つにも分れて居ては體格の大進歩でない、尾崎行雄の如く、長井藥學博士の如く異種人と結婚し、又泰西諸國の帝室が相結婚するが如く各國人が相互に結婚して、其體格の弱所を淘汰された優秀人種の出來る事を希望する、墺塞戰爭と云ひ歐洲大混亂と云ふも畢竟はスラブ人種ゼルマン人種など云ふ異人種の爭ひが原因である、故に人種が一致すれば國際戰爭も無くなる

此說の如く全世界が一致した時には、我日本の適種生存狀態が如何であるかと云ふに、今の英語が世界語の主要となるにしても、我日本の「ミカド」と云ふ語が既に世界語らしくなつて居るのと同樣、我國の長所は多く採用されてあらうが、假令衣食住の狀態や體格などは劣敗消滅の部分に屬しても、日本魂と云ふ勇壯義俠の精神は、世界一致の精神となつて長く存續するに相違ないと信ずる云々

大正三年八月、大阪毎日新聞社が濱寺公會堂で開催した講演會の際、予が飛入として出演した事の大意である

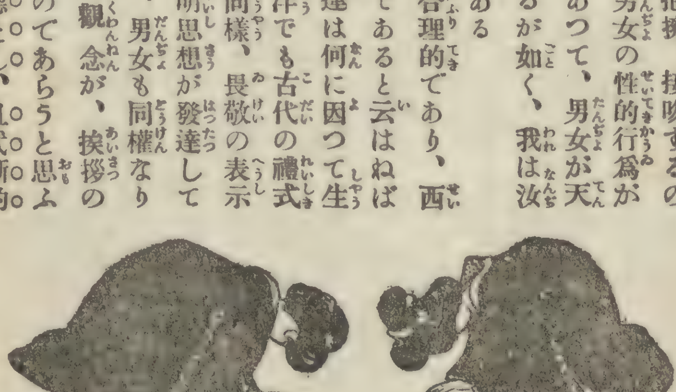
自己の容貌を忘れる理由

基督教の雅各書に「それ道を聴くのみにて之を行はざる人は、鏡に向つて本來の面を見る人に似たり、かれ己を照し觀て去り、後直ちに其如何なる相貌なりしかを忘る」とある、古今内外同一の心理であるが、其自己の容貌を忘れるのは、注意力が起らぬからで、注意力は自己の生存に必要な爲めに起るのであつて、他人には恩敵があるから、能く注意して其顔を記憶して置かないと、自己の利害に關係するが、自己には其關係が無いから注意力が働かず、隨つて直に忘れるのだらうと思ふ、但し自己の寫眞はヤヽ客觀的だから、鏡で見たのよりも幾分か能く記憶し得るのである

禮儀の相違

日本人の挨拶と西洋人の挨拶とは其形式が違つて居る、日本人は低頭平身であるが、西洋人は握手、抱擁、接吻である、此形式を心理的社會的に考察して見ると、日本人の挨拶は「畏敬」の表示であり、西洋人の挨拶は「愛情」の表示である「皆様御機嫌よろしいか」とか「久々御無沙汰いたして相濟みません」とか云つて頭を下げるのは、深切らしい言葉てあるが、實は畏敬のお世辭てある、これは野蠻時代の遺習であつて、敵に降服するの意を表示するとか、敵愾心を持つて居ない證明の表示が日常の禮儀に變化したのである、西洋人が握手、抱擁、接吻するのは、人倫の大本たる男女の性的行爲が挨拶に變化したのであつて、男女が天分として異性を愛するが如く、我は汝を愛すと云ふ表示である

故に日本人の挨拶は合理的であり、西洋人の挨拶は本能的であると云はねばならぬ、此兩者の相違は何に因つて生じたかと云ふに、西洋でも古代の禮式は現在の野蠻民族と同樣、畏敬の表示てあつたが、早く文明思想が發達して人權は對等なりとか、男女も同權なりとか云ふ進歩的社會觀念が、挨拶の形式を變化せしめたのてあらうと思ふ東洋は柔和服從を美德とし、且武斷的の政治家が自己防衛のために禮儀をヤカマシク云つたので依然舊態を改めないのであらう



人類の最大發明は直立直行

今日の下等動物と祖先を同くせる人類が、特に進化して文明を形成するに到つたのは、我々人類の精神及び肉體が發達して、諸事諸物を發見發明せしに因るのであるが、社會學者は、原人時代に於ける人類の大發見大發明を列擧して火の發見、器具の發見發明、言語、牧畜、農耕等の發明を有要至益のものとし、更にそれよりも最大優秀奇抜の大發明は、人類が先づ四ッ這を廢して直立直行することを案出した一事であると論じて居る

動物の中には四足獸なるものあり、たとへば犬の如し、又四手獸なるものあり、たとへば猿の如し、人は四足にもあらず、又四手にもあらずして、二手二足の動物なり人の四肢が斯く二部に分れて、下の二肢は歩行の用を爲し、上の二肢は捕獲その他萬般の用を爲すを得るは、これ正に人類が他の動物に優りて文明に進み得し一の重要なる理由ならずんばあらず、若し人にして四肢共に地に附くとせば、その目は常に地下に向ふが故に、その心は自から上天の事を考ふること難かるべく、隨つて高尚なる思想を懷くこと能はざるべし、直立直行は啻に外見に於て人を下等動物と異らしむるのみならず、こは人類の發達に最も肝要なる影響を有するものなり、加之、手足分業の結果として、下の二肢は歩行を專業とする事となりたれば、上の二肢は自から歩行の務めを離れて、自由に他の萬般の用を爲すを得るに至る、此の自由なる手の發見は、人をして今日の如く進歩せしむるに於て甚だ勢力あるなり、若し手を以て歩行の用に供せざるを得ざるものならしめば、その不便は如何許りぞや、戰ふに於て、禦ぐに於て、食物を得るに於て、其外總ての事を爲すに於て、手の便利は總て之れを失はざるを得ざるに至るべし、故に手足分業即ち直立直行の發見は、人類第一の最も肝要至益の發見なり

斯くの如く、人類の歩行は初め四ッ這であつたのを、足のみで歩く事にしたのである、そして社會學の原則によつて察するに、人類が初め四ッ這であつた事は、人類發達の順序を代表せる子供が、幼い時に四ッ這であるのが確實の證明である、又原人時代の幾分を保留せる現在の野蠻人に就て見ても、其事が理解される、文明人の顏の角度は九十であるが、野蠻人の顏の角度は五六十度であつて、四ッ這になつても前方を見得らるゝやうに出來て居る、又野蠻人が

四ッ這になつて走つたり、四ッ這で樹に登ることの巧みであるのも、皆原人時代のオモカゲが殘つて居るのである、今日の我々人種は四ッ這になると、前方を見るに困難であるが、それは直立直行の習慣によつて、骨骼が順應變化した結果に過ぎない、最初はヤハリ今日の野蠻人と同樣の角度であつたに違ひない

それから又、人類が最初四ッ這であつた時は犬の如く四足か、或は猿の如く四手であつたかと云ふ問題に就て『萬物同根論』に最初は四足であつたのが、漸次進化して四手となつた事を說いた中に、左の如く記してある、これに據つても人類が手足分業の大發明をした事實を認め得られる

類人猿の足の拇趾は他の四本の指と對向になつて居て、そして手の拇指と同じやうに色々な用をする、併し此の差異はもと人猿兩種屬の生活の方法の差異から來たもので、人の如く專ら地上に住む者には、足の拇趾が他の趾と對向になるやうな必要はないが、樹上生活の類人猿にとつては是れ實に缺く可らざる性質である、所がヘッケルは云ふて居る、「野蠻人の中には足の拇趾が手の拇指と國じ樣に他の四本の指と對向にする事の出來る種屬がある。又最も發達した文明人ですら、其の赤子は手で物を握ると同じやうに、容易く足で物を握る事が出來る。支那の船夫は其の足で櫂を漕ぐ、ベンガルの勞働者も亦其の足で機を織る、黑人は其の足の拇趾が自由に動くので樹に上る時などは足で樹の枝をつかまへる」と

社會は分業によつて發達したのであるが、それよりも前に人類が身體の手と足の分業を案出したのが發達の基となつて、今日の文明を得られたのである、實に我々の祖先は有難い奇拔の發明をして與れたものである

因つて云ふ、今日の文明人種たる者が、夜間犬や猿の如く四ッ這になつて、向見ずにウロ〱するのは、原人時代の野蠻的態度たる事が明白ではないか

故に我々文明人は何處までも原人の大發明たる直立を勵行して、直情、直言、直向、直道、直進、直行、以て其手を地に着くるが如き野蠻的態度の醜事なからんことを望む

●亭主の希望　何處でも寄れば色ばたし、ア、おらはおぼこな振袖がいゝ「イヤ〱新造よりも年增がおもしろい」「イヤおらは地色は嫌ひだ、比丘尼がいゝ」「いや〱何もいらぬ後家がよい、兎角後家のと〱」と云へば、皆々口をそろへて「そふだ〱後家〱」と云へば、一人が「おらが嬶も早く後家にしたい」安永元年版(聞上手)

醜

大正五年一月一日發行『日本及日本人』

酉を鳥とし、水鳥を酒とするが、酉の字は尊、樽等の酋に通ずるものであつて、「さけ」と訓してもよからうと思ふ、釀、醇、酸、酌、酣、醉、醒等は皆酉に從つて居る、それで「醜」とは、酉に醉つた鬼の樣な相貌のわるいのを云ふのであらう、そして字彙に醜は類也衆也モロ／＼也とあつて數の多いものとされて居る、成程美人は少く醜婦は多い、我々に美感を與へる眞人善人は少くて、醜感を起させる僞人惡人が多い

さて過る日、鳶魚先生が弊寓へ御入來に相成り、今日は政敎社代表の使者として御依賴に罷り出た、その用件は「醜」の一字題に就て何か原稿を書いてお貰ひしたいとの仰せであつた、予は思想淺薄行文拙劣の者、迚も貴誌に寄稿する程の價値あるものは出來ない、別して哲學上の解說などは柄にない事、眞ッ平御免を蒙ります、シカモ外に種々の題もあらうに、態々拙者に「醜」を割り當てるとは實にケシカラヌ、所謂人樣を馬鹿にして居るのである、拙者を醜陋醜劣の人物と見たのか、或は醜事醜畫の研究者と見たのか知らないが、兎に角、醜を以て人を遇するのは、甚だしい無禮ではござらぬか、先づ拙者を醜陋醜劣の人物と見たとしても、衆評必ずしも當れりではない、古今の大醜婦と傳へられて居る板額は其實美人であつたとの考證あり、由井正雪は叛逆の大惡人と云はれて居たが、我輩は德川家康の如き忘恩狡猾の狸親爺よりもズット善人であると思ふ、又酉の町の賣れ殘り、鬼門除けの鬼瓦、無鹽がなければお尋ね者、手放しのべカッコウ、炭團に目鼻、狆が嚏した樣な醜女でも、その心だてだにヤサシイ者ならば、我輩はそれを美人と見るのである、又拙者を醜事醜畫の研究者と見たものとしても、我輩は男女の性交を天の美祿とし、其形容畫を人の美術として尊重するのである、凡俗の美と稱し醜と稱する事物、その眞相の反對ならざるもの幾許かある、忠孝愛國を粧ふ美論、臭骸汚點を粧ふ美人、慈善公益を粧ふ美擧、之を悉く醜論、醜人、醜擧と見てもよい、我輩は眞善美を美と感じ、僞惡醜を醜と感じない者ではないが、それよりも虛僞の眞善美を醜中の最も大なる醜と感ずる者である、責任支出の講義者が無責任論者に變じ、憲政擁護の辯士が憲法無視の大臣席に居据り、偉人の祭祀を名として人爵奪取の不法事を敢てし、悔悟隱退を口實として元兇の檢擧を見逭がすが如きは、國家の風敎を害する大僞大惡

大醜の醜事と云はざるを得ない、彼の奴共は實に二た目と見られない「シコヲ」である、それだから、醜の醜たる「醜」論の一篇を望むのならば、去つて要路の權門に走れだネー政教社の代表者殿、御苦勞ながら近頃のおカド違ひだ、御免候へタワイ〳〵と拒絕したが、鳶魚先生曰く「ソレです〳〵、其論を書いてさへ下さればよいのです、哲學も變哲學も入つたものぢやありませぬ」との仰せ

水鳥に醉つぱらつて、鬼の面を被つたヨタくりごと、類也衆也の平凡論を脫しない醜文、之をこれ醜論の雄篇と見るのが、眞の學者であり、眞の讀者であらうか

義經再興記の譯者

事は古聞だが、マダ外の新聞雜誌にも出たことのないチョット面白い話しだから思ひ出しのまゝを茲に掲げる

明治十八年の末、予が十九歲の時に見もし聞きもした顚末だけを記すのだ、其頃今の文學博士末松謙澄氏が英國に留學中、日本の古代武將たる源義經の事を英文で書いて一冊の書物として彼方此方の人に配付した、其記事の要點は義經は蝦夷から韃靼へ渡つて行つて、終に彼の國の王となつた、今の清朝の大祖たる愛親覺羅氏は義經の子孫であるとの事を書いて、我の本國には斯樣な古代武將があつたぞアマリ輕蔑して呉れまいよと、實説とは信ぜられない古來の傳説を種とした大法螺的の著述であるのだ、末松氏は此書冊五六部を慶應義塾の福澤諭吉氏へも送つて來て、拙者は斯樣な著作を公にして英國人に配つた、お閑暇の折に御一讀ありたしとの事であつた、福澤氏これを讀んで見て、これはチョット面白い、誰か之を飜譯して書肆に出版させてはドーヂヤ、と塾生に示した、其塾生の中に内田彌八といふ者があつて、先生私がやつて見ませうと、早速それを飜譯して、題條を『義經再興記』と名けた、肩書には内田彌八譯述と署したのみて、原著者の名を署さない、それは末松謙澄著としては面白くない、英書であるから英國人の著述らしく見せかけたならば、日本の義經の事を外國人が叙してあるのは珍らしいと云つて賣行きも違ふだらうとのイカサマ目算であるのだ、これを當時の丸善書店をはじめ春陽堂其他あらゆる出版屋へ持廻つて、飜譯料三十圓で買つて呉れと賴んだが、春陽堂が十圓ならば買つて見ませうと云つたのみで、應ずる者が無かつたが、結局上田屋といふ書肆が、三十圓では迚も見込がたゝないから一部三錢の押印料としてならば出版しませう、五百部賣れゝば十五圓千

部賣れゝば三十圓といふ事にしては如何ですとの應待、内田はそれならばよからうと相談が定まつて、いよ／＼上田屋から定價九十錢の物にして出版した、ところが案外の好景氣で、初版賣切れ、再版三版五版八版と凡そ十版ほど續ける大賣行であつたので、最初相手にせなかつた書肆は殘念がつて、三十圓が五十圓でも買つてやればよかつたにと羨んだり口惜がつた者も多かつたさうだ、斯る好景氣であつたから、内田は一部三錢の押印料として上田屋から千圓ほど取つた、芝區松本町の八百屋の二階に三圓五十錢で下宿をして毎日慶應義塾へ通學して居た内田は千圓ほどの大金が一時に入つて來たので、奴さんの喜び一方ならず、俄大盡になつた氣で贅澤をきめこみ、こんな八百屋の二階などに住むべき身でないと、芝日蔭町通りの一家を借り受けこゝへ妾を置いて小さな書店を開かせ、自分は其妾宅から慶應義塾へ通つて居て、其間に『婦人地球週遊記』といふ本などを自分で出版したが、これは豫想ほどには賣れなかつた、彼是する間に内田は千圓の金を遣ひ盡したものと見えて、其後四ケ月ほど經つて何處ともなく消えてし舞つた、後で聞けば金が無くなつたので、妾とも別れて又元の下宿屋仕居になつたとやら、其後内田彌八と云ふ名前はトント聞かないが、今に無事で居るのか、死んで仕舞つたのか、それも分らない、話しはこれだけであるが、兎に角チョット面白いてはないか、當今の著述家中にも此内田に似た者もあるであらう

因みにいふ、義經が韃靼へ渡つたと云ふ事は虚説に違ひない、昔から斯んな虚説は隨分行はれて居る、猿丸太夫は弓削道鏡だ、天海僧正は明智光秀だなど云ふ虚説もあるが、彼の平賀源内が江戸の獄中で死んだと云ふのは嘘だ、實は田沼侯が源内の才氣を愛して居たので、彼を殺人罪として處分するに忍びずとて、密に獄吏に命じて一時魔睡の醫藥を服させ、これを獄死として放つたのであるから、七十歳の頃駿河に居たのを見たとか、或は北海道て死んだなど、跡方の無い事を言觸らす者がある、西郷隆盛が露國に居るなどの說もあつて、一時人々の噂さにもなつた、是等は名士の末路を惜むのあまり、種々の噓說を構造して社會の好奇心に投ぜしめるのだ

●虱と綿屑　小僧が「もし旦那樣、お肩に虱が居ります」とつまみてとれば「コリヤ馬鹿者奴、そんな事を大きな聲で云ふものじやないよ」と叱れば、小僧聲を低くして「ハイこれは綿屑でござりました　安永二年版(開上手)

平民共の崇祖敬神

官僚の御方々は世界思潮の流入に驚いて、今更に崇祖敬神の國民感情を皷吹して居るが、立派な系圖持の人々は祖先も明瞭で其祖先を崇拝するであらうが、我々平民共は精々



三代か五代の祖先の名を知るのみて、其前は南洋の漂流人が支那の移住民かアイヌの合子か、それが少も判らない、そこで祖先崇拝は古來各邦土に行はれた通りの生殖器を崇拝するより外に途はないのである

それから又神州の民たる以上、敬神は無論の事であるが、現在の如く諸物價暴騰で其日の生活に苦んで居る平民共は伊勢や出雲へ參詣する餘裕の旅費がないから、當分自宅で八百萬神の一たる貧乏神を崇拝する事にせねばなるまい

神の代理たる女

生理的にも心理的にも、其天性として無智無學者の多い婦人中に、敎祖と稱し神女と呼ばれる者が少くない、彼の天理敎の中山ミキ、蓮門敎の島村ミキ、大本敎の出口ナホ、千里眼婦人と囃された御船千鶴子、長尾郁子、此外一般に巫女、稲荷下げなど云はるゝ者、さてはシャーマン敎のムータン、アイヌのツウスクルと稱する易者、豫言者、法術者等は皆女に限られて居る

これは要ずるに、ヒステリー性に富んだ女が、其無智無學なるが故に、幻覺妄想等に囚はれて、我は神の代理者なり靈覺者なりの妄念を起し、或は其二重人格催眠暗示等、變態心理の發現を利用せんとする山師輩に擒がれて愚盲者を籠絡し、其群集の愚盲者より尊信さるゝに至るのである、時勢はヒステリー性の女を倍々多く産出せしめるから、今後は斯る女の輩出が一層増加するであらう

人糞を精製して食物とする發明

「食ふことが出來ぬので、何處かへ勤めたいと思ふが、生憎口が無くて困る」「さうか、口が無くては食ふに困るだらう」と云ふのは落語であるが、現に口があつて食ふに困つてゐる人間が數多くある、日支問題といふも畢竟は日支人の食ふ問題である、隣國に好い所があれば、追々とそれを食ひ潰しに行くも可からうが、いよ／＼人口が増加して、その行くべき土地が無くなつたら如何する、マルサスの人口論は非認すべき説としても、現在食ふに困る人々が多いのを見ると、ミルの人口論もあまりあてにならない

そこで我々は現在人のため、子孫のために食物を得る途を開かねばならぬ、陸上の動植物で足りない時には、海中に發展すればよいと云ふ地理學者もあるが、我輩はそれ程までにしなくても、容易く食物を得る途が手近にあると思ふ

「人間は畢竟食物の化體に外ならず」と云つた哲學者がある、然し是は反對にも見得られる、其譯は、米や大根を食つて居る人間は、植物、即ち食物の化體のやうであるが、其米や大根は人間の糞や小便で成長するのであるから「植物は人糞の化體に外ならず」と云つても可いからである、

そこで人間の食物たる植物が人糞の化體であるとすれば、人間は人間の糞を食ふて生きて居る者とも云へるのである

黒鯛は人間の糞を食ふて肉が付き、人間は黒鯛の肉を食ふて肥滿する、黒鯛が人間に成り、人間が黒鯛に成る、鯛か人か、人か鯛か、茅渟の浦岸では、只その陸上に棲むのと水中に棲むのとの別があるに過ぎない、ケツタイの奴とかエタイの分らぬ人間など云ふ語は、これから出來たのかも知れない、田や畑に撒いて稲を肥やし野菜を肥やし、水中に垂れ流して鯛を肥やし得る精分のある人糞これを化學的に精製したならば、必ず人間に相當した食物を得られる事と思ふ、學者の分析表によると、人糞には植物細胞素、筋纎維脂肪、砂糖、澱粉、乳脂酸粘液素、炭酸石灰、膽色素等が含有されて居ると云ふから、その人體に有益な分子だけを採つて、それに何等かを加味したならば、人間の食物として相當なものが出來るに違ひない、工業化學の進歩した今日、それ位の發明が出來なくて如何する、そこで人糞精製食物株式會社と云ふやうな大きな會社を起して、各地に大工場を設けたら好からうぢやないか

そして其製品は、今の大臣以下各官吏、華族連、紳商輩、政黨員、新聞記者等をお得意先として盛んに賣込むべしで

ある、『俚言集覧』にもある「糞喰らへ」と云ふ語は、マンザラの罵言でなく、人間社會の活動場裏に有意味のものと見る、そこで我輩は此議を案出したのである

男が孕む父なし娘

これは變態生理でなく正態生理の一原則を説くのである、知識的好奇心を挑發すべく珍妙な標題を附けて、未知の人々に驚異の眼を張らしめるに過ぎない

生物の分子は單細胞であるが、生殖素の分泌器たる男の睾丸内に産出する單細胞が分裂して原精細胞に成り、原精細胞が又分裂して精母細胞に成り、其精母細胞が更に又分裂して精娘細胞に成り、精娘細胞が又々分裂して精孫細胞に成り、其精孫が漸く精蟲に變ずるのである、精蟲は女の卵子に侵入し、それが分裂繁殖して複細胞たる人體を組成するのである

生物は陰陽の兩性が結合して産出するのであるけれども、分子たる單細胞の時代には、父なくして母のみが娘を生み娘が孫を生むのである、即ち精蟲も父なし子であつて、それが男の睾丸内に於ける事であるから、男が孕む父なし娘と云つても、生理學上では無理な標題でない

生娘同盟黴毒の事ふれ

「予が故郷豫州などは遊女の類決して無し、其代り娘も下婢も後家も婆様も自墮落なり、然れども賣物でなければ、親切づくならでは成らず、然るに土地の風癖にて黴毒を強く恐れ黴家と手を握りてもうつると心得きつく辭がり逃廻る故に、一旦疳瘡でも煩ふたりと聞けば、女同士が言合し近所ばかりか近在近郷迄、何村の何右衛門殿の子何兵衛殿は黴毒かいて居るげな、必ず相手になるまいぞ、お前の友達のお吉さまにも云ふてあげ、隣村のお三さまにも知らせて呉れと、五里も七里も下札が廻る故に、色事が仕度ても相手はなし、それが幸となつてすつぱりと根が拔ける、繁華の地は三十二文の切賣より、二朱にても一兩にても器量次第、金さへ持つて行けば陰莖が腐つてあつても相手ありそこで病の根を拔く所か、體も身代も根本から腐らして了ふに至る、歎くべき事なり」

右の項は、天保十一年頃に大阪の住人水野澤齋といふ醫者が著して自ら發行して『養生辯』といふ本の中にあつた事を轉載したのである

寧ろ惡を勸めよ

人といふものは元來依怙地なのだから、他人が西向けといへば東向き、秘密だといへば聞きたがる、これは何人にも免れない處の性情である

人生教育の事も之と同理であつて、今の教育家は無暗に善を爲せ善を爲せと、口を酸ッぱくして頻に喧しく教育して居るが、その効能が少ない、我輩が思ふには幾許教育家が善を爲せやうと力味だ處で、現今の如く、人の模範ともなるべき輩があらん限の惡事を働いて、國家の利益と國民の福祉を踏附にして居る有樣では骨折つて善の教育をするだけが損である、現に國民の代表たる代議士でさへ白晝公然と惡事を働く世の中ぢや無いか、彼等迚も固より家庭や學校で惡い事をしろと教育せられた譯では無く、皆善の教育を受けた者であるが、それにも拘はらず惡事を働くのは、これ其天性の依怙地が然らしむる處である、こんな依怙地な人間共にいくら善を爲よといつた處で其効能は無い、却つて餘計意地に成つて惡事をするばかりである

今日の社會は實に多くの人間が皆惡事を働いて居るのであるが、よし偶ま眞面目に善事をしやうとする者があつても其境遇が惡事をなさしめる事になるのだから仕方が無い、亞聖パウロもこんなことをいつて居る

善は我卽ち我肉に居らざるを知る、そは願ふ所我に在れども善を行ふことを得ざれば也、我願ふ所の善は之を行はず反つて願はざる所の惡は之を行へり

パウロでさへも其眞心は依怙地の性に勝つことが出來なかつたと見える、されば況して依怙地心の強い下品の人間共が、善を爲せといはれても矢張り惡事を爲るのは止むを得ないことである

だから苟くも國民全體を善に導かんとならば、宜しく惡事を爲すことを奬勵すべしである、さうすれば彼等は又依怙地に成つて、皆競つて善を爲さうとするに違ひ無い

尤もさう成れば、十年一日の如く廉月給で馬鹿正直に勤めて居る樣な教員共は、訓導たるの資格が無いから、ドシドシ放逐して了つて、教職には成る可く惡事に卓越した人間を選び、讀本等も無論改訂して、盛に石川五右衛門や鼠小僧などの偉蹟を研究さすがよい

どうだヘッポコ共、眞面目に此名案を實行して見る氣は無いか、物は試しぢや若しも實蹟が擧らなかつた處が元々の話で、惡社會は依然たる惡社會であるだけでは無いか

予の母は替玉なり

世間に花嫁の替玉といふ話は澤山あつて、珍らしくもないが、茲に予は自叙傳の發端とも云ふべき一事を掲出する

予の郷里は讃岐の小野といふ中讃の地であるが、予の母の實家は阿波國に接した大山の麓、勝浦といふ山間で、庄屋をして居た佐野といふ家である、母の父は佐野桂浦と號して畫竹と詩作の名人であつた、其二番目の娘が予の母であるが、此母が予の父に嫁した時の事に就て、外面滑稽、内實悲慘の實話がある

頃は嘉永三年の春、近家の者が予の祖父母に對つて云ふには「御内の若旦那も今年二十二におなりですが、嫁さんをお貰ひになつては如何です、幸ひ勝浦の佐野の二番娘は容色もよし、賢いお方である上、仕度持參も是々するといふし、此方も庄屋、彼方も庄屋、誠に似合の話、是非お貰ひなさい」との媒入口がもとで、終に見合をする事になつたそして見合は男の方から女の方の家へ出かけて行くのが、讃岐中部の風習である、父は花嫁の見立とて喜び勇んで、五里の長途を馬に乘つて勝浦の佐野家に行つた、ソリヤ婿樣のお入と、客間に通されて、待つて居ると、向ふの襖の間から、何者かこそ〳〵覗く樣子であつたが、やがてスーツと襖が開くと、しやなり〳〵と現はれ出たのが、年の頃十八九の頗る美人で、其嬌羞を帶びた姿態は、青春の血湧ける父には、天女の降り來つたかと思ふ程に見えたらしい、そこで父の滿悦此上もなく、相談頓に整ひ、いよ〳〵幾久敷の結納も濟んで、黄道吉日といへる輿入の日となつた、その日の午前には「簞笥長持屏風箱それにつゞいて挾み箱云々」といへる童謠よろしくあつて、黄昏過ぎには花嫁御の輿入があつた、それから式の如く三々九度の盃も濟み、高砂の謠も止んで、イザ御床入といふ段になつて、綿帽子を取除けた花嫁の顏を見ると、豈に圖らんや過ぎし日見合をした女とは違つて居る、此時父の衷心は如何であつたゞらうか、こゝが此物語の要點である

二人の中に十一人の子が出來て、その末男の予が二十歳になる頃、父が予に當時の事を語るには「佐野の親父は如何にも人を愚視にした事をする奴だと腹が立つて堪らなかつたので、此婚禮には申分あつて中止だぞと怒鳴らうと思つたが、又熟々考へ直して、今此嫁を替玉だといつて歸したならば、生恥をさらさせる事になり、再び他へ縁附く談の遠いは勿論、佐野の一家もいかさま師との評判が立つて面

目もなからう、此方も多くの人々を招いて一大盛宴といふ場合に、興ざめごとを聞かして退散させるのも本意でない佐野の親父の仕方は憎いと云ふもの〻これも子の身を思ふ親心から出たこと、深く責むべき罪惡でもない、旁々今宵は我慢をするに限る、替玉といつても、鷺と烏の相違でなく、少々姉の容色より劣つて居た所で、心だてさへ良ければ結構のこと、花三日、容色は一時のもの、これも前世から繋がる縁と諦めれば、腹を立てるも愚の話、いよ〱氣に入らぬ事があれば、後日になつて離縁しても遲くはない兎も角今宵は默つて無事に濟ませるのが、得策だと考へ直して、目出度夫婦の契をしたのが、今の母者人である、そして我が佐野家へ見合に行つた時出て來た女は、母者人の姉で、當時ハヤ近所の長善寺の若坊に嫁入することになつて居て、此家の母者人と同じ頃に長善寺へ輿入したが、姉は始終病身で、三十になるやならずに死んで了つた、此家の母者人は今年六十に近い長壽、替玉は幸か不幸か、お前等も考へて見よ、自分で自分の才能が他人に優れて居ると思へば、それは母者人のお蔭であるとせなければならない長善寺へ行つた姉が此家へ來たのであつたならば、お前等は生れて居ない、姉や兄も繼母にかゝる不仕合にあふわけ

ヨシお前が生れたとしても、母の體質と精神とが違つて居ては、お前のやうな人間は出來ない筈だ、殊にお前は十一人の同胞中で、學問讀書が好きといふが、それは此家の血統を享けたのではなく、母者人の父が書作や讀書を好いて居た遺傳によるのであらう、兎も角替玉であつた母者人の事は、難有く思はなければならぬぞ云々」と

斯樣な血因緣の次第によるのであるか、予は多くの兄姉妹中で、最も母に愛された、予が東京に居た若い頃は、我儘をいつて幾度となく鄕里の母を泣かせた事がある、父に内々で金を送つて與れた事は數知れず、予が二十三歲の時、雜誌の記事一件で三年入獄した折にも、長い間母に心配をかけた、予が出獄した時、母は予に再び雜誌などを發行するなとて、泣いて戒められた事もあつた、（予は其意に反して今に雜誌道樂が止まない）、母は六十三歲で歿したが、若し予が母に心配をかけなかつたならば、母はマダ十年以上生延びたかも知れないと、時々思ひ出して、不孝の罪で身を責める事がある、「宥させ給へ母上樣」と人知れず涙に袖をぬらす事もある、予が折々鄕里の實家に歸省して、感激身に逼るものは、四圍の山河や舊知の人々ではない、此部屋は母上樣の居られた所、あの畠は母上樣が好きな花を作

られた所、など、母の事のみを思ひ出して、啜泣に堪へないことが多い、亡きあとの今日も尚、斯くの如き感を起させるのは、是れ皆花嫁の替玉であつた母の仁慈深かりしを思出すによるのである

更に又繰返さん、予の母が替玉でなかつたならば、予は此世に生れ出ないのである、随つて種々な異つた雜誌を發行する人も此世に出ないのであると知りたまへ

舌出し菅公の木像

國家的感情に激して一身を犠牲に供する覺悟で居る所へ、圖らずも脱俗的好古心を挑發されるやうな不調和の事が生じて來る、人世は實に奇妙なものである

大正三年三月某日の夕方、濱寺公園に居た時、近傍の理髪店で髯を剃つて歸宅すると、見知らぬ人が是非御目にかゝりたいと云つて玄關に待つて居ますよと家人が云ふ、例の警察の奴か又は食詰者の無心かであらうと思つて、早速會つて見ると案外

「ワタクシは御郷里讃岐瀧宮の者でございます、貴方は御若い時から御郷里においでにならないから御承知はないかも存じませんが、ワタクシは何某の親族何某と申す田舍での骨董商人で、此度或用向で上阪いたした序でに、二三の古物を持つて參りましたが、一つ御鑑定に與かつて御買取か又は御紹介を願ひたい品がございます」と述べる

「さうですか、兎も角實物を見ませう」と答へると、新らしい木箱から古い木像一體を取出して見せる、高さ一尺五寸程の菅公舌出しの座像である、其説明がスコブル面白い

「御承知の通り、菅原道實公は仁和三年讃岐守に任ぜられまして瀧宮に三年御在任でありましたが、當時の臣下七學士の一人たる儒者有岡牡丹の娘にお藤の方と申す美人がありました、菅公は此美人をお妾とせられて、頗る御意に適ひ、殆ど毎夜の如く通はせられたのであります、其妾宅の跡は、只今も北村の有岡にあるおふじ天神の社になつて居る所でございます、然るところ、菅公は任滿ちて京にお歸りの事となりました、飽かぬ別れの御かたみとして、菅公御手づから刻ませられてお藤の方に渡されたのが此御木像でございます、其後轉々して、近頃までは丸龜の某名家に在りましたが、月岡雪鼎の畫幅と交換して、此方の手に移つたのであります、大阪の或お方が「暫く待つて居ろ、近日東京から根津嘉一郎が來るから彼に見せてやる、壹萬圓位に買つて與るだらう」との仰せもありましたが國許に要

用もあり、それ迄悠々と待つて居れぬ事情もありますので至急何とかカタをつけて歸りたいと存じます、思召は如何でございませう、木地は梅のやうでございますが、兎も角彫の上手でない所が、御素人の菅公御手彫の證據であらうと存じます云々」

山間僻地の骨董屋さんとは云へ、滔々の辯は都會の古狸にも負けぬ巧みな口上、予はこれに對して例の露骨に

「菅公の手彫と云へば、千年以上の古物でなければならぬに、夜目で判然しないが、これは僅に二百年前後の物としか見えない、又可愛お妾にかたみとして御手彫の自像を遣はすと云ふのに、嘲弄の舌出しは相應しない疑問ぢやないか、貰つたお藤の方の心にもなつて見よ、此薄情旦那べロ出して」と云ふだらう、尚又此木像の素袍に梅鉢の紋を彫付てあるのも可笑い、定紋は菅公より三百年ほど後に初めて出來たもの、それを衣服に附け初めたのはズット後の足利時代である、梅鉢を天滿天神の社紋にしたのも、菅原系の家紋にしたのも、菅公が死んでから四五百年後の事である、此木像を菅公の手彫だと云ふのは、誰の鑑定に據るのだ、人樣を馬鹿にして居るよ、壹萬圓はおろか、十圓にでも買手があれば、サッサと賣つて國へ歸るがよろし、舌出し地藏、舌出し三番叟は知つて居るが、菅公の舌出しはこれが見始めだ、大きな僞物と云ふ寓意であらう」

と遠慮なく罵つてハヽアと高笑ひをしてやつたが、圖々しい骨董屋さん、尚も池野大雅手煉の壺と云ふのを出して、同じく云々の來歷を述べるから、予は

「これも大きな僞物だよ、『大雅』の銘はあつても、安永時代が安政でもない、明治年間の『大雅』先生だらう」

と云つて突返すと、サスガの骨董屋さんも、これてはダメと諦めたのか、匆々に逃去つた

菅公は肉慾の精力家としても抜群であつた、正腹妾腹の實子二十三人の外に尚落胤も少なくなかつたらしい、公が讃岐守たりし時代にも、お藤孃を一時のナグサミモノにしたのは、疑ひのない事實である、今のおふじ天神の社頭に孃の袖掛松と云ふのがあつて、殿戀しの遣る瀨なき情を漏らした舊跡としてある、お藤孃も亦、去年今夜の秋思で腹を斷ち、恩賜の衣袖を涙で濡らした事もあるらしい、アヽ天滿大自在天神樣、主上廢立は無實の寃罪であらうが、是は無情の艶罪たるを免れない

鹽瀬川にて金剛石を拾ふ

金剛石は寶石中で最も貴いものであるが、其產地は南亞米利加のブラジルや露西亞のウラル山などであると云ふ事だ然し產地と云ッたからとて、水晶や瑪瑙の樣に掘ればコロ〳〵と出て來るものではない、目ぼしいのは三年か五年目に一つか二つ掘出す位のものであると云ふ、又產地と名の附いて居ない所からヒョイト出る事もある、我日本國でも先年山口縣で砂利船の砂利の中に五千圓程の金剛石を混じて居た事もあり、對州嚴ケ原の泥溝の中から七千圓程の金剛石が出た事もある、佐用中山の夜泣石は中に金剛石を含んで居るに違ひないと云ふ鑑定で、橫濱の外國人が二萬圓に買入れやうと申込んだが、名物を破壞するのは惜いと云つて交涉に應じなかつたと云ふ話もある、又陸中大槌町の菊地慈泉といふ僧の墓にギヤマン石と云つて埋めてめつたのは、ギヤマン石ではなくて八十萬圓ほどの價値ある金剛石であつたので、持主爭ひの訴訟が起つて、一時日本銀行に保管預けをした事などもあつた

斯樣なものであるから、金剛石はドンナ所に在るか知れないものである、これに就て予が此頃世にも稀な幸福を得た一話がある、事の顚末を記して讀者に喜びを分つ事にする

明治三十九年九月十五日、予は例の如く腦休めの魚釣遊びとして、兵庫縣有馬郡鹽瀬村武田尾の溫泉場に行き紅葉館の前でハス釣を試みたが、平常は水の少い武庫川の上流も雨後の出水が多くて思ふ樣に釣れないので、暫く其處の岩に腰を下して煙草を吸つて居た、其時袂から出したマッチを元へ藏めやうとしたが、袂と思つて押込んだマッチは腋の下からガサ〳〵と音がして岩と岩との間に落ちた、僅か五厘程のものではあるが、これが無くては百金にも換へがたき輿を殺ぐ事もある、ドレ落ちたマッチを拾ひませうとそろ〳〵岩の間に下り手を出してマッチを取らうとすると其傍に淡黑い丸石で表面は粗目であるが何處となくキラキラと光を放つ石があるから、それを手に取つて見れば、目方は五六十匁ほどあつて全く普通の石とは樣子が違ふ、そこで右左ひねくり廻して能く〳〵見れば紛れもない金剛石これは珍らしいものを得た、賣價にすれば安くとも五萬圓のものはあらうと、予は早々に釣竿をかたづけ其金剛石を握つて溫泉宿に歸り、早速宿の番頭を呼寄せて、今斯々の次第で此石を拾つた、これは金剛石である、安くとも五萬圓の價値はあるのだ、然し此持主これを落したと云ふ者は

あるまいが、貴重な物を拾つて無届にはできない、此土地に巡査の交番所があるかと問ふた、番頭は予の説明を聞いて半信半疑の顔付であつたが「ハイ巡査の交番所は生瀬驛まで參りませねばございませんが、毎日一度の巡回で今日も軈て來る時刻でございます」との答へてある、然らば巡査が來たならば鳥渡知らせて貰ひたいと告げて置いたが、それから凡そ一時間ほど過ぎて「巡査が見えました」との注進によつて、予は其巡査に件の金剛石を示して委細を語り之を警察部の方へ廻して置いて下さい、それから正式の受取書を書いて下さいと請求した、巡査は其石をひねくつて見て居たが、何をトボケタ事を云ふか、お前は發狂人ぢやナーと云はぬばかりの態度で、川の中で拾つたそんな石は届出るにも及ばぬから持つて御歸りなさい」と云ひながら立去つて仕舞つた、普通學の修養も無い田舍巡査の事てあるから、金石學上の要目たる金剛石の眞僞を知らぬのは尤も至極だ、こんな巡査を相手にしたのは此方の不覺てあつたと、予は其夕刻八時發の汽車で大阪へ歸つて翌朝神戸へ出掛け、念のため或友人の紹介て英國領事館に居るウッソン氏と云ふ斯道の學者に鑑定を乞ふたが、同氏も亦一見して正眞の金剛石てある事を確答せられ、且これはバビアの産品と同質であるから、價格は凡そ十二三萬圓の物であらうとの鑑定を下されたので、予は直ちに兵庫縣廳第四部に出頭し、現品を添へて拾得の屆出をして置いた、此金剛石の持主なる者はヨモあるまいから、制規の滿一年を經過した來年の九月には予の有になるてあらうと思ふ

と記すと事實らしいが、これは作り話でマルキリ噓てある夢ぢやないから風は引かない

短髪は文明式か野蠻式か

明治維新後、男子の斷髪令が出たにも拘らず、各地には今に結髪頭の男、長髪頭の男がある、それを見て、あれは舊弊人だ野蠻風だと云ふが、此斷髪果して文明式であるか如何か、髪は刈込むべきものだとすれば、何が爲に髪が生えるのてあるか、又男は短髪に限るが女は長髪でよいと云ふ天理もあるまい、女が眉毛を剃落すのはイケない事にしたが、男が口髯を剃落すのは文明式か野蠻式か、ドーモ理屈が徹底しないぢやないか、チト學問上から考へて見て貰ひたい、但し僕は短髪でなく禿髪

木股にあらず臍にあらず

「お母さん、坊はどこから生れて來たの？」と子供に訊かれると、如何なる賢母と雖もメン喰つて「木の股から生れたのです」とか「お臍から」とか云ふ、それで子供が滿足すればいゝが、追々大きく成り智惠づくに隨つて、質問が進んで來ると、阿母さんシドロモドロになつて、トドのつまりが「そんなこと訊くものぢやありません」と叱りつけてお茶を濁さゝるを得ない、近頃東京兒童研究學會の席上で此問題が出て、阿母さん達の答辯の實例が各會員に依て擧げられたが、其中の「阿父さんは花園の園丁のやうなもので阿母さんは花園のやうなものです阿父さんが其花園を耕したから、孃やのやうな美しい花が咲いたのですよ」とお伽噺式にやつて除けたのもあつた、又或る阿母さんは、お金で買つたのですと答へた所が、其子供は誰某の家はあんなに貧乏だのに、六人も七人も子供がゐます、あれも皆買つて來たのでせうか、能くそんなお金があつたものですねと眞面目に不審がつたので、其阿母さんはグウの音も出なかつた事など、いろ／＼親の苦心談が出たが、結局適切な解答として「阿父さんと阿母さんが神樣に、何卒好い子を惠んで下さいとお祈りしたら、神樣が阿母さんのお腹に子供を下さいました、當初は小さかつたからお腹の中に入つて居ましたが、段々大きくなつたので終にお腹から出て來たのです、其が坊やでした」と云つたら子供は滿足して首肯いた、斯んな話は嘘を吐かずに然も美しい話だと稱揚したさうだ、我輩に云はせると、何が嘘を吐かない事があるものか、大きな嘘吐きだ、然も子供の質問の要點たる「どこから生れて來たのか」といふ事に何の答へも下してない、研究は研究でも巧い嘘の研究だ、子供に嘘を敎へないで正直に露骨に説明すべしである、どれほど隱しても胡麻化しても、年頃になれば、花園も神樣もあつたものではない、我輩は性慾敎育の實行を望む一人であるが、昨今は舊想虛僞の當局者も漸く眼が醒かけたらしい



元祿模樣は元祿時代のものに非ず

大師は弘法に奪はれ、太閤は豊臣秀吉に奪はるなど云ふことあり、總ての事物にも亦然ること多し、彼の市松形と稱する石疊み模樣は佐野川市松の發明にあらずして、其前既に行はれたる模樣なり、彼は只之を舞臺の上にて着せしこと多きのみ、又今日淨瑠璃を義太夫と稱すといへども、義太夫の前に義太夫節あり、義太夫の後にも改革者ありしなれば、今日の淨瑠璃は竹本義太夫獨特の音節にあらざるなり、然るに之を義太夫と稱するは、其彼が叫びたる改革の聲の大なりしに由るなり、此外、高野豆腐といひ、澤庵漬といひ、路考茶、吉彌結び、薩摩藷、河内木綿といふが如きも亦奪はれたる名稱なり

世に元祿模樣と稱するは、元祿時代に於て創始されたるが如く思惟する人少からずといへども、彼の疋田鹿子、槌車、波に千鳥、紋ぢらし等の如き模樣は、一として元祿時代の創作に成れるもの無し、其何時頃の創作なるかは、我輩が專門的に研究しつゝある浮世繪の初期以前に屬する事にして、其年代は未詳なれども、慶長元和寛永頃の風俗圖、狩野派とか土佐派とか、或は岩佐又兵衛の筆といへる浮世繪を見るに、いづれも後世元祿模樣と稱する模樣の衣裳を着せり、衣裳の外、花見幕と稱する如きものも亦然りとす、又慶長元和寛永頃の風俗圖といへるが如き其年代の漠たるものに非ずして、確たる年代の明記ある公刊物に就ても、右の證明をなし得るもの多し、慶安五年の版本「女かゞみ」(延寶の再版本もあり)に載れる十二ヶ月の衣裳模樣の如きも悉く後世の元祿模樣と稱するものゝみなり、此外、寛文延寶天和貞享頃の版本たる菱川師宣筆畫の繪本を見るに、いづれも元祿模樣にあらざるは無し

畢竟は、元祿の豪華時代に、最も盛んに染出されて、永く流行せしが故に、之を元祿模樣と呼ぶに至りしなり、と論結すべきが如しといへども、我輩は此論にも贊同すること能はざるなり、そは如何といふに、此元祿の豪華時代といふことも實に之を仔細に論及すれば、寧ろ天和貞享の豪華と云ふこと適當なるべし、其理由は、徳川時代の年號中にて、慶長、寛永、寛文、元祿、享保、寶暦、寛政、文化、文政、天保等は、最も多くの人々に記臆さるゝ所なれども僅に二三年の繼續に過ぎざりし年號は、之を知らざる人多く又知る人も之を唱へざる事となれり、斯る習慣は、正德

或は元文の事實を享保と稱し、寛政にも文化にもあらざる享和の事實を、其前後の年號を唱へて、寛政に始まれりとか、文化の出來事なりといふ類の多きが如く、江戸の豪華は萬治寛文に起りて延寶に發展し、天和貞享を其最大全盛時とし、元祿中年に至りては、寧ろ衰微の運にありしなり然るに之を元祿の豪華時代と稱するは、元祿の年號長く繼續して、其間に歷史的の事物多く發生し、隨つて萬人の記臆に存すること最も強き年號なるが故に、三年間の天和四年間の貞享を沒却するに至りしが爲めなり

要するに、元祿模樣は元祿時代の創作にあらざるは勿論、元祿時代に於て最も盛んに行はれたる模樣にもあらずして元祿は只僅に其衰微に傾きつゝありし時代なりしのみ

彼の大師、市松、義太夫、薩摩薯等の如きはいづれも盛名を博して其名を得たるものなれども、元祿模樣は畢竟、観察者の過誤に出でし名なれば、これが適例にあらず、只其名を奪ひしといふ點に於て、相類似すと云ふべきのみ

何方が仇討であるか

北海道の札幌區會議員であつた菅野光といふ人が、十勝嶽へ探險に行つて熊に出會ひ、銃で一發射擊すると、熊は死んだやうなので、同氏が近寄つて行くと熊は突然躍り蒐つて同氏を咬殺したさうである、それを仇討ちと稱して人夫七十名程が同山に行き、遂に其熊を擊殺したと云ふ、我輩思ふ、北海道は熊の棲處であつたのを、漸々人間が横領占取したのである、そして熊は年々人間に殺されて、今は少くなつて居る、熊こそ祖先や親子兄弟の仇討として菅野氏を咬殺したのであるまいか、死んだ振をして近づくのを待つたなどは、熊智の進步であらう

自動車の人轢殺し料

去日或人が「自動車屋など云ふ奴は、實に不埒な者です、近頃朝鮮京城で自動車屋を開業しやうとする東京の自動車屋が、設計豫算書を作りたいと云つて、ワタシの所へ相談に來ての言ひ草に、東京では人を轢き殺せば、一人前平均千圓の賠償ですが、朝鮮ではそれほど出さぬでも可いでせうネ、五百圓位の豫算で如何でせう、と云ひましたが、實に愕くぢやありませんか、初めから人を轢き殺すことを豫算に入れるなど、畏ろしい營業もある、人道だの社會道德だのと云ふ事は彼等の頭に無いのです」と嘆息して語つたが、そんな豫算は自動車屋のみでも無いやうである

吉原の編笠茶屋

昔の幕政時代には、階級制度の野蠻思想で、萬事紀律を嚴格にし、自他共に窮屈な虚儀を裝つて居たのであるが、其埋合せに武士共は吉原遊廓を唯一の樂園として、命の洗濯をしたのである、吉原大門の内に入つては、殆ど四民平等で、威儀もヘチマもなく、只管妓女の歡心を得て面白くノンキに遊ぶことにして居たのであるが、さりとて武士共は平日の體面上、廓内で他の見知る人に顔を見られては聊か見識にも關すとて、手に編笠を携て行つたが、それも往復の途中不便であるので、其編笠を吉原近傍の家に預けて置いて、大門出入の前後に着脱することにした、これが其編笠茶屋の起原であらう、今の馬道邊から大門口までの間に編笠茶屋といふのが數軒あつて、幾許かの賃錢を貰つて客に編笠を貸したのである、京都朱雀野遊女町の入口にも編笠茶屋があつたさうだが、茲には江戸吉原の事のみを記す

今より二百數十年前、延寶六年の開版、菱川師宣の繪本、『吉原戀の道引』といふに

「どろ町爰を田町といひしがいつの頃よりかはどろ町といひそめしなり、それはいかなるしさいといひしに、爰の茶屋にて盥に水を入出して足を洗はせしゆへ、是も足の泥をすゝぎけるとて、どろ町となんいへり此茶屋にて足手を洗ひ、鬢をなで、美男をつくり編笠を借り、ことに雨のころは足駄さしかさなど貸すなり、おほかた爰にてゆきかへりの折ふし蕎麥切などをしたゝめ仕度する者もあまたありしなり」

と標註して、藁屋の軒に編笠四五蓋を釣下げた編笠茶屋の圖を出してある

されど此編笠茶屋は右の延寶より六十年餘を過ぎた頃にはあまり流行しなかつたやうである、『嬉遊笑覽』には「吉原に通ふ者編笠を着ざるやうになりしは享保より稀になり元文に至りて全くやみたり」とあるが、同書の次項には「田町また五十軒路の左右にありし編笠茶屋は明和六年四月五日燒失前迄は兩側にて二十軒ありしとなり、今(文政頃)も『細見記』に「編笠茶屋の部あり」と記してあり、又天保頃の『守貞漫稿』にも、

「昔は待乳山下より馬を下りて歩行なる故に他見を憚りて泥町(今の田町)の茶屋にて編笠をかりて大門に入るなり又家より携へたるを手編笠と云ふ、今は田町の編笠茶屋名のみ存す、又編笠を着る人更になし、」

と記し、其次項に「今も堤を下りて十戸ばかり天保前よりあるは掛行燈家號の肩に編笠茶屋と細書せり」云々、又同書文久年中の追書に「何年の頃よりか近來は田町の茶屋に編笠茶屋と肩書せる茶屋混合せり、堤下より近年轉宅せしものなるべし」と記してある、又天明三年版の『繪本見立假譬盡』といふ滑稽本には「女郎貝」と題して、編笠を貝に見立て「元祿寶永の頃新吉原の五十間道にて拾ひ得たる貝なり、此貝當時は拂底なり、船宿の川岸にてまゝ見る事もあり云々」と記してあるから、元文後の編笠茶屋は名のみであるらしい

醜美の八德

▲醜婦の八德　『女學世界』に醜婦安心の礎と題した記事があつた、其要旨は美人を貶して醜婦を賞揚したもの、美人は薄命である、美人は世辭愛嬌に乏しい、美人は意志が弱い、美人は智慧が淺い、美人には貞操のある者が少い、美人には身體壯健で無い者が多い、こんな美人と結婚するのは、眞正の愛情に基くもので無くて、人體に附屬する或る一個所と一個所とが戀をして人一世の運命を放棄するのである、美人何物ぞ、美貌何者ぞ、など散々美人を罵つた末醜婦の八德といふ事を並べてある

第一　醜婦は愛深く人情に厚し、是れ通常男子の尤も喜ぶ所なり

第二　醜婦は智慧多く意志堅固なり、是れ世間に多き質實男子の尤も希望する所なり

第三　醜婦は忍耐にして家事に長ず、是れ一般心ある男子をして深く依賴せしむる所なり

第四　醜婦は多く產して多く働く、是れ尤も家庭的にして又家道繁榮の基なり

第五　醜婦は多能多藝なり、是れ一部の男子をして倚依せしむ

第六　醜婦は無病にして健康なり、是れ尤も今の世に希望すべき資格なり

第七　醜婦は天然的愛嬌に富む者多し、是れ一般男子の希望する所なり

第八　醜婦は緣遠し、是れ富あり地位あり力ある老青年の求むる配遇者としては第一の好資格なり

安堵せよ醜婦、廣き世界は薄弱なる美人よりも、寧ろ強健なる御身等に向つて幸福を與へんと待ち構へつゝあるなり

これは一理ある論には相違ないが、斯う美人を頭コナシに罵つて仕舞ふては、一般の美人が可哀想である、そこで仁俠心ある我輩は、美人の肩を持つてやる事にした

▲美人の八德　元來『女學世界』の愛讀者は、十中八九まではヘチャのヘチャたる醜婦が多いのであるから、お客樣贔負に醜婦の八德などを並べるのであらうが、我輩を愛顧する諸君の細君やお孃さんや御姉妹衆方は皆美人であるらしいから、我輩の地位としても之を反駁せなければ濟まないわけである

第一　醜婦は「惡女の深情」といふ諺もある通り、大いにヒツコクて蒼蠅いものであるが、美人はアツサリして居る、是れ洒々落々たる男子の尤も喜ぶ所である

第二　醜婦は面のマヅイ癖に悧巧ぶつて出しや張るが、美人はそんな事をしない、是れ質實なる男子の尤も希望する所である

第三　醜婦に忍耐心があるのは、畢竟三行半を渡されては、再び行き所が無いから、日夜打たゝかれても辛抱するのであるが、美人は淡薄に「御緣が無ければ歸りませう」と埒が早い、是れ男子の大いに有難がる所である

第四　醜婦はゴロ／＼と澤山の子供を產むから、一家の經濟上に大影響を及ぼす事になり、又日夜手足まとひとなつて困難するが、美人は其お產をする事が少い、是れ亭主たる男子の尤も希望する所である

第五　醜婦は面で愛せられないから、其埋合せにいろいろの藝能を覺えて居るが、美人は女に藝能などはいらないものだと澄まして居る、是れ見識あり技量ある男子が同意を表するところである

第六　醜婦は無病でデク／＼肥太れども、美人には其美を一層美ならしむる「目病み」などの如き意氣な病氣の起る事がある、是れ男子の愛情を深からしむる一要素である

第七　醜婦はお饒舌が多いが、美人は大抵沈默にして嬌笑に富んで居る、是れ一般男子の好む所である

第八　醜婦は緣が遠く、鬼も十八の盛りを過ごして中姥になるのも多いが、美人は然らずである、是れ皺を好まない少壯青年の配偶者として第一の好資格である

安堵せよ美人、廣き世界の男は、ヘチャなる醜婦よりも容顏秀麗なる御身等に向つて歡心を得んと、日夜待ち構へつゝあるのである

煙草官營と純朴の古風

去頃某地方人に煙草培養の狀況を尋ねて見たが、其官營となりし以後の取締法が、あまり嚴酷なのには閉口せざるを得ずとの事で、其談の大要は

作つた煙草はマダ採集期にならない以前、畠に植はつて居る時に、小八釜しい役人が來て一々檢分をする、此畠には畝が幾つあつて一畝に幾株植はつて居る其一株には葉が凡そ幾枚附いて居るから、總計幾千幾百幾十枚の葉煙草を上納せねば、密賣したものと認めて重い罰金に處するぞとの嚴命ですが、百姓であつて煙草を喫まない者は殆どありません、そこで官の手を經た煙草を買つて喫ますと、自分が前に二錢で賣つたものを十五錢に買ふ割合の高い代價を拂はなければなりませぬが、迚も貧民には其餘裕がないので、犯則とは知りつゝ自作の煙草を內々刻んで喫ます、それを役人が又能く知つて居て嚴重の取調べをする事になつて居ます、田道や山道を通つて居ると、突然巡回の役人に、「オイお前の煙草入を見せよ」と云はれてそれを見せると、葉切庖丁で自分がザク／＼刻んだ物ですから、官製の器械切とは一見して違つた物である事が分り、結局罰金に處せられます、近頃は又それを遁れやうとして、五錢か十錢の官製煙草を買つて、それを煙草入に入れて置いて少しも喫まず、手切の犯則煙草を別の紙に包み內懷に隱して居てそれを密に喫みます云々

煙草官營は、民業を奪つて利益を壟斷する政府の暴擧たるを免れないと信ずる又偶ま貞享五年（即ち元祿元年の春）刊行の『浮世鑑』に、下の如き繪を入れて「此煙草は私が手しゆにて作りたでござる」とて、客に其手切の煙草を饗應するといふ純朴の風を描いてあるのを見て、「ア、今を昔にして見たい」



女装の舞臺子立小便にて露顯す

松浦靜山の『甲子夜話續編』巻の二十一に

「世に風聞すらく、十一月十七日(文政十一年)に加州溶姫君の用人鈴木一學思召有之御役御免ありて此ことに就き種々の浮説あり、本郷(加州の第)御住居近邊喜福寺といふに觀音堂あり、御附女中參詣と申したてゝ實は遊山に出たりし事の露顯せし故とか、又御住居の御慰に歌舞伎を仰付られしが、いつも其者共は女子なるゆえ來りても四五夜は滯在することとなるが、其中に蔭間(男色なり)一兩人雜り居たるを御附男子の輩その者の小便する所を見て知り是より起りしとか、又御附女中にも役御免の者もあり、表使一人御咎あり、其外宅預けの者も多かりしと流言す

これも時代の裏面風俗を知るべき面白い話である、大名屋敷の奥女中などいふ者は、殆ど徒食の輩にて、何の用もなく、日々化粧するのと、互に猜疑嫉妬して騒ぐ位の事に過ぎなかつたので、淫奔の女中は、小間物屋に四ッ目屋製の怪しき道具を注文したり、江島の如く役者買をしたりするのであるが、其家風のヤカマシイ邸では、自由に外出してユックリ淫樂を恣まにする事もできないので、右の如く蔭間、即ち若衆を女に紛らかして引入れたのであらう

若衆とは、『筆禍史』中の「奥女中若衆買の圖」の解説にも、

「若衆といひ、野郎といひ、「かげま」といひ、色子といふは、男色を賣る美少年のことなるが、單に男子を客として男色を賣るのみならず、淫婦の望みによりては、天賦の情交にも應ぜしなり、此若衆を抱え置けるかげま茶屋といへるもの江戸にては芳町、湯島、芝神明前等にありて、男女いづれの客をも迎へしなるが天保九年十二月に幕府は之を禁止し、尚又其風俗等を繪畫として出版する事をも禁止せり、然るに云々」

と記してある通り、便利な賣色者であつたのだが、加州邸に入込んだ蔭間といふのは、歌舞伎に出る若衆であつて、俗に之を「舞臺子」と云つたのである

『春雨日記』といふ繪本は天保頃の版本であるが、加州邸の如き事實を種として作つた小説であるのか、其上巻に女役者數名が、殿中に入込んで演劇する彩色繪等を掲げ、尚その女役者中に若衆が混じ居て、奥女中との對談に

奥女中「おや、どうしやう、マアお前は男かへ、よもやお前が男であらうとはマアマア夢にも知らなんだ云々」

若衆「女でなければ御屋敷のお奥へあがられませぬゆへ女になつて居りまするが、此樣な事があつては云々」當時の裏面風俗の一端を知るに足るべきことであらう

馬鹿とは如何

▲醫者曰く　ヤー今度も亦やり損つたと思ッて此方は氣にして居るのに、遺族は壽命が無かッたものだと信じて、其藥代や施術料を持つて來る、殺された御禮に來る者などが馬鹿の骨頂だらうよ

▲小說家曰く　我々が西洋小說を燒直して、我物顏で出して居るのを知らずに、何某さんの小說は想が好とか何とか云つて、感心する者などを馬鹿と云ふべしだ

▲辯護士曰く　相手の辯護士と馴合て居るのを知らず、敗訴の上告を再び此方へ賴みに來る者などが馬鹿の一等だ

▲賣藥屋曰く　姙婦は服用す可らず墮胎の恐れありと廣告すると、それで子をおろすツモリで月さらへを澤山買つて服む連中を馬鹿と云ふのです

▲鮓屋曰く　フンーと手鼻をかんだり、シャー〳〵と小便した手を洗はずに握つた鮓を、これは鹽加減がよいなど云つて、旨さうに食ふお客さんなどを馬鹿と云ふのです

▲手帕屋曰く　西洋人が不潔な所を拭いた汚いハンケチを洗つて、それに形付けたものを、安いと云ふて買ふ客などを馬鹿と云ふのです

▲料理店曰く　燗ざましに水を混ぜたのをガブガブ飮んだり、前客の殘肴と知らずに旨さうに食ふ醉漢などを馬鹿と云ふのです

▲園妾曰く　これは私の兄さんですと云ふのをホントにして、酒を飮ませる旦ックなどを馬鹿と云ふのです

▲書店曰く　一圓の字典を買へば十圓以下の景品が附いて居ますといふ廣告にだまされて、其景品をほしさに、必要も無い書物を買つて、後で彼是と不平を云ふ者などが、馬鹿といふ動物の標本でしやう

▲運擧の運動屋曰く　有權者を買收すると云つて多額の金を着服しても氣付かない候補者などを大馬鹿と云ふのです

▲スリ曰く　口を開けて芝居の看板を見て居る者などが一番の馬鹿です

▲湯屋の三助曰く　節穴から女湯を覗いて、涎を垂らす奴などを、大馬鹿と云ふのです

▲乞食曰く　僞の不具と知らずに錢を吳る旦那衆などを、馬鹿と云ふのです

蓮葉女

大阪商家の賣淫下女

下卑た摺れからしの女を蓮葉と云ふのは、風に吹かれる蓮の葉の如く、浮いたひら〳〵の輕薄者といふ意であらう（東京の下谷藝妓を蓮葉藝妓と云ふのは、此蓮葉の意味に兼るに、蓮の多い不忍池の畔に住む者といふにもかなひて最も適評である）

此蓮葉といふ語は、大阪の蓮葉女といふのが起原であると云ふ、其蓮葉女とは、延寶、天和、貞享の頃、商賣の道にさかしい大阪の問屋連が、月々仕入に上り來る東西の商人を我家に宿泊せしめ、その淋しき夜の伽をさせんとて、抱え置きし賣淫下女の一種をいふのである、天和二年版『好色一代男』卷の三、大阪浮世小路の叙事中に

「色つくりたる女、はだには紅うこんの絹物、上にかちん染の布子、島繻子の二つわり、左の方に結び、赤前だれして、桐の引下駄をはきて、たばね牛房に、花柚などさげてかの小家にはしりよりて、日外の立島のきる物の質の札は手もとに御ざるかと、口鼻にさゝやきける、心ながら笑しく、あれはいかなる女と尋ねける、人の召使ひ、竈近き者と申、それにはよろしき身のまはりたは織女さへ給分のつもりあり、爰は半季居の、まれなる所かと申せば、昔しと替りてまか成事まて、御心のつく事ぞ笑し、あれは、問屋方にはすはと申て、眉目大形なるを、東國西國の客の寢所さすため抱て、おのがこゝろのまかせの、男ぐるひ、小宿を替てあふ事、いたづらの晝夜にかぎらず出ありく事もおや方の手前をはぢず、姙めば苦もなふおろす、衣類は人にもらひ、はした銀も有にませて手にもたず、正月着物は、夏秋をしらず賣て、蕎きり酒に替て、三人よれば大笑ひして、高麗橋をわたる事忘れ、佛神に詣でけるにも、置綿ばら緒の雪踏音高く、道すがらの一口咄しにも、人の耳をこすりて云々」

これで蓮葉女の性質風俗等は大略知れるが、右の文句中に「高麗橋を渡る事忘れ」とあるのは、今の釣鐘町邊に、遠國の仕入商人を相手とした大問屋が多くあつて其問屋に此蓮葉女を抱えて居たのが多かつたので、船場へ遊びに來た蓮葉女が我家へ歸る事を忘れて笑ひ興ずるといふ意である

次に又、貞享三年版の『好色一代女』卷の五、濡問屋硯と題せる條にも

「萬賣帳なにはの浦は、日本第一の大港にして、諸國の商人爰に集りぬ、上問屋下問屋數を知らず、客馳走のた

めに蓮葉女といふ者を拵へ置ぬ、是は食炊女の見よげなるが下に薄綿の小袖、上に紺染の無紋に黒き大幅おび、赤まへだれ、吹鬢の京かうがい、伽羅の油にかためて、細緒の雪踏、延の鼻紙を見せ掛、其身持それとはかくれなく、随分つらの皮あつくして、人中を畏れず、尻居てのちよこ〳〵ありき、びらしやらするがゆへに此名を付ぬ、物のよろしからぬを蓮の葉物といふ心なり、遊女にゝゝなを身をぞんざいに持なし云々」

此外『世話字盡』に「蓮葉、問屋女なり」とあり『物類稱呼』にも「京大阪の旅人宿の下女をはすはといふ」とある、此蓮葉が起原で蓮葉娘、蓮葉藝者などいふ語が出來たのであらう

山崎美成の『世事百談』に「女子のおとなしからぬを、はすは者といへるは、蓮葉女より出でたる諺なり」とある

此蓮葉女は最初大阪に出來て、京の問屋にも行はれたらしいが、後には他の地方にもあつたと見へ、正徳三年版の『日本新永代藏』卷の二、越前敦賀の大問屋彌三右衛門の條に「座敷數かぎりもなく、客一人に一間づゝわたし置、京がゝりの風流女を二十人かゝへて、是れに朝夕の給仕をさせ寢間をとらせ、内證のわけは其人と合點づく云々」とある、これは大阪の蓮葉女に倣つたものであらう

先祖が隠して置いた財寶

郭巨が黄金の釜を掘出したのは其孝行に對する天の感應であるといふが、これは儒教者の方便的說話に過ぎない、人間の運不運は畢竟偶然の結果であつて、其性の善惡如何に拘はらず、時によつては大いにお釜を起す事もある

過般京都に於て、賣却した古土藏の中から時價三萬圓以上の古金銀を發見したといふ一件は、近頃(明治四十一年)嚣ましい話であるが、此一件あつて以來京都では、古土藏を持つて居る者共が俄に騒ぎ出して、己の家にも何處かに古金銀を隠してあるか知れないと、時ならぬ煤拂をやつて、眞黒になり乍ら一生懸命に方々を探し廻つて居るさうだ、それと聞いた大阪でも昨今負けず劣らず慾張連が土藏や緣の下を捜索して居るさうであるが、記者が直接聞いた話にも、大阪靭の某家では、昔靭御殿とも稱せられた金滿家の一人娘が別邸として住んで居たのは此家であるから、屹度何かゞあるに相違ないといふので、家内總がゝりで大きな庭石をコヂ上げたり、非常な大騒ぎをしたが、結局何も見附からなかつたので骨折損の草臥儲けと成つたといふことである、貴重なる時間と勞力とを空費して、斯かる愚擧を

敢てする者の沒常識は實に呆れるの外は無いが、世には慾張連が少なくないと見えて、近頃かういふ話を行く先々で聞く、トコロがそれに就いて更に面白い話がある

今を距ること二百二十餘年、往んぬる元祿の昔より京都室町通四條下る所に本家を有し、江戸日本橋通三丁目及び大阪本町一丁目に各支店を設けて頗る盛大に賣藥業を營んで居た上田某といふ金滿家がある、其大阪支店の如きも今は逼塞こそして居れ、現に其家が殘つて居るが、右の面白い話といふのは此支店に就ての事である

其本町一丁目の邸宅といふのは實に數寄を凝らしたものであつて、其樓堂庭園の壯麗優美なるは勿論、奥の離れ座敷の傍には能舞臺を設らへ、屢々京大阪一流の能役者を招いて能狂言を演ぜしめるなど、豪奢の限りを盡したものであつたが、其家の奥藏の梁に何とも知れない燻ぼつた箱が縛り附けてあつて、ソレに付き先祖代々の遺言として「アノ箱は決して容易な事で開けてはならぬ、若し萬一の事があつて我が上田家の安危に拘はる一大事が起つたならば、其時に開けて見ろ」といふ嚴しい言ひ傳へがある、トコロが今の戸主の父に當る人が、其の遺言の事を考へて、アンナに嚴ましく開けて見る勿といふのは屹度彼の箱の中には金を入れてあつて、一家が破産にでも瀕する場合に其金を出して使へといふ先祖の深い考案からあゝして置くに相違ない、妄に披けるなと遺言はあるが、それが爲に神明佛陀の天罰を受くる事もあるまい、構ふものか披けて見やう、といふ氣に成つて、丁度其の時は家運が稍衰退した時でもあり旁々融通にするツモリで、或る夜密かに其奥藏に入り、梯子を梁に掛けて、塵と煤で眞ッ黑に成つた其箱をソッと取り下ろし、此中には何萬圓入つて居るだらうかなど思ひ乍ら、ニコ〳〵もので披けて見ると、豈に圖らんや、金は一文も無くて只古びた一封の書附が入てあつた、其封を開いて見ると大形の奉書に墨黑々と、「一金三千兩、右御先祖樣に拜借仕り候也、寛政三年何月何日、七代目上田某」と認めてあつたのには只呆れ返つたさうだ、古金の三千兩といへば、之を今日の相場に換算して少くも三四萬圓のものである、若し夫れがソックリ殘つてあつたならば、如何なる事業をも起せるのであるに、ソレを既に先代の者に拔取られたのであるから、殘念至極であつたらうが、併し其の御先祖樣に拜借といふ文句が實に面白いといつて、知己の人々に其話を語り傳へて居る、ナルホド御先祖樣に拜借とは、誠に眞面目らしい滑稽と稱すべしである

常陸帯といふ神定結婚

享保二年の刊本『諸國年中行事』正月十日の條に「常陸帯の神事、常州鹿島大明神は武甕槌神なり（中略）女の彼方此方懸想せられて文あまた受たるは、其男の文どもを、此日布の帯に書きあつめて神前に置く、其中にて裏かへりたる帯を見て、其帯の主の男と縁を結ぶ也」帯を裏かへすは社人のわざなりと云ふこと『和漢三才圖繪』に見ゆ、此神事に異說あり『奥儀抄』には

「一苧を帯にして、一つには我名を書、一つには男の名を書て、折返して、中をば隠して末を禰宜に結ばするなり、悪かるべきは離れ〳〵に結ばれ、良かるべきは掛帯のやうに丸く結びつながると云」

右の兩說いづれが眞なるか、又時代によつて變遷せしものなるか否は知らざれども、此神事の行はれたることは、古歌に多く詠まれたるにて知るべし

正徳五年殘口翁著『艶道通鑑』には左の如く記せり

「戀に常陸帯といふ事、甕速神の御社へ、いまだ嫁せざる娘ども、我を思ふ男數あれども、決に心だてを知らず、又我から慕ふ男は、色好みの心なれば、末とげぬ事や出來てん、一生をまかするは神の引合を賴み奉るのみとの心に、數々の男の名を、一筋〳〵の帯に書て神前に備て丹誠するに、末の目出度縁あるを告させ玉ふは其帯の數〳〵の中に、一筋必ず裏がへるあり、それをしるしに結びより夫婦と成とや、古より今にかはらず常陸帯の契といふ、是神に賴み奉りて結ぶわざになん、男風流にもよらず、貧をも嫌はず、氏の卑をも高をも選び捨ず、偏にあなた次第とかたらふ、眞の中の眞なる事なり」

財産結婚、門閥結婚、近親結婚等不自然の縁談に成れる者共が、神前にて虚偽虚榮の結婚式を擧ぐる事は近世の流行なれども、花婿の選擇を神意によりて決する結婚は、近世の彼等に比すべくも無き素朴の美風たりしと云はんか

三々九度の盃

結婚式の恒例は、天地人の三才に因んだ三ツ組の盃で三献重ねて陽數の極たる九で芽出度納めるのであるが、此交盃は間接的接吻を表したもので、假托から現實、漸を以て進む契合の式である、結婚前に男女が接吻を行ふ風習のある西洋諸國に交盃の式は無い、此點から云へば、日本の三々九度の盃は進歩した科學的文明式の禮法である

天照皇太神は男神か女神か

支那にては、太極の分生を陰陽と稱して、陰を先にすれども、相對の成語には陽陰たるもの多し、則ち日月、晝夜、男女、夫婦、表裏等の如き、皆陽を先にして陰を後にせり我邦にては、之に反し、日月を月日、晝夜を夜晝、男女を妹脊、夫婦を女夫、表裏を裏表と稱するなど、皆陰陽の順序たり、これ何によるか、我輩淺學にして未だ其根據の如何を知らずといへども、或は女尊男卑時代、母系制時代の語ならんかと思はる

然るに上古の神話たる陰陽二柱の神は伊邪那岐尊を先にして伊邪那美尊を後に呼べるの例外あり、又太陽たる日に配するに陰性たる女神即ち天照皇太神を以てし、太陰たる月に陽性たる男神(桂男)月夜見命を配せるは如何と、これ多年の疑問たりしが、近頃偶ま天保十年の『國史纂論』第二卷四葉を見るに、蘇我馬子が崇神天皇を弑して敏達天皇の皇后たりし炊屋姫を擁立せんとせし時、女帝は前例なしとして群臣の反對ありしに際し、馬子は豐聰太子と共に、神祖の男神たるか女神たるかを知らざりし群臣に告ぐるに、神祖天照皇太神は女神にあらずや、女帝を立つること亦何の不可かあらんや、と詐りて群臣を屈服せしめ、終に炊屋姫を立て、推古天皇とし、豐聰太子(聖德太子)を皇太子として萬機を攝行せしめ、馬子は其間に處して專橫を極めたるなりと云ふ說あり、古今の史籍に無き奇論なるを以て左に其全文を錄す(原漢文)

「禎(山縣太華)曰く。先儒或は謂ふ。先が國史 神祖を稱して女主とするは。太子豐聰及び蘇我馬子が刱むる所に出づ。而して此を以て其女主を立るの姦計を掩ふ也と。此言亦謂れ無しとせず。神祖天照大神又日神と稱す。以て日に象る日は太陽なり。而して之を陰神と謂て可ならん乎。且夫れ獨陰は生ぜず。何ぞ子あるを得んや。既に子なし。何ぞ祖たるを得ん哉。是以て皇嗣忍穗耳の生ずる。其說曖昧人をして疑ひを免れざらしむ。皇子豐聰。蘇我馬子と同く。炊屋姫を立て以て大位を嗣がしめ。女子登極の本朝未だ有ざるの例を刱む。又馬子と議して天皇紀を撰み。神祖を稱して女主と爲す。二子の爲る所。當世誰か敢て之を非議せん。而して其間に私する所なしと曰ふは。我は即ち信ずる能はざるなり。然れども太子も亦聰慧絕倫。古より之を稱して聖德となす。聖は則ち我知らざるなり。其官階を制し。憲法を定め。國紀を作

るが如きは。治體に達する者と謂ふべし。後世法を取り一代其博達に服す。亦得易からざるの才なり

これ天照皇太神は女神にあらず、との說なり「先儒或は謂ふ」の語は假設にして、實は山縣禎の說ならんと察せらるれども、兎に角、これは儒者として佛者を排するより起れる邪推の論なるか、或は又之を眞なりとすべきかは、我輩の判定に苦む所たり

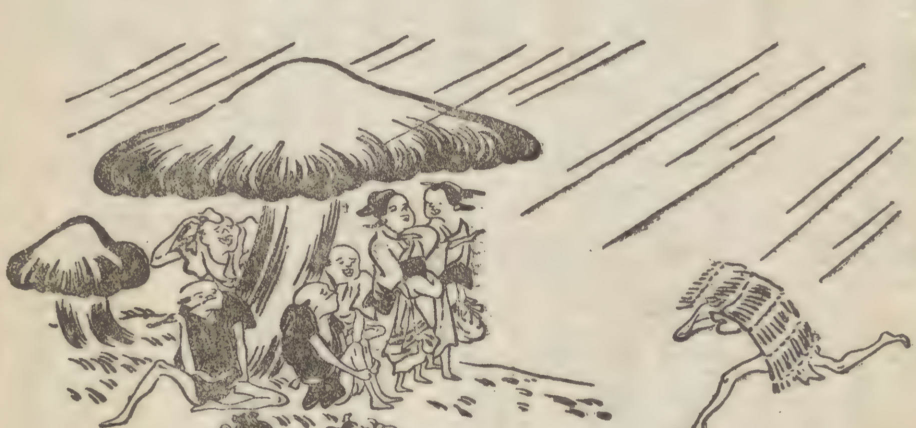
永沼小一郎氏の『かひの名義考』明治四十年三月發行『介類雜誌』第一卷三號には易の說卦傳に、離☲を火とし日とすとあり、離は二の陽爻外にありて一の陰爻中にあり、即ち外明にして內暗き象なり、されば太陽に黑點(金烏)あり陰の主爻中央にある故に女とし、日の神を女神とす、月は坎☵にして離と反對なる故に男とすとあり、此說は易傳に據れる曲解として、我輩の首肯し難き所たり

要するに、天照太神は男神か女神か、先儒推斷の說を當れりとすれば、天皇紀の後に出でたる古事記日本書紀は信ず可らず、我輩は其是非の批判を世の卓見家に待つのみ

獨逸にては太陽を女性として「ザー、ゾンネー」と云ふ、ザーは女性の冠詞なりと聞く

* * * *

稻荷山の時雨



鳥羽繪欠とめ

石川丈山は幕府の犬

「渡らじな瀨見の小川の淺くとも老の浪たつ影ぞはづかし」の歌を以て世に名高い石川丈山は、世間で非常な碩德大儒の樣に言はれて居るが、彼れが幕府に不平を抱いて京北一乘寺村に隱遁し、詩仙堂を建てゝ優游自ら娯んだといふのは、全く世を欺く爲めの姦計であつた、實は其幕府に放逐されたといふ虛構事を利用して宮中に近づき、暴戾不臣なる德川幕府の間諜と成つて、公卿方の王政復古を圖る者は無いか、幕府を倒さんとする者はないか、夫等の動靜を探らんが爲め態と不平隱退を裝ふたのである、と記者は曾て京都の富岡鐵齋翁から聞いた、果して然らば丈山は實に皇室に對する不忠不義の曲者であつて、士人の共に齒すべからざる人畜生、犬相當の奴輩である

按ずるに、彼は詩仙堂などを作つて、下手な詩歌をヒネクリ頻に學者ぶつて居た事實はあるが、其實聖人でも碩德でもなく、全く無識、暴逆、無賴漢であつたことは、左の事實に就て見ても分明である、卽ち天野信景の隨筆『鹽尻』といふ本の記載に據ると

(前略)年三十に餘りて眼に書を知らず、天性腹惡しき人にて同僚も持あまし家人も荒々しきに苦めり(中略)本性の暴氣甚しく性急にして人を惱せしかば、或時彼れの僕等(重之)丈山を欺き捕へ、縛り捨てゝ去りける云々

又同書內閣本には、丈山は曾て詩を陳元贇に贈つた處が、陳は其紙末に朱印を麗々しく押してあるのを見て、丈山といふ奴は何も識らない奴だ、字を書いてソレに自分の判を押すのは、自分の書を額にさすとか後世に傳へさすとかして其文字を珍玩せしめる爲だ、コンナ字が後世に傳へられるものか馬鹿々々しい、と大に笑つたといふ事が出て居る實に恥曝な奴である

尙又丈山が幕府の間諜であつたといふ證據は、彼が到る所で其氏名及び原籍を詐稱して居た事、及び京都所司代たる幕吏板倉重宗と表には疎遠を裝うて內實秘密に親情を重ねて居つたのでも分かる、卽ち或者には安藝國の生れであるといひ、又或所では三河碧海郡の生だといひ、其名の如きも、或は重之、或は嘉右衛門、或は十太夫、或は直元、或は八郎左衛門といふが如く、何れが其實名であるか更に分らない、これ卽ち彼が犯罪の便宜上特に其事實を曖昧に附したもので、丈山が怪しい人物であつたことは、之を見ても確である、又彼が板倉重宗方へ「瀨見の小川」の歌を送

つて再び都の地を踏まないと聲言した後も、尙密に重宗と往來し、表裏相應じて宮中の探偵に從事して居つた事は、『窓のすさみ』の記載に據て明らかである

ソレは、或時の事、商人が丈山の所へ往つて過言したとかで切殺された、ソレデ其被害者及び同業者から狀を具して所司代板倉重宗に告訴を提起した所が、重宗はソレヲ聽いて、其所司代たる職權を妄用し遂に不受理の處分にしたといふ事である、假にも故殺犯として其證憑充分なるものを不起訴としたのは、例の幕吏の得手勝手とはいへ、普通ならば死罪とすべき重罪犯を見兗したのは理由が無くて成らぬ、これは全く丈山が幕府にとつて有用な犬であるから、特に國法を枉げて處分しなかつたのに違ひ無い

其他又斯ういふ話がある

石川丈山は安藝國の產也といふ、彼國にてある時召仕しもの出奔して在る所を知らざりしが、程經て後吉川監物が家臣香川何某より書狀來り丈山の許にめしつかへとして新參のものあり、されば不審の事あれば承るといふ、丈山答へてそれこそゑせものなれ、我等が許にて惡事を仕出し剩へ名をいつはり、其方にありつく事不埒の上の不埒也、此方へ賜り候へ、さりながら手練者なれば穴賢怪我し給ふなといふ、香川も心得てとりこめやがて丈山に贈りしかば、大に悅び使者の前にて首を切り云々

右は『一話一言』に出て居る事であるが、深く之を考ふるに右の家來は丈山の殘忍を憎んで彼の家を出たものであるが丈山は自分が幕府の犬たる秘密を漏らされんことを虞れ、香川某を僞つて右の家來を斬殺し、以て其秘密を蔽はんとしたのに相違ない、彼が詩仙堂の壁に認めた覺書七ケ條中に「主君（將軍）へ御奉公の義は其身を任せ奉り何事によらず一筋に御用に立申す心持を不斷胸に挾み申す可く候云々」とあるのを見ても、彼の胸中帝室なく、只德川の爲のみを計つて居た不忠不義の犬であつたことが分る、碩德大儒もあてにならぬ者ではないか

親知らず子知らず

越後の難所に「親知らず子知らず」といふ古來顯著の名稱がある、親の慈愛、子の孝行と云ふことも、犧牲的ではなく、自己生存慾の餘裕道德だと云ふ證明になりはせぬか、果して其證明になるとすれば、こんな不埒至極の名稱を存するのは、國家敎育上の一大障碍である、忠孝主義の官僚に其改稱を望む、ヘ、ン

土佐の犬神遣ひ

（助手の筆記）

科學々々と呼はる世界に無學懷疑の人があつて舶來の迷信談も頻りに傳はる、幽靈研究を始める、研究の結果、エッキス光線にて見たる幽靈の裾、幽靈の表情術、予は何故に柳の下に現はれたるや等の事が發表されるのも近いことだらう、心靈界の侮蔑さるゝや久しきの時に當つて、眞に人意を強うするのではないかといふ冒頭で茲に驚くべき犬神遣ひの事を紹介するから、迷信して呆れるとも、研究して驚くとも、それは讀者の隨意である

事實は土佐國阿波國にて現に行はれて居るのだが、犬神蛇神の談は昔から傳はつて『醍醐隨筆』には

四國あたりに犬神といふ事あり、犬神をもちたる人誰にても憎しと思へば、くだんの犬神忽ちつきて身心惱亂して病をうけもしは死するといふ、いかなる道理と問へば先其國の人犬神といふことを常に聞馴れておそろしく思ふ故、外感風邪山嵐瘴氣の病の熱甚だしく身心くるしき時は、例の犬神よと病人も病家も思ふ故に、犬神の事のみ口ばしり罵るを、さればこそとさわぎ物して山伏やうの者數々むかへて祈と聞ふれば、あらぬことのみ云ひてしらへて、させることなき病者も死する人多しと、彼國にすみける醫師のかたりけるはむべも有なむとおもふ

とある、迷信が根據で神經病を起すのだとは、醫者だけに痛快な喝破だ、ところが文明の今日にもこの犬神殿の威力依然として衰へず、犬神遣ひの名は啻に四國のみならず、遠く九州方面に發展して夥しい信者イナ遣ひ手がある、こゝで犬神は如何にして遣ふかを説明すると、前の隨筆にもある如く、犬神を遣ふ人は、己が憎惡嫉妬憤恨あらゆる惡德の發揮手段に之を用ふるのだ、誰が怨めしいでスグ犬神を憑かせる、彼が憎いでスグ犬神を派遣する、憑かれたら災難で死んで了ふ、故に犬神遣ひとは決して結婚其他縁組はせぬといふ事が四國邊では戸々の家憲になつて居る、それから憎いのでなく可愛い場合欲しい場合にも犬神は威を逞しくする、假令へば、ア、お甘さうな鮓を喫べてるなと思へば、涎を流して見ては居らず、忽ち犬神突進の號令を掛ける、すると犬神は奇拔にも其鮓なら鮓に憑く鮓は忽ちグチャ〳〵の嘔吐同樣になるといふ、此外にもまだ多方面に跳梁を極めるさうだが略して、今度は犬神はいかにして祭らるゝかだ、先づ犬神を祭るには一匹の犬を捕縛つて置く、二三日も經つと犬は空腹で酷い苦み、その樣は目も當

られぬ、キャン〳〵悲鳴して跳り狂ふ、機來れりと牛肉か魚かのプンと甘い香氣のする物を、鋭敏の嗅覺一層を加へた鼻端へ持つてゆく、見たばかりで氣が遠くなつた犬は喰いたい舐めたいで首をのばす、モウ一寸で御馳走に口が達かぬ、全身の魂は腦天に上つて、無闇に首ばかり前へ出す何ぞ知らん大惡魔の人間、劍を上段に持構へて居やうとはズバリ音して犬の首はコロ〳〵と前へ轉がる、中には欲しい一念肉へ首ばかり喰ひつくのもあるさうだ、此首を大切に取上げて祭つたのが即ち犬神であるといふ

右の話が事實であることは四國へ渡ればスグ解る、迷信か眞理かは研究の後でなければ知れぬ、そこで我輩はこの犬神遣ひの大眞理ならん事を切望して止まぬ、といふは我輩にも正義忠良の立脚地から國法に觸れずして取殺し掴み殺してやりたい奴原が澤山ある、大いに研究して其內に試みるつもりだ

女は陽性なり

男は陽性で女は陰性であると云ふのは間違ッて居る、女が陽性で男が陰性であるとの論が『女學世界』に出て居る、其論は長たらしいものであるが、主要の點を擧げて見れば

兎角男ばかりの寄り集りでは、どんな宴會でも座が白らけて陰氣になり易いものですが、其處に一人でも女が這入ると忽ち陽氣になッて賑ひだします、歌加留多などを取ッて見ても、矢張り同樣で、女が無ければ、到底陽氣にならず女の影さへ見えると、ソレ女が來たぞといふので、如何な會でも直ぐ陽氣になります、これで見ると女の身體には、生れながらにして陽氣といふものを自然に持ッて來てるらしい、それを苟にも陰のものだなぞといふは、實に不屆至極の次第で、陽氣を身に備へてる以上は、女といふものは、ドウしても陽のものに相違ないのである

それから、男の好んで着る着物を觀ると、仲には、落語家や特別製日本ハイカラ粹士やのやうに、紅絹裏なぞとシャレる儕輩の無いでもありませんが、先づ大抵は色も縞も陰氣の方で、馬鹿に粗らい縞だとか或は赤とか紫とか綠とかいふやうな陽氣な色の着物を着るものは、殆んど皆無で、ドチラかといへば、坊さんは例外として黑味がゝつたものばかりを着ることになッてます、これは西洋も同樣で、曲馬の道化師か芝居の舞臺でゞもないと、彩色や金色の這入ッた着物なぞを着るものは無く、若し

ありとすれば、宮中の式部官か舍人ぐらいのもので、皆な男は黒ずんだやうな陰氣なのばかりを、衣類にしますが、女の衣服は、日本も西洋も實に陽氣なものでして、色に紫あり赤あり鴇色あり青あり綠あり金あり銀あり、縞も女は馬鹿に粗いのばかりを好み、模樣を衣類の上に織出すやら染め抜くやら、遂には友禪なぞといふ大仕掛大道具鳴物入の代物が出來てるほどです、ところがこんな陽氣な衣類は、女にこそ似合もすれ、男が着ては兎ても觀られたものでなく、世間からは差し當り瘋癲病院者と目せらるゝことになりますサ、然るに女に此う陽氣な着物の似合ふのは、全く女が陽のものであるせいで、喪服には黒が似合ひ、陰性である男にも又黒が似合ひ、陽のものである女には、無論陽氣な衣類が似合ふ筈ですサかるが故に落語家の申さく、兎角お女中は御陽氣なもので……と、然り女は誠に陽のものです

これは眞面目論か否かは分らないとして置いて、陽中陰あり、陰中陽ありだから其一部の狀態を捕へて議論するのは滑稽として面白い、今此論鋒で進めて行くと、女の……といふのは間違ッて居る、陽部と云はねばならぬ、淫猥な話しをするだけでゝも眞面目腐ッた一座が忽ち笑ひ興じて陽氣になるぢやないかと云ふ論にもなり、又陰は靜で陽は動のものである、女は陽性であるから陰性の男に向ッて發動せなければならぬ、今の女學生が男學生の尻を追廻すのは女の本性を發揮するのであるとの論にもなり、又内は陰で外は陽であるから陽性の女は内に引込んで居ずに外へ出シヤ張らねばならぬとか、又は「陽の方の仁王さんは必ず口を開いて舌の端を少し出して居るやうな加減に刻まれてある」といふ陽性の仁王の様に、口を開けて能く饒舌るのは陽たる女の本性であるから、女學生たる皆さんはおシヤベリでなければならぬと云ふ論にもなる

これほどの事は云はないとしても、女學の雜誌に女は陽性なりとの論を載せるのは、ツマリ女權擴張の奬勵で、陰性たる男を尻に敷けとの趣旨であらうから、おテンバ養成の主義に適して居るやうだ、只可笑いのは此論を男が書いて居る一事である、男子自らが陰性たる事を發見して、之を女子に吹聽するのは御深切至極と云ふべしあでる

門構に栗はほろぶ

古い『歌舞伎新報』に左の如き奇談が出て居た

坂東大吉は永木の三津五郎の門人にて天保年間七十餘歳にて芝居へ出勤せり相中の役者なれども自ら一家を成し長兵衛の家の場などは此人に限りハテよふござえすと云ふ通り臺詞評判なり曾て皮肉論といふを著せしが至つて學者振るを好み何事にても先生〳〵と尊敬さるゝを無上の樂みとなせり或る人戯れに大吉に向ひ先生入口の門は栗の木にあらずや門がまえに栗は亡ぶと讀む字なれば一家の不祥この上もなかるべしといへば大吉いかにも心付かざりし門がまえに栗を亡ぶと讀むこと三歳の童子も能く知れり我ながら粗匆なることをしたものかなと即日大工を呼びて門を檜木に改めぬ其の後人にも質し自らも字引など出して穿鑿するに門がまえに栗といふ字はなく全く戯言なりしと悟り我程の者を能くも欺し果せし者よと語りし由


ほろぶ

惡謔と云へば惡謔であるが、生半可者に對する針砭としては、實に痛快至極の壯擧である、我輩は之を滑稽の上乘たるものと推賞する、地口駄洒落を滑稽の本旨と心得て居るやうな者には、迚も案出し得られない妙想奇略である

新橋の共同便用

貴族富豪、さては近頃の成金輩が、唯一の歡樂境として居る新橋の茶屋は、昨今殆んど彼等の獨占同樣で、偶まフリの客が行つて藝妓を呼ばふとしても、前約續きで拒絶されるさうである、そこで或人が新橋の茶屋は彼等の共同妾宅であると云つた、成程、從來共同妾と云ふのがある、一人の女を數人の男が共同で圍ゐ置き、甲は一六、乙は二七丙は三八といふやうに日を定めて通ふのであるが、新橋の共同妾宅は其日を定めないだけの違ひらしい

然し、性慾は生殖のための本能であるに、斯く共同妾宅の流行するのは、女を玩弄物視して、性慾の遂行を娛樂に供する變態現象と見ねばならぬが、心理學者は男の性慾を排泄本能と稱して居るのだから、共同妾宅と呼ぶよりか共同便所と云ふ方が適當であらう

綠色の花なき理由

予が發行せし『ハート』第二號に「綠の花」と題して繪入て左の如く記載した

草木の葉は總て綠色で、其花は白とか赤とか、黃、紫、樺などであつて、葉と同じ綠色の花は無い、牽牛花などは、薩摩藷に接いだり、種子を酢に浸けたり、其他化學作用によると種々の色に咲くが、唯一つ「綠色」だけはてきない、然るに不思議にも文政の頃江戶駿河町の某家に此綠色の花が咲いたさうて、今に至るまで牽牛花愛培家の口碑に殘つて居る

此綠色の花が咲いたといふことは、文政版の朝顏圖譜に出て居ることで、事實あつたものか否かは解らない、若し眞にあつたものとすれば、世の畸形兒と同じく造化の戲れといはねばならぬ

そして植物には何故綠色の花がないかといふに、其原理に就ては專門學者も未だ說明してないやうだが、我輩一個の見解としては、左の理由に基くものと信ずる、あらゆる植物の花を總括すれば、蟲媒花、風媒花、水媒花の三種である（解語花などは魔風戀風といふ風媒花に屬するものてあらう）此風媒花や水媒花は極めて少く、大抵は蟲媒花である、花瓣の中に雄蕊雌蕊といふ生殖器があつて、それが持つて居る花粉といふ精液を、蝶や蜂の媒介で交合するのである、此花が葉と同じやうな綠色であつては、蝶や蜂の目につかない、そこで白とか青とか紫など葉の色と違つた故らに目立つ色で、靑春燃ゆるが如き情を滿足せしめんが爲めに、媒介者たる蝶や蜂を招き寄せるのである、蝶や蜂は世間の情人の取持ちをする男女のやうな媒介者てなくて、自分が其花の蜜を吸はんが爲めに彼方此方を飛び廻るので其足や軀に着いた花粉を無意識の間に媒介するのであつて周旋料を當てに奔走する媒人などとは類が違ふ、それゆゑ植物の方では、葉と違ふ派手な色を以て其媒介者を招き寄せなければならぬ必要が生ずる、そこであらゆる花の色は葉の色と違つて居るのである、花は媒介者への報酬として蜜といふ甘いものを與へる、これも又造化の妙用といはねばならぬ

此理由に依つて花は種々の色に咲くのであるが、風媒花や水媒花は、此必要がないゆゑ其花も小さく、色も派手やかでないのである、シカシ魔風戀風といふ風媒に依る解語花などは、其靑春の情を滿足せしめんとするには、異性の注

目を惹かなければ相手になつて呉れないので、天然の皮膚の色とは違つた白粉や紅を塗りたて、紫や赤のリボンなどをつけて、誘ふ風あらばの嬌態を示すこと恰も蟲媒花が其色を派手にして、咲き亂れるのと同じ有樣である、風媒花すら斯の如し、況んや蟲媒花に於ておやと云つてよからうされば太古の植物には、或は綠色の花が咲いたかも知らないが、それらは所謂自然淘汰の作用で、其種子を絶やされて今は生存して居ないのであらう

睡眠と燈火の發明

大人の睡眠は一日に八時間或は五六時間でよいが、小兒の睡眠は少くとも十時間以上を要する、若し其睡眠の度が少いと病氣などを起す、これは何に原因するかと、我輩が例の如く考へた所によると、小兒は社會歷史の縮圖とか、反復の原理とか云ふ定則で發育するのであるが、其小兒が大人よりも長く睡眠しなければならぬのは、原始時代の人々は日が暮れると直ぐに寢たのであるから、小兒は則ち反復の原理で永く寢なければならぬのであらう、大人の睡眠時間が短くてよい樣になつたのは、燈火を發明して宵ッぱりをした習慣の結果であらうと思ふ

螢合戰は戀の爭ひ

螢は發光動物の一種であるが、これを我國で「ほたる」と云ふのは「火照」の意である、學者の說によると、螢の發光素は無數の細胞であつて、其細胞に夥多の氣管支が具はり、それが空氣中の酸素のために酸化して光を發するのであると云ふ

さて我國で螢の名所は、山城の宇治川、保津川、近江の瀨田川(石山邊)、大和の佐保川、武藏の江戶川、大宮公園、越後の阿賀川等である、此外各地方々々で螢の名所と稱して居る所が數多くある

是等の名所で大小無數の螢が集つて飛交ふ時折、一團の火玉となつて相爭ふ樣は宛然花火の如き美觀である、此美觀を螢合戰と稱し隨つて源氏螢、平家螢の名も出來たのであるが、何の爲めに螢が斯かる合戰をするのかと云ふと、これもヤハリ雌雄相求むる戀のあらそひ、生殖本能を發揮する修羅道である、鳴かぬ螢が身をこがす、何の因果もあるものか、そのワケを知らぬ人間が螢狩と稱して、笹でたゝき、團扇で押さへる、草に宿かる露の身を散らす嵐の戀知らず、エ、しよんがへ

佛像に小便をかける僞物屋

書畫骨董類に僞物の多いことは何人も知つて居る所である、イカサマ紳士の屏風に明治文晁の山水を貼つて居たり、田舍の旅館に奈良朝時代の古器物らしいものを、床飾りとして居たり、サテは立派な寺院や、博物館に頼朝公六歳の御髑髏、小野道風の和漢朗詠集などの陳列があるのを見ても如何に僞物の多きかは分るのである、其贋造に就ては、眞紙幣の玩弄紙幣に於けるが如き、似ても似つかぬものが多いが、斯道の專門家を欺くには、紙幣贋造者のそれの如く慘憺たる苦心を要するのであつて、一朝一夕に出來得るものではない、例へば圓山應擧の三幅對を僞作せんとするに就ても、絹地繪具等の詮索は云ふ迄もなく、僞筆者たる畫工も妙手と云ふべき老畫伯の手を煩はし、落欵の如きは其專門家に囑し、印肉も亦時代相當の古物を使用するなど、苦心に苦心を重るのである、是等の內幕に面白き談話も多いが、玆にはそれを省いて主題の要を述べやう

○大阪の山中吉郎兵衞と云へば、殆ど誰れ知らぬ者なき日本一の大骨董屋である、東京、京都、名古屋等にも多くの骨董屋があるが、山中の如く數十萬の財産を持つて、內外人を相手に手廣く營業して居る者はない

山中が今日の財産を作つたのは、其眼識で安く買つた物を高く賣り付けた技倆にも因るであらうが、又多くの書畫骨董物を僞造して販賣した惡辣の手腕にも因るのである

彼は佛蘭西に於て、菱川師宣の一枚繪が數百圓にて賣買さるゝと聞けば、直ちに其僞物を作りて輸出し、獨逸に於て鳥居清信の漆繪、奧村政信の紅繪、大に流行せりと聞けば直ちに其僞物を作つて輸出するなど、其結果日本商人の不信用を招きしは勿論、延いて古代浮世繪師の眞價を傷付けた點も少くないのである

斯の如く、商業道德の本心なき彼は、日本古代の銅器類、佛像類をも僞造して輸出した數も少くない、佛像に小便と題する主題はココである、新らしく造つたものを、古物らしく見せるに就ては、種々の手細工を要するが、古銅らしく見せるには第一に銹を着けなければならぬ、銅に銹を付けるには、雨晒しにして置くとか、土中に埋めるとか藥品を塗るとかするのであるが、最も輕便なのは人間の小便をかけるのにある、小便中には多量の安母尼亞があつて、銅を腐蝕せしめるに最も手輕で安價であるので、西方極樂淨土の敎主無量壽佛と崇めらるゝ阿彌陀樣も光明赫耀なら

で黄金色の汚水をかけられるのである
金錢の外には神も佛も無い惡商人とは云ひ、假りにも救世の尊像と唱へらるゝ佛體に、勿體氣もなく、汚人の汚水を頭から濺ぎかけるとは、無法にも程こそあれと云ひたい

虚僞の放鳥

葬式の虚僞虚榮法の一つに放鳥と云ふのがある、其放鳥は鳥屋が飼馴らしの鳩を賣るのであるが、墓所なり齋場なりて放すと、直ぐに飛んで元の鳥屋の巣に歸つて來る、それだから、一羽三十錢以上一圓内外の鳩を一羽十錢平均の割て賣るのである、此事情を知つた或るヨタが、一つ廉い酒の肴を拵へやうと云つて、其放鳥の鳩を放さないで締め殺して食ふた、それを知つた鳥屋が怒つて談判すると、十錢で買つた以上は、此方に所有權があるのだから、放さうと殺さうと勝手だと威張つたが、放鳥は放す習慣であり約束であるから、法律上ヨタの理窟は立たないで、結局損害賠償を取られた、それ以來鳥屋では賣ると云はず貸すと云ふ事にした、そして國家の法律も、放鳥は眞の慈悲心から出た放鳥でなく、全くの虚僞である事を認めて居るのだ、呆れが禮に來るよ

演説會を抵當にして紙を買ふ

伊藤痴遊來訪、奇談の多き中に一笑話あり、曰く「世の中には面白い事があるネー、演説會を抵當に入れる者があるヨ、それは蒙古王(佐々木照山)の梁山伯連だヨ、下之關で發行してゐる日刊新聞『六連報』の紙代が無くなると、いつも演説會を開いて傍聽料を集め、それを紙屋に渡して居る十錢二十錢の傍聽料を取るに拘らず、照山が出演すると毎回滿場の大入で五十圓百圓の實收がある、ところが其演説會を開く日取が惡いと、紙屋に前金を渡す事が出來ないので、來る何日何町の何座で開く演説會の實收全部を抵當に入れるから、紙を何十連借りたいものだと紙屋に交渉する、紙屋も其收入のある事を知つて居るので演説會を抵當に取つて紙を渡す、先月中旬(大正三年七月)創刊一週年祝ひの演説會を開くから僕にも出席して呉れろと云つて來たから、旅費自辨で出張してやつた、其時は入場料二十錢で千五百人餘の聽衆から三百圓ほど集めたが、これも實費差引の收益金は紙屋に取られた、僕も色々な境涯に遭遇したが、抵當入の演説會に出たのは今度が初めてだ、ハ、ア」

植物の頭尾

予が曾て半狂堂隨筆中に「植物の頭尾」と題して、左の如く記したことがある

「或人物語るには、植物は土中が頭である、人間から云へば逆さに立つて居るのぢや、何でも生物は頭の方で飲食物をたべて臀部へ排泄するのが規則である、それ故土中の肥料を吸取る根は植物の頭で、花や實は植物の糞である、人間は其糞を食つて喜んで居るのぢや」

植物の發育機關は、其根ばかりでなく、葉が空氣中の炭酸瓦斯を吸ひ取つて、其營養分として居ることを度外にした滑稽論ではあるが、之を哲學上から考へて見ると面白い理論である、植物は根の方が頭で、枝の方が尻であるのかも知れない、宇宙の大觀から云へば空間に上下はないのである、人間は自己が直立した頭の方を上として居るも、植物は根の方を上とし頭として居るのかも知れない、人間は河海の水を恐ろしいものとして居るが、魚には極樂の住家である、土龍や蚯蚓は土中で生活して居るではないか、蝙蝠軒端に掛りて人の倒行を笑ふと云ふ俗諺は人間が云ふたことて、蝙蝠に云はすれば、逆さに止まるのぢやなくて、あれが正式で、人間の方が逆さに歩いて居るのだ

それから又、生物は總て生殖機關が尻の方にある、(頭の方に生殖器のあるのは、淫書の滑稽畫「天の邪鬼」のみである)、されば植物の枝に咲く花に雌雄の別があつて、春三夏六秋一無冬に生殖作用をして居るのを見れば、枝の方がお尻に違ひない

空より落し鳥は無し

近頃或老學者が來て曰くには「飛行機〱と云つて今の若い奴等は騷いで居るが、實に馬鹿らしいものぢや、昨日も亦墜落して即死したと云ふぢやないか、世界列强との對抗上、今は軍備として必要であるか知らないが、全體發明者がわるい、鳥人スミスなど云つて囃された其鳥人も墜落したぢやないが、昔から鳥は多いが、氣流が惡いの、羽が損じたのと云つて、空から落ちた鳥は一疋もないよ、人にして鳥を眞似て鳥に如かざるものだ、人間に空を飛ぶ必要があるのならば、天帝が羽を附けて下さる、羽が無いのに鳥の眞似をするのは、天性に悖つた事だ、其罰で死ぬと見るより外はない」云々と

徴兵檢査と黴毒檢査

明治維新後の半開時代には珍な事實が多くあつた、其中で最も可笑い一對の談、徳川幕府を倒して王政復古となつた明治五年には、廢藩置縣と共に從來の武士を廢して農工商の壯丁を兵士に徴集する事にし、同年の十一月其徴兵の主旨を太政官から告諭として全國民に知らしめ、翌明治六年より實施する事になつたが、無智の農民は其主旨を解せずして、徴兵檢査に應じないのみか、美作、伯耆、出雲、讃岐、阿波、豐後等の各地に暴動が起つて戸長(村長)の家を燒き、社寺を燒き、學校を燒き、竹槍小銃で縣廳に迫り役人を殺傷するなどの騷ぎがあつた、そして其暴動の原因は何かと云ふに、太政官の徴兵告諭文中に「西人之を稱して血税と云ふ、其生血を以て國に報ずるの謂なり」とあつたのを誤解して、「徴兵とは嘘である、我々の生血を絞り陶器の染料として異國に賣るらしい」との流言が各地に傳はつたが爲めてあつた

娼妓の黴毒檢査は明治四年九月に小菅縣千住驛(今の東京千住)の娼妓に施行したのが最初てあつた、翌五年には各地の藝妓娼妓にも實施する事になつたが、大阪の賣女連は不服を唱へ、是非檢査を受けねばならぬのならば廢業すると迫る者が多かつたので、樓主は其筋に檢査猶豫の嘆願をするなどの騷ぎがあつた、其不服の原因は羞恥心が主であらうが、誰が言出すとなく、黴毒檢査など云つて實は陰中から眞珠を採るのだ、眞珠を採られると長生きしないとの浮説が廓中の無智な賣女に傳つた爲めてあつたさうな

人體の改造すべき點

我々人間を造るまでには造物主も隨分頭を痛めたことてあらう、眼はドコに附けやう口はドコに附けやう、手は何本位あつたら可からう、足は何邊位から折れるやうにしたら可からうなど〻、それは〱迚も我々が想像の出來ない程の骨折りてあつたに違ひ無い、然れども弘法にも筆の誤がある如何に悧巧な造物主にも亦缺點が無いとは云へない、社會が進歩するに隨つて益々其缺點が顯はれて來るから、我々人間にも種々の注文がある

何と云つても油斷のならぬ恐ろしい世の中であるから、先づ第一に後頭部に顏面の機關悉くとは云はぬが、ドウカ眼をモウ二つだけ附けて欲しいものである、然すれば車夫がハイ〱と云はなくても自轉車乘がチリン〱と喧ま

しくベルを鳴らさなくても、此方から氣を利かして道を避けてやることが出來て少しも危くない、そして口は顔面に不必要であるから差當り胸部へ移轉させた方が、お孃さんがオサツの隱し喰をする時などは最も便利であらう、次は本題の主眼たる人體中部の改造であるが、我輩の考へでは腹部の中央に晏然として構へて居る臍なんか第一に立退を命じて、其代りに彼のカンガールの如く、大きな袋を附けて貰ひたい、之をハイカラーに云へば嶄新奇拔な肉ポケットを拵へて貰ひたいのだ

と云ふ難かしい注文をするのは何も造物主を苛めやうなどの惡意からでは無い、眼光炯々たる機敏な掏摸共が到る處に跋扈して居る今日、インバネスやシャツのポケット位では中々安心が出來ないからである、況んや生命よりも大切な財布を帶の間に挾んだり內懷に入れるに於てをやだ、ソコで我輩の所謂肉ポケットの必要が起つて來る、今此肉ポケットを注文通り拵へて貰へれば、時計や財布は勿論のこと其他種々な雜貨なども入れられるばかりか、婦人はカンガールの如に赤ん坊迄此肉ポケットに入れて歩くことが出來るし、地方から都會見物に出掛けて來て、芝居や活動寫眞の繪看板に見惚れてポカンと口を開いて居ても、此肉ポケットさへあれば今迄のやうに掏摸に引掛る虞れは斷じてない

それから殘る所は手と足とであるが、手はモウ少し長くて更に一つか二つ程餘計に出れば、伸縮自在となつて背の痒い所にも手が屆き、風呂に入つても思ふが儘に擦ることが出來やう、又手首の關節邊に左右一つ宛輪になつた圓い鐶があつたら、傘の柄などは其中へ通して支へることが出來るから別に風呂敷包位持つて歩けるぢやないか、そして足は矢張猿の足の如になつて居た方が便利であらう、ドコの小兒は木から落ちて死んだの、誰某は二階から轉んで大負傷をしたなど丶云ふのは、ツマリ人間の足が手ほどの働きが出來ないからで、猿の足にも劣る證據である、於玆乎人間の改造論が起るのだ、注文すれば限りはないが、今は唯改造の主要點だけを述べて置く

夫婦同行と大阪

武家時代に夫婦が連立つて外出するのは、柔弱の行爲として排斥したのであるが、明治の代となつた東京では夫婦の同行は尋常の事と見て、誰も怪まないが、大阪の風習はさうてない、何だが嘲るが如く、又羨むが如き態度である、

近年は萬事が東京風に變つて居るので、夫婦の同行も追々と多くなつたが、コ、十數年前には珍らし氣に目送して「あれは鑄掛だ」と云つて笑ふやうな氣味があつた、これは因習の脫けかたが遲いのみでなく、大阪には特別固有の風習があつたらしい、文政四年の夏、和蘭から駱駝の牝牡が初めて日本に渡來し、大阪の難波新地で觀世物に出た時、市中の評判となつて、それより夫婦連て歩くのを「駱駝」と云ひなすことが流行し、其後又文政七年の頃、土瓶の燒つぎを業とせし夫婦者が「土瓶の鑄掛〳〵」と呼ばつて大阪市中を廻つたので、夫婦連立づて外出するのを「土瓶の鑄掛」と云ひ、或は略して「鑄掛」とのみ云ふとの事は『雲錦隨筆』といふ本に出て居る

斯樣な風習は、文政頃に初めて起つたのでなく、それより前にもあつたらしい、享保十五六年頃の刊本と見るべき由緣齋貞柳の狂歌集『家づと』の中に次の如き一項がある

夫婦丸　大阪町中を夫婦づれにてあるく賣藥あり、
よんでめをと丸といふ

とある、夫婦の同行を氣にして、大阪人が妙な流行語を唱へ出すのは、單に武家時代の風習に因る事とのみは見られないやうてある

猫を妖怪物視する原因

鍋島の猫騷動と云ふ怪談、猫が手拭を冠つて踊つたと云ふ怪談など、古來猫を妖怪の動物として居る、これは何に原因するかと云ふに、猫は陰性獸であつて、夜間活動する事其瞳孔が晝夜甚だしく變化し、又暗所に於て眼の光る事、人の屍體を跨げば其電氣にて屍體が動搖する事、暗室にて其背毛を撫れば光を放つ事、死して閉目せざる事、常に柔順を裝ふも、怒れば態度一變して獰猛の相を現はす事顏面を洗ふ手振りが人の動作(手招き)に似たる事などが、怪物視さるに至つた原因であらうと思ふ、古書に「猫が油を舐るは、是當に怪をなすの表たるべし」とあるが、油を舐るのが何で怪物の證據であるか判らない人に化ける狐が油揚を好むと云ふに因るのか、飛頭蠻(轆轤首)が燈火の油を舐ると云ふのに因るのか、いづれにしても妄說であつて、怪物の證據にはならぬ



愚なる善男善女

今更いふまでもない事だが、迷信の力といふものは實に偉大なものである、往年京都の東本願寺が山門を建てた際の如きも、各地から其派の信者共が百里二百里の道を遠しとせずして出掛けて行き、高い宿屋飯を食つて、土運びやら拭掃除やら頼まれもせぬ事に精を出して、獨りで有難がつて居たさうであるが、中にも女などは荒仕事が出來ないから相濟まないといつて、一同が命よりも大事な黒髪を佛祖の爲めに惜氣も無く斷ち切り、それを毛綱に撚合せて、寄進したといふこともある、又先年西本願寺の前法主が歿した時にも、例の愚昧な迷信者共は、有難い御門跡樣のお湯だといつて、不潔極る湯灌の水を爭つてガブ〜と飲んだ上家の者にも頂かしてやらうと、それを瓶に詰めて持つて歸つたさうである、其後之を聞た詐欺師共は、こいつはいゝ金儲の種だと早速ニセの湯灌水を作つて、各地の馬鹿共に賣付けた處が、續々買ふ者があつて、彼等詐欺師共は思はぬ儲に雀躍して歸つたといふ珍談がある、迷信といふことは、醫學上一種の精神病であるから、其頂上に成ればもう清潔不潔の見界もないのであらう、かういふ馬鹿者共が年々本願寺へ上る賽錢、御冥加金等の金額は實に莫大なものであるが、其信者共が三度の飯も食ふや食はずにして喜捨した金は、三寶の爲どころか、淫樂の金に成つてムザ〜消えて了ふのである、それで或人が餘り笑止に思つて其事を信者の爺樣婆樣に警告してやつたところが、信者共は驚くかと思ひの外、口を揃へて「私共の金が御門跡樣のお役に立てば誠に有難いことです」と言つたのには、其人も呆れて開いた口が塞がらなかつたさうだ、いつぞや北陸の迷信者某が其娘を本願寺へ伴れて行つて、どうか御門跡樣にお手を附けて頂きたい、と頼んだといふ話も、吾々から見れば實に馬鹿々々しい骨頂であるが、其娘の親の氣では、大方、娘が御門跡樣の妾に成れば、九族が極樂にでも行けると思つたのであらう、いぢらしいといはうか、何といはうか、日本にもまだこんな迷信者があるかと思ふと、情無くなる

元來北陸地方の本願寺迷信といつたら九州地方の法華尊信と相對して有名なものだが、近頃本願寺の負債が嵩んで差押騷ぎが頻々と起るのを聞いた彼等迷信者共は、皆齒を食ひ緊つて口惜しがり、金貸共が卑しい身分をも顧みず生佛樣をお責め申上げるのは實に勿體ない事だ、吾々はどんな

事をしても金を貯めて御返濟金の足に獻納せねば成らぬと言合つてるさうである、迷信といふ事は特り我國のみならず何國にも存する事であつて、社會政策の上から見れば、天下の愚夫愚婦をして惡事をなさしめない爲めの好方便であるが、其方便も玆に至つては寧ろ社會の進步を妨礙する屛障である、我輩は何處の地に往つても、佛閣が非常に壯大を極めて、社會の偉人を祀れる神社が寧ろ寂寞であるのを見て、その愚夫愚婦の多いに呆れるのである

異性研究心の好成績

毎年文部省て擧行する醫師開業試驗の際、男女混合の受驗者に對して、男子の生殖器に關する學說の問題を出すと、男子の過半は零點であるが、女子の答案はいづれも完全であるさうな、これに反して、女子の生殖器に關する問題を出すと、男子の答案は總て滿點であるが、女子は大概成績不良であるさうな

これは異性の生殖器學には興味が生じて注意を拂ふ度が高い結果であらうと思ふ、此點から云ふと男子の生殖器病は女醫が治療を能くし、女子の生殖器病は男醫が治療を能くし得る筈である、但しその事實は如何か知らない

嚙付く犬ありといふ貼札

人間は多くの財產を所有してさへ居れば、一生氣樂に暮らせると、誰でも思つて居るやうだが、それは貧乏人の偏見である、財產が多くあれば、勞働せずして衣食を得られるから身體は安逸であらうが、心に安逸のヒマは少しもない火事がなければよい、盜賊が來なければよい、息子が放蕩者にならなければよいがと、我所有財產のために、日夜氣苦勞が絕えない、死後の心配までもする

播州須磨から舞子までの間に、財產家の別莊が多くある、其表面を見て「こんな立派な別莊に住んで居る人は、嘸氣樂であらう」と誰でも思ふだらうが、其門の柱に「此內に嚙付く犬あり御用心」と貼紙した家が幾軒もある、人に嚙み付くやうな惡犬ならば、殺すとか、放逐するとか、或は檻に入れて置くとか、相當の處分をしなければならぬものてはないか、然るに此家に惡犬ありと廣告するのは何故てあらう

これは云ふ迄もない、惡犬廣告の貼札は、物貰ひ除け、盜賊除けのお守りてある「ア、金持にはなりたくない」と、賢さうな或る貧乏人が云つた

滑稽法律辭典

▲權利　權利とは職權に據つて利益を圖ることをいふ、例へば官吏が其職權を濫用して賄賂を貪り、機密を利用して株の大儲けを爲すが如き、皆其の類なり

▲義務　義務とは義理の爲めに據どころなく或る務を爲すことをいふ、食客が食はせて貰つて居る義理に因つて坊チヤンのお馬の役を務め、下宿屋の娘が時々半襟など貰ふ義理につまされて、ヒヨツトコ學生のために務を爲すが如し

▲契約　契約とは二個以上の當事者間に或る效果を生ぜしめんとする共通の意志表示にして、即ち男女相契るの約束なり、而して此契約に諾成契約要式契約等種種の區別あり諾成契約とは二人の相談が出來次第直ぐ實行せらるゝ契約にして不見轉藝者の如きものをいひ、次に要式契約とは、遊里等に於て熊野の權現に祈誓を懸け、お前ならでは男は持たぬと宣誓したる證書を認むるが如き契約をいふ、されど此の要式契約は決して信ずるに足らざるものとす

▲不動產　法律上物を別つて動產不動產の二とす、動產とは動く物にして、不動產とは動かざる物即ち不動樣をいふ不動さんは元來神聖なる佛體にして普通之を差押ふ可からざる物なりと雖も、若し住職放埒にして其債務を辨濟せざる時は其辨濟を得る迄特に之を差押ふる事を得べし

▲呼出狀　吉原遊廓の娼妓等が其馴染の遊冶郎に發する公式書狀にして、其文面は概ね一定せるを常とし、之に接したる者は即時出頭するの義務ある者とす、遊冶郎若し不可抗力に因り其呼出時限に遲延したる時は、當該馴染娼妓の審訊に對し其事由を疏明すべきものなり

▲既得權　既得權不可侵とは、一旦得たる權利は之を奪ふ可からざる事を稱するものにして、俚諺にも他の物は我が物といへば、假令他人の所有物と雖も、一旦之を盜みて我が物としたる以上は當方に此既得權あるものなり

▲條件附法律行爲　行爲の效力の生滅が條件の成否に懸るものにして、其條件に停止條件及び解除條件の二あり、停止條件附法律行爲とは條件の成功に據つて行爲が效力を生ずるもの、例へば俺の言ふ事を聽けば縮緬の長襦袢を買つてやらうとか又、今に妾が本宅へ乘込むから、旨く行けば彼の家を横領してお前と財產を山分にしやうとかいふが如き類の契約をいひ、解除條件附法律行爲とは條件の成功によつて行爲の效力無からしむるもの、例へばお前に金時計を遣らう、併し外に男を拵へたら駄目だよ、といふ契約の

如きをいふ

▲勿論解釋　他の下等なる例より推して事を斷定する解釋にして、例へば某煙草屋の看板娘は、あんな南瓜野郎にもチヤホヤするのだから、己の樣な好男子が行けば勿論欵待して呉れる、と解釋するが如き是なり、されど此解釋は多く自惚に陷り、浮乎々々すれば飛んでもなき赤耻を搔くことあるを以て、深く注意せざるべからず

▲財產差押　債務者即ち金を借りたる者が、期限に成りても返金せざる時、高利貸等殘忍酷薄鬼の如き者が脅しの爲めになす惡業をいふ、若し之を捨置く時は大事の家財道具をも競賣に附せらるゝの悲運に遭遇すべきも、娘をして秋波一轉巧に高利貸爺をグニヤつかしむる時は、單に差押を解き得るのみならず全部借金を踏倒す事を得べし

▲命令關係　命令關係とは即ち服從關係にして凡そ命令は如何なることゝ雖も服從せざるべからず、小間使が御前の命令に服從し、宿六が嬶ア左衞門の嚴命に服して、子を負ひ乍ら飯を焚くが如き、皆顯著なる例證にして、若し此命令に違反するときは、非常なる懲罰を受くるものとす

▲合資會社　女の商法に基きて數人の旦那が各々金を出し設立する社にして、之が出資者たる旦那は各其持分に應じて、一六三八等の定日に限り、社員の共有財產たる女を自由に使用するの權利を有するものとす、社員の退社は凡て自由なるも、其退社に際しては慣習上三十圓乃至千圓の手切金を提出せざるべからず

▲家宅搜索　女房の權限に基き亭主浮氣の證據物件を發見する爲に行ふ搜査處分にして、亭主の就寢後、潛かに其着衣の袂等を探索するは勿論、亭主外出の跡をつけて、妾宅の所在を嗅ぎ出し、裏口より忍入る等臨機の處置を採り得るものとす、而して搜査の結果、浮氣の證憑十分なりと認めたる時は、直ちに其場に躍込みて亭主の胸倉を捉へ之を自宅に引致することを得べし

▲競賣　競賣には種々あれども、近頃最も多く行はるゝものは娘の競賣なり、競賣に附すべき娘の現在地に於て爲すを原則とし、若し其女容貌醜惡にして其現在地にて賣附くることを得ざる時は、他人の寫眞を借りて現在地以外の新聞紙に求婚廣告を出し、一日も早く賣附けんことを競ふべし、競落人競落後若し娘の引受を肯んぜざる時は速に强制執行に關する規定を適用すべし

▲貸借　貸借に消費貸借、使用貸借、及び賃貸借の別あり
消費貸借とはチヨイと煙草の火を貸して呉れと言つて之を

消費する類にして、使用貸借とは他人の物を我が物として使用することをいひ、賃貸借とは金錢若くは半襟等を賃錢として拜借することをいふ、凡て借りたる物は返却の義務なきこと古來の原則なりといへども、默つて他人の物を拜借するは刑法の制裁を受くるものとす

▲先取特權　先取特權とは或男子が他の者に優先して行ひ得る權利にして、金ある者若くは美貌ある者に限り、特に女に對して此權利を行ふことを得、故に金少き者容貌の醜惡なる者は指を啣へて引き下るか、謹んでお古を頂戴するの外無きものと知るべし、若し先取特權者の眼を竊みて之を靡かさんとするも、先取特權者には追及權あるを以て直ちに奪還さるゝものとす

貴婦人令孃の君

女子の虚榮心を唆ることを、販路擴張の唯一手段にして居る現代の婦人雜誌、その卷頭にベタ福女の寫眞を載せて

伯爵何某新夫人何子の君　醫學博士何某令孃何子の君

など「君」と記すことが近年の流行になつて居る、實に馬鹿〳〵しい一事であると云ひたい

「君とは至尊なり、民に長たる通稱なり」と云ふのが本義である、支那では王昭君など士太夫の妾を君とも云つたが日本では淫賣婦(遊女)を君と云つたのである、平安朝時代に於ける淀の君、江口の君、神崎の君など云ふのは、皆淫賣婦であつて、山城の淀、河内の江口、攝津の神崎に居た船饅頭、浮れ女の事である、其時代には淫賣婦個人の名にも中君、小君、孫君など云ふのがあつた、又其遊客を子夫と云ひ、遊女を子君とも云つたので、遊君と云ふ語も出來後には立君、厨子君、辻君、格子の君など云ふ名稱も出來たのである、豐公五妻の一たる淺井長政の女茶々が淀に居たので淀殿と呼ばれたが、それを淀に居る妾と云ふ意で世間では淀君と云つたのである、姬君と云ふのも元は尊稱でなく、浮れ女の別名であつたのである

要は女に對して「君」と云ふのは、淫賣婦に限つて居たのである「君と寢やうか五千石取ろか……」の君も亦淫賣婦ではないか

現代の貴婦人令孃と云はれる者が、その淫賣婦視せられる所に妙味があるのだと云ふのならば、我輩は默つて居る

此說には反對者があるだらうと思ふが、チョット癪に障る事だから皮肉に云つて置く

＊　＊　＊　＊　＊

文野と名稱の長短

太古未開時代には、器物の構造も日常の行事も凡べて單純であつた、故に事物の名稱なども、類似の語が尠かつたので、一々之を細別する必要が無かつたと共に假令冗長な名稱でも、悠閑な時代であるから省略して呼ぶ樣な事は無かつたのである、然るに現今の如き文明時代に於ては、社會組織が種々複雜に成り、事物の名稱も類似の語が多くなつて居るので、一々之を細別する必要が起り、又冠稱を附して、其言語と文字の汎意を避けると共に、名稱の或部分を省略して、發音と筆記の繁雜を防いで居る、今其等の例を擧ぐれば、最初は單に「保險會社」と稱して居た者が段々同種のものが殖えるに從つて、何々保險會社と冠稱を附し、又保險の種類が生命、火災、海上など區別されるに至つたので、同じ明治保險でも生命と火災、兩樣に稱へねばならぬ事になつた、其他學校に於ても、最初は單に「帝國大學」と稱して居たのが、京都や九州や東北などにも出來たので更に其地名を冠する事に成つた、初め帝國大學を略して「帝大」と云つて居たのが、是に於て「東大」「京大」など〻變更されるに至つた、これ卽ち省略と汎意を避ける事との二つを兼ねた呼び方である、又鐘ヶ淵紡績株式會社を略して「鐘紡」と云ひ、或は南滿洲鐵道株式會社を「滿鐵」と略するなどは、最も適當な省略法であつて、所謂要領を得た呼び方である、斯ふいふ例はまだイクラでもあるが要するに名稱の省略は時間の浪費と、手數の繁雜を防ぐ上から、必然的に起るものである、而して類似の名稱が多くなるに從つて、冠稱或は其他の稱呼を附加して其汎意を避けるといふのも、亦適當の手段である、斯の如く名義は複雜と成り、稱呼は單純を主として居るが、其處に兩者の調和を生じて、社會の進歩を一層敏速ならしめるのであるそして事物の何たるを問はず、總ての複雜を單純に歸着せしめると云ふことが、複雜社會たる文明の一表象であらねばならぬと思ふ

東京市麴町區麴町一丁目に警察署があつて、其署の名を「麴町麴町警察署」と稱して居る、如何に區制上の爲めとは云へ、無用の冗字を重ねたものである、誰も之を其名義通りに呼ぶ者はあるまい、此一事にも今の役人根性が表現されて居る

新平民の娘　眉目清秀の評判美人

階級思想の失せない舊弊人は、四民平等といふ開明時代にありながら、今尙穢多非人と侮蔑して、是等と交際するを避け、酒食は勿論言語をかくるをも汚はしいとする者が多い、予の鄕里は讃岐の中部小野といふ所で、高松から五里丸龜から四里、琴平から三里ほどある山間の僻地であるが此階級思想の舊習が失せないこと最も甚だしい地方であるそして予の實家の近傍有岡といふ所に、三十軒ほどの穢多部落があつて、各々耕作や履物製造に從事して居る

予の父は勤儉力行の人であつたが、明治の初年穢多非人の稱を廢されて新平民となつた頃から、他の非難をも顧みないで、其新平民共を愛撫して居た、年に二三度は其部落一同に飯米を施與し、金を借りたいと云へば無利息で貸し、田畑の小作を望む者があれば之をも喜んで貸し、每期の年貢も金でなく自作の米や麥で納めさせて居た、川向本家の米には穢多米を混じてあると云つて、米穀の仲買人が連合して取引しなかつた時もあつたが、當時父は「穢多も非人もあるものか、國家の大本たる農作米を侮辱するとは人道のシレモノ、三寶樣の罰當り奴」と罵つて、其穢多米を丸龜や高松の問屋に直接卸賣りの取引をして居た事もあつた

予は斯樣な事實を幼少の頃から見聞して居たので、予も亦新平民を輕蔑することなどなく、寧ろ自ら進んで彼等に同情を寄せた、予が十三四歳の頃、附近の綾川で鮎などを捕る時には、いつも穢多に手傳はせて、十錢二十錢の賃を與へて居た、或夜鮎狩の後、松明を持たせ魚籠を持たせた穢多共に、酒や鹽を買はせにやつて川原の砂上で其穢多連二三人と共に鹽燒の鮎で酒を飲んだ事があつた、すると穢多共は之を光榮と思つて「宮武の若旦那樣と鮎を肴として酒を飲みました」と方々へ吹聽して歩いたので、近鄕三四ケ村の普通農民は之を聞いて眉を顰め、ある限りの惡口雜言を言ひ囃し、一族親類の者共は、その眞僞詮索のため態々やつて來て、予の母に詰問するなどの騷ぎが起り、結局母が「二度とさやうな事はさせませぬ」と誓言してヤット穩便に濟んだ事などもあつた、穢多と共に酒を飲んだと云ふ事を、何か人道上の大罪でも犯したかのやうに思つて居るのである

さて、其前から父が穢多部落の總支配をさせて居た藤岡宇八といふ新平民があつた、その人柄が正直で義氣もあり力量もあつたので、部內の者いづれも悅服して居たのである

その長男某は阿波で修學して來たとかて、近村にあつた同じ特殊部落の小學校の教員を勤めて居たが、これは他の特殊人に似ず、己れ一人幾らかの學才があると云ふ事を鼻にかけ、其言行甚だ生意氣なりとの非難もあつたが、それは舊弊思想で彼等を見た偏見の批評に過ぎない、風采も好く人格も好かつたのであるが、不幸にして間もなく病死した此病死した某の妹にお鶴と云ふのがあつて是が近村近鄕に類のない頗る美人であつた、原田の孃樣は別品だとか、江川の奥樣は綾南一等の美人だとか云つても、此お鶴さんの傍へ行つたら比べものにならない、村の氏神の祭日に、このお鶴さんが木綿着物に化粧なしで參詣すると、紅粉綾羅の盛裝者も一同顔色なしである。「あれが穢多の娘でなかつたならば」とはお鶴さんの顔を見た人毎の定評であつた予も青春の血が湧くと云ふ年頃であつたので、途上ゆくりなく出逢つた時、お鶴さんが腰を屈めて挨拶し「若旦那樣御機嫌樣」と、所謂明眸皓齒で、嬌羞を帶び微笑を湛へつゝ此方の顔を見た時には、暫く心氣恍惚として、鄕黨の名聞も慈愛の兩親をも捨てゝ了はうかと想つた事もあつた後世「天満天神樣」と崇められた菅原道眞公が仁和の昔、三年間讃岐守になつて居られた事は、日本の正史にも明記する所であるが、此三年間菅公が讃岐守として在任されたのは、瀧宮といふ所である

歴史畫などによくある菅公が農民のため雨を祈つたと云ふ城山の麓から一里ほど南、綾川の東岸にある一小鄕で、その瀧宮と云ふのは綾川の流れの中央に大巖奇嶇として淸潭ひろき鮎瀧といふ景勝地があつて、其瀧の畔りに牛頭天皇の宮があるので、瀧の宮と云ふのである、菅公在任當時の廳舎であつた遺跡に天暦の頃天満天神宮を建てられたのが今に現存して、菅公の遺德を慕ふ鄕民の崇拜を享けて居るこの瀧宮は予の實家から十町ほど隔つた所、特殊部落の有岡からも同じ距離であるから、酒醤油その外日用の雜品はこの雜貨店で買ふ事になつて居る、そこで新平民の娘、眉目淸秀のお鶴さんも、日々竹の皮草履を賣りに歩いて、その二三十足ほどの草履を賣り盡すと、この瀧宮に立寄つて父親の晩酌に供すべき地酒何程かを買つて歸るのである新平民、否穢多と侮蔑されて居る悲しさに、酒店の戸内に入ることも出來ず、表口に立つて腰を屈め「旦那樣、どうぞ酒を一合だけ御賣りなさつて下さりませんか」とお拂ひ下げを請求するのであるが、その酒店では穢多に賣る時の桝とか漏斗とかは、普通人に賣る時のとは違ふ別の物にて

別の個所に置いてあるのである、さりながら酒店の主人もお鶴さんが酒を買ひに來ると「お前は別嬪だからマケてあげる」と戯れながらも、色氣を含める愛想に、お鶴さんの弟が買ひに行くよりも二三割がた酒の量が多いので、自然お鶴さんが酒買ひの役に當てられるのであつた

瀧宮の若い男共は「アレ見い、又お鶴が通る、別嬪ぢやナー、惜いナー」と云ひつゝ、舊弊思想に囚はれた因習と、鄕黨の制裁が怖いと云ふ念から、誰とて彼に一指を染める者もなく、ヤハリ「あれが穢多の娘でなければナー」と云つて涎を垂らすのみであつた

然るに、數村内では囂々と傳へ、瀧宮では開闢以來の大問題として騒ぐと云ふ珍事が起つた、それは瀧宮の住人半商半農の苧阪芳藏の次男粂吉と云ふのが、穢多のお鶴と情を通じたのみか、お鶴の家へ押掛婿として乘込んで居ると云ふ始末、サー斯うなると、平常騒いで居た穢多仲間の若者共は勿論、近鄕數村の者共は、奴はいゝ事をした」と云ふもあり「女の無い國でもあるまいに、穢多の娘に惚れるとは阿房の骨頂だ」と罵るもあつて、二人寄れば此噂さて持切り、中には態々お鶴さんの破家を覗きに行く者もあつて「粂吉はお鶴と咄しをしながら草履を造つて居た」とか、或は二人仲よく金毘羅參詣に出かけた」など注進をする

戀に上下の隔なく、四民平等といふ明治の聖代に於ては、何の不思議でもなく、問題でもないのであるが、舊弊思想の失せない未開地では、村會を開いて事の處決を評議すると云ふ馬鹿氣た事になつた

それは初め粂吉がお鶴さんと情を通じたのは、固より秘密の間に行はれた事であつたが、山陰や野末の媾曳も、度重なるにつれて、何時しか露顯し、終に粂吉の兩親の耳にも入つたので、兩親の愕きと怒りは甚だしく「穢多の娘を慰みものにするやうな腐つた料見の奴は、一日も此家には置かぬ、早く出て行け」と勘當の言渡しを受けたので、粂吉は「穢多〳〵と仰せになりますが、今は穢多と云ふものはありません、我々と同じ平民であります、だが舊弊の御意見で出て行けとなれば出ます、お鶴の家へ婿養子に行きます」と戀の熱情は、兩親や兄弟を捨てる氣になつて、終に押かけ婿となつたのである

押かけ婿の粂吉は、お鶴の兄が死亡した後であるから、藤岡宇八の相續人として送籍を村役場に要求したのである、そこで實家の兩親や兄弟は、一家の恥辱であるから、一日も早く送籍して縁を切つた方がよいと云ふので、送籍に異

議は唱へないが、村の重立つた者共が承知しない、戸長の意見は「穢多でも何でも、今は平民であるから、送籍を拒む理由はない」と云ふのであるが助役や書記共は「昔から此瀧宮に一人の穢多もないに、今度此村から穢多の家へ送籍したなら、瀧宮で穢多を一人拵へる事になつて、一村の名折である、これは飽迄も拒むことにせねばならね」と頑迷説を主張する者があるので、終に村會を開いて此事の是非を決議して、粂吉の生家たる苧阪全家に他村へ轉籍して貰つて、其村から送籍させれば好いと云ふのもあつたが、粂吉の兩親は粂吉に對して勘當の言渡しをしたのであるから、他村へ轉籍する理由はない、粂吉の請求通り送籍して呉れと迫るので、村會議員共の評議も決定しないで、結局送籍の事は中止となつた、送籍は中止となつても、粂吉とお鶴さんの仲は相變らず睦じく、所謂鴛鴦の契りであつたが、好事魔多く、粂吉は性質の缺點のために、お鶴さんの兩親と屢々衝突して口論した末、何處ともなく立去つて、旅稼にでも出たものか、其後トント消息がなくなつた、お鶴さんは戀しい男に別れて、暫くは淋しく日を送つて居たが其後周旋する者があつて、神戸福原の某樓へ娼妓として身を賣つた、元來が美貌の上勝氣な性質が呼び物となつて全盛を極めたが、馴染の客も多かつた中、某商館の番頭に見込まれて落籍され、今は神戸紳士の令夫人として數人の子の母となつて居る

仰ぎ臥して三味線

江戸吉原遊女



『お竹大日如來』と云ふ合巻草紙に、右の如き遊女が、仰向になつて炬燵にあたりながら三味線を彈いて居る繪があつた、墮落した文化後の遊女の放埒生活を察し得られる

後の世の明治物語

昔の有名な國學者本居宣長は、其著『玉勝間』と云ふ本に、斯う書いてある

もし人といふ者、今は無き世にて、神代にさる者ありきと記して、その人といひし者の、ありし樣、まづ上つかたに首といふ所ありて、その左右に耳といふものありてもろ〳〵の聲をよく聞き、おもての上つ方に目といふもの二つありて、萬の物の色形を殘る隈なく見あきらめ、その下に鼻といふものありて、物の香を嗅ぎ、又下に口といふものありて、奥より聲の出るを唇を動かし舌をはたらかすまゝに、その聲さま〳〵に變りて詞となりて萬の事をいひわけ、又首の下の左右に手といふものありて末に岐ありて、指といふ、此を呼びはたらかして、萬のわざをなし、萬の物を造り出せり、又下つかたに足といふものこれも二つあり、動かしはこべば、百重の山をも昇り越えて、何處までもありきゆき、かくて又胸の內に隱れて心といふものありつる、こは有るが中にも、いと怪しきものにて、色も形もなきものから、上の件の聲を聽き、目の物を見口のものいひ、手足のはたらくも皆この心の仕業にてぞありける、さるに、この人といひしもの、ある時、いたくなやみ、やう〳〵に重りもてゆくほどに、終にかの萬の仕業みな歩みて、聊か動くこともせずなりてやみにき、と記したらむ書を、儒者の見知らむには、例の信ぜずして、神代ならむからに、いづこのさる怪しき事かあるべき、すべて〳〵、理もなく拙き寓言にこそあれとぞ云はむかし

是は假に今を昔にして、當時の儒者を罵倒した文句であるが、今日の如き繚亂の世の中でも、いつかは屹度圓滿世界が來るに相違ない、さうなつた時に若し今日の物語をして聞かせたならば、どうであらうか、今本居先生の口調に倣ふて、其時の世人の感想を現ぜしめて見せる

▲もし大臣といふ者●●其時は無き世にて、昔明治の代にさる者ありきと記して、其大臣と云ひし者のありし樣、先づ胸には燦びやかなる勳の章幾許とも無く飾り、手盛り若しくは僥倖にて得つる爵位をある可からず誇りて、己れ國の礎とも成る可き身乍ら大事の御時とも辨へず內の政を疎そかにし、異さへぐ外國の侮をも得防がで、只管に私の庫を富ます事をのみ考がへ、相場賭博など、品下りたる勝負に浮身を窶すはいふも更なり、川竹者に鼻の毛を拔かれ、

女房の爲めに三千六百圓のブローチを買ひ取らせる等痴れたる行ひ多かりき、と記したる書を其時の世人が見知らむには、信ぜずして、明治の代ならんからに、大臣ともある可きものが、などてさる怪しき行ひことかある可き、凡て〳〵、理も無く拙き寓言にこそあれとぞいはむかし

▲もし議員といふもの、其時は無き世にて、昔明治の御代にさる者ありきと記して、其議員といふ者のありし樣、先づ鼻の下に髯鰌なんど生やし、物騷がしく打罵れど、假名文字さへ得知らず、緊急をチンキウと讀み、矛盾をホコトンと讀むなど小學生にさへ劣る程にて、名こそ國民の代表なれ、浮れ女などのあるらむ如く、黄金多き方に節操を賣りて、曲れる直きは問はず從ひ靡き、選擧民の憤りて其罪を詰る者あれば汝等も始は賄賂を取りて我を選み擧げたる者ならずや、自らの眼にある梁をとれと、憎さげに嘲笑ふなど、穢れたる擧動を爲しきと記したらむ書を、其時の世人が見知らむには、例の信ぜずして、明治の代ならむからに、何處のさる怪しき事かあるべき、凡て〳〵、理も無く拙き寓言にこそあれとぞいはむかし

▲若し裁判官といふ者、其時は無き世にて、昔明治の代にさる者ありきと記して其裁判官と云ひし者の、ありしやう先づ頭および身には、閻魔大王の如き冠、衣服を着け、怖ろしき面色して、司法權の神聖を事々しげに觸れ歩行き、かくて闇の夜には人知れず、あらぬ人々を迎へ入れ、包み物など貰ふ時は、いたく喜びて、其重さによりてぞ、百千の罪ある者をも許したりける、さるに、この裁判官と云ひし者が擧動ひし有の悉々、人の知る處となりて、右左と騷ぎ罵る事ありしも、遂に皆有耶無耶の中に葬られて、いさゝか罪せらるゝ者も無くて止みにきと記したらむ書を、其時の世人が見知らむには、信ぜずして明治の代ならむからに普ねく人の罪を正すべき職にある者が何條さる罪をか犯すべき、すべて〳〵、理も無く拙き寓言にこそあれとぞいはむかし

▲もし女と云ふ者、其時は無き世にて、昔明治の代にさる者ありきと記して、其女と云ひし者のありし樣、先づ産聲を揚げし時は、いらざる者の如くに下げしまれ追々と黒髮の延るにつけ、海老茶袴に育ちて、鬼も十八の春にもなれば、顏容の粧ひに念をいれ、衣服も流行を好み、髮の飾りより足の爪先まで心を用ひて、世の好色男をたぶらかし、終には身の淫奔より宿場女郎となり、また地獄に落る者も多し、高砂をうたひ、操に老ひ、銀婚の華燭をあげる者は

稀なりきと、記したらん書を、其時の世人が見たらんには例の信ぜずして、明治の代とて、いづこに女てふさる怪しき者かあるべき、すべて〳〵色氣ある戯言にこそあれとぞ云はむかし

▲もし坊主と云ふ者、其時は無き世にて、昔明治の代にさる者ありきと記して、其坊主と云ひし者のありし樣、先づ伯爵の榮寵を得、殊勝にも身に法衣をまとひ手に水晶の珠數をつまぐり、表面には蟲も殺さぬ生佛の粧ひを示し、裏には多くの妾を圍ひて淫酒に耽り、財政の困難には幾萬の信徒をまどはして多くの金銀を集め、目のあたり五逆の罪を我から敎ゆるが如き、いと憎むべき行ひ多かりきと記したらむ書を、其時の世人が見たらんには、例の信ぜずして明治の代とていづこにさるいまはしき者かあるべき、凡て〳〵理も無くつまらぬ當て言にこそあれとぞ云はむかし

▲若し詐欺師と云ふ者、其時は無き世にて、昔明治の代にさる者ありきと記して其詐欺師と云ひし者のありし樣、先づ都會の中央に立派なる家屋を構へ、多くの雇人を置き、麁末なる藥種を集めて、イカサマなる賣藥を製し、西洋醫者には妙藥なしなど鳴滸なる廣告を新聞紙上に出して、田舎人を欺き、あらぬ禮狀を僞造して、患者をたぶらかし、只管己が賣藥を高價に賣附くるなど、しれたる振舞多かりき、と記したらん書を、其時の世人が見知らんには、例の信ぜずして、いづこにさる能も無き藥を買ふ者のあるべき凡て〳〵理も無き詐欺言にこそあれとぞ云はむかし

貧乏人の子澤山

富貴の者に子供が少くて貧乏人に子供が多いのは、古今内外の通則であるが、これにつき英國の社會學者某は其原因を生物學的に解釋して「落ちぬ間に、枯れぬ間に生殖の任務を遂げんとして、蟲の食つた果實が早く甘くなり、瘦地の植物が早熟する如く、生物は自體に缺點があれば生殖を急ぐものである、此原則によつて、花柳病患者は病氣の爲めにも性慾消失せず、反つて色を漁る事が倍々甚だしい牧草充分なれば羊の生殖力減じ、梢を止めざれば果實を結ぶ事少なきと同樣、富豪に子女の少なきは營養の過度なるが爲めである」と說いて居るが、予の考察では營養の過不足に因るのではあるまいと思ふ、貧乏人は他に樂む可き事が少ないので、夫婦の愛情が濃厚なるが爲めと、又一には貧乏人の女房は入浴の度數少なくして、生殖素の養分を貯留する事が多い結果であらう

美人の定義

其學藝の異るによつて物の觀察も亦各々異るものたるべし

▲心理學者　異性の審美的愛戀的感情を刺激して肉慾を挑發せしむる具體的天然美物なり

▲物理學者　中央に黑點ある透明球體の廻轉によつて他の物體に一種の電氣を通ぜしむる柔軟性物體なり

▲民法學者　手當と稱する法定果實及び赤ン坊と稱する天然果實をも受くべき動產物體なり

▲刑法學者　猥褻姦淫重婚等、犯罪の用に供すべき物件の所有者にして又諸種犯罪の敎唆者なり

▲數理學者　年は二八か二九からぬ、三人寄れば姦しく、七人の子はなすともなど、迚も算盤には乘らぬ代物なり

▲社會學者　人類蕃殖の重要機關にして、原人時代に於ける戰鬪の目的物たりし最好適種なり

▲天文學者　天の一方を望むも未だ曾て發見せしことなし恐らくは夜這星系に屬する一種の妖星ならん

▲植物學者　嬌艶は雨後の海棠の如く、立てば芍藥、座れば牡丹、歩く姿は百合の花に似たる解語花なり

▲動物學者　猿の進化したるものなれども、殆ど其進化の順序を究知す可らざる底の極美動物なり

▲漢文學者　明眸皓齒、蛾眉柳腰、沈魚落雁、羞花閉月、窈窕たり、嬋妍たり、婀娜たる一笑傾國の尤物なり

▲和文學者　たゞひとたびのなさけをだにえなば、いのちもおしからじとなんおほしきしろものにこそあれ

▲論理學者　歸納法によれば薄命なりとの定則を得、演繹法によれば玉輿に乘るの斷案をも得る矛盾人物なり

▲滑稽學者　何も堪らネー頗的なり

肥料として價値少き女性の糞尿

女學校や女工場の糞尿は、男子の糞尿よりも其價格が低廉であると云ふ、何故低廉かと農民に訊ねて見ると、女の糞尿は肥料として男子のよりも効能が少いからですと云つた

それで何故女の糞尿は効能が少いかと云ふことを考へて見た、これは凡て女性の身體は新陳代謝がノロイので排泄された糞尿に燐が少いから、肥料としての分子が稀薄であるのだらうと思ふ

女を侮辱してはスマナイが、新らしい女への敎訓として一つ云ひたい、「女は其排泄した糞尿までも、男子に劣るぢやないか、男女同糞でない限りはあまり威張れはしまい

猿田彦神と比良夫貝

古事記に據つて取調べて見ると、猿田彦の神は葦原中國の御方であッて、天孫瓊々杵尊御降臨の際御出迎ひ申し路案内をした有功の神様であるが、晩年伊勢五十鈴川の畔に御隱退遊ばして御慰みに毎日漁をして居られたが、不幸にも一日比良夫貝といふ貝に手を咬れて終に溺死なされたさうだ、此比良夫貝といふ貝は如何樣な貝であるか、動物學者は勿論、和漢古今の博物書を取調べて見ても一向判らない、又和學者の著書にも、比良夫貝今詳らかならずと記してある、人を咬み殺す程の大きな貝であるに、今詳らかならずとは、チト怪しいぢやないか

そこで、我輩つら／＼按ずるに、古事記といふ本には往々嘘がある、其嘘を和學者は寓言として解釋して居る、今日の科學上から見て、理に當らない事は、寓言と見るより外はあるまい、そして此猿田彦の神が比良夫貝に御咬まれ遊ばしたと云ふ事も、ヤハリ和學者の所謂る寓言といふ嘘であらうと察せられる、然らば其寓言の意味は如何と云ふにチヨツト茲で露骨に云ふ譯にはいかないが、貝と云ふのは眞正の貝であるまいと思ふ、大體猿田彦の神は天鈿女命の令孃猿女君といふ御方を妾にして居られた程の助倍神樣であるから、貝に咬まれて薨去たまひしと云ふは、確かに寓言てなけらねばならぬ、思へば、古事記の著者もなかなか洒落た男である、皆さん合點か／＼

神聖は無價値なり

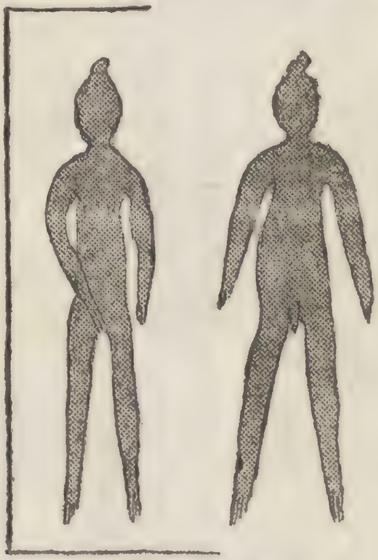
光線熱線化學線の三大威力を有する**太陽**は、玄妙無限の物であるが、此太陽を經濟學上では無價値の物として居る、それは金錢を以て賣買し得られない神聖の物だからである

帝國憲法に「**天皇**は神聖にして侵すべからず」とあるのも、天に二日なく地に二王なく、主權は大權、大權は絶對權なるが故である、**裁判**は神聖なりと稱するのも、金錢を以て其絶對權を賣買する事が出來ないからである、若し賄賂によつて左右せんか、其裁判は有價値にして無神聖のものと成る、**戀愛**は神聖なりと云ふのも、金錢にて賣買し得られない眞情の發露を、絶對純美のものとするからである、**選擧**を神聖なりと云ふのも亦同じで、各人の醇乎たる自由意志に依つて投票すればこそ神聖なれ、若し之を金錢にて賣買すれば、絶對權に非ず、神聖に非ず、選擧に非ざる罪惡となつて、憲法政治の大蠧毒者である

人の形に似たるを最良とする人參

近年人參が大流行で、人參を原料とした種々の賣藥が各地の各商店から出て、進んでは人參葡萄酒、人參菓子など云ふものが出來て、今は人參全盛の狀況になつて居るが人間に善惡賢愚の別あるが如く、人參にも良否の大差等があり、甚だしきは人間に僞物の多き如く人參にも亦僞物が多い





甘草の如き草の根を何て人參と名付けたかと云ふと、其根は人の形に似、頭や手足胴體のあるものが最も藥として効能が多いのに因るのであつて、今尚人の形に似たものを尊重し、其類似の程度によつて價格を異にし、一本百圓位から漸次下つて一本三十錢位の劣等人參もある、そして其人の形に似たものは百本の中一二本位しかないさうである

朝鮮總督府の人參官吏や、醫師、藥劑師なども人の形に似た人參が、何故に藥餌として効能が著大であるかと云ふことの理由を發見し得られず、只々不思議として尊重し居るのみであると云ふ、其神祕的原因を發見したものには朝鮮總督府から千圓の賞金でも出すと云つて居るとの話を聽いた、其千圓欲しい者は一奮發して研究しては如何、アトデ首を縊つて死ぬやうな事もあるまい

古い『本草綱目』にも「根ニ有テ手足面目ㇾ如キ人ノ者ヲ爲ㇾ神ト」とある

『蒹葭堂雜錄』には、延享四年六月に暹羅人が日本へ持つて來たと云ふ支那廣東產の人參、男形（重量二十四匁二分、陰莖あり）女形（重量十四匁九分、片乳房あり）の圖を載せてある

昔病態の如何に拘らず、無暗に人參服用を勸めた醫者を人參醫者と云つた

活字の大小と新聞

大正二年八月發行（印刷界）

活字に初號から七號まで大小八種の區別のあることは遍く世人の知る所であるが此八種の活字は各々必要に迫られて出來たものである、中で最も多くの用を爲して居るのは五號で、之に次ぐのが二號である、新聞の原始時代とも云ふ頃のものは、廣告を除くの外全部五號であつたのだ、然るに時勢の進歩するに伴れて、新聞も五號字丈けでは行かなくなつた、是に於てか二號字を用ひ、六號字を用ひ、後には四號とか三號とかの活字を使用するやうになり、更に一號初號と云ふ風にだん／＼と多樣の大活字が出來た、斯くなつたのは三つの大なる理由に因つて居ると思はれる、第一は實際的必要に依ることである、社會が複雜になり、人々の身體が忙しくなるにつけて、新聞の記事も特に大切にして世人に夙く知らしめる必要のある材料は、見出しに大字を用ひて讀者の時間的經濟に便益しなければならぬやうになつた、第二は紙面の體裁からである、大小の活字を按排よく配置して美的嗜好に投じやうとする工夫が進んで來た、第三は惡辣惡德新聞が、不正手段として頻に脅喝的煽動的挑發的なる文字を、初號や一號の大活字に組んで、平凡醜劣の記事、誇張僞瞞の論説を以て、低級の讀者を吸引するとか自己の目的人を脅喝するとか云ふことが盛になつた

以上三者の理由中で前二者は、必要にして當然なる事柄であるが、事實に於ては第三者即ち惡新聞の惡手段に使用されて居る大活字が多數である、即ち今日の有樣では眞面目にして有益なる材料は、小活字に組まれ、平凡卑醜にして社會に有害なる記事は、成る可く大きな活字を、しかも成る可く多く使用するといふ有樣である

そこで心ある讀者の中には、新聞を見る時には、先づ六號文字の個所を捜して讀むと云ふ人さへ出て來た、否斯う云ふ人が漸々增加して來た、又新聞經營者の方でも餘り大活字が濫用されて、却つて其眞價を失つて居るのを看取し、面白く且有益な材料、珍らしくして他に稀な事柄等は殊更に小文字に組込まうとする工夫が起つて來た、而して初號一號の大文字は人の目に慣れて餘り注意を惹かず、却つて六號の小文字が先づ人に讀まれると云ふ逆まな現象にまで進んで來て居る

併し乍ら本來の成立から見て、五號とルビ七號は最も一般的實用文字であるが、此外のものは初號から六號に至るまで、其文字の大小と使用の輕重とが正比例しなければなら

ぬ筈である、然るに現在の如き逆まの現象を見るやうに到つたと云ふものは、一に惡辣新聞の背德文字が禍して居るのである、自分は大小活字の使用途が、其本然の目的に添ふて正しく使ひ分けられ、各々其價値と面目とを發揮させ度いと思ふ、夫れには例の脅迫的挑發的誇張的等の惡手段の爲めに、下らぬ記事を大活字で飾ると云ふ惡弊を一掃しなければならぬと思ふ

情死者の死體を侮辱する法律制裁

我國の現行法律では、死人或は死屍に對しては何等の制裁を加へぬ事に成つて居る、男女情死の場合に於て、男女の一方が生殘つた際に、其者が對手の自殺行爲に手を下した事實があれば、自殺幇助罪として罰せられる事に成つて居るのみであるが、往昔德川幕府の法律では、其幇助と否とに拘らず、生存せる男を殺人罪として死刑に處し、雙方死を遂げた際には、其死屍に刑罰を加へたのである、抑も男女の情死といふ事は、我國特有の風習であるらしい、亞細亞大陸及び歐米諸國には絶無とは云へないが極めて尠い、そして我國では南北朝時代に始まり、元祿後最も盛んに行はれた、それは演劇、歌謠、讀賣、繪草紙等で情死教唆の如き傾向のあつた結果である、德川八代將軍吉宗の時代に其弊を矯正せんとし、男女が色慾にて生命を果たすを「心中」と呼ぶは不當なり、爾後は「相對死」と稱すべし、そして、雙方死切れ候者は衣服を剝ぎ下帶をも取除き、丸裸にして野外に捨つべし、一方存命なれば下手人として重罰に處し、若し雙方存命なれば、三日間市に晒すべし、と規定したものであつた、其法律は明治維新の際まで實行されたが、男女の死骸を晒す事だけは、寬政五年頃まで廢止しなかつたらしい、其事は大阪の狂言作者濱松歌國の遺稿『古今參考南水漫遊拾遺』に左の如くある

寬政五年二月十九日、(大阪)阪町にて心中あり、男女の死骸を千日墓所に於てさらせし處、女の陰門の毛多き評判にて見物おびたゞしく、其後心中のさらしもの止む

死屍に鞭つと云ふことは、精神的形容詞であるが、德川幕府の制度は、それを實際に執行して居たのである、然し性慾上の痴態行爲は、法律制度も禁遏の効が多からずして、依然情死者は絶えず、文明進歩の明治大正に至つても、尚其弊習が止まないので、日本人は情死國民なりと呼ばれる事に成つたのである

* * * * *

衆議院議員總選擧夢想彙報

總選擧の期日が切迫して來ると、全國の有造無造共、雨後の筍よろしく、彼方にも候補者、此方にも候補者と名乘りを揚げて暫時混戰の體であるが、我輩獨得の採訪を遂げた逐鹿場裡の形勢を報ずる

▲東京市　名にし負ふ德川の流れ淸く御世泰平武運長久、天下久しく事無かりしかば、武將は髀肉の歎あり、俠客は拳固の持つて行き處に困り、雲の如き俊才空しく市井閭里の間に困阨せることなれば出るは〳〵、槿花一朝の榮に誇る一夜造りの大盡より、裏店の溝板踏み脫して九尺二間に戶が二枚、彼方立てれば此方が立たぬ其日々々の鎗栗世帶の中より、現れ出でたるは、學者ては新井白石に曲亭馬琴俠客では幡隨院長兵衞、金看板甚九郎、新門辰五郎、一心太助、色男では不破伴左衞門に名古屋三左、奇人では蜀山事太田南畝に柄井川柳など〻云ふ者、必死になつて運動眞最中なるが、今其競爭の模樣を記さんに白石に馬琴は雙方共學者の事なれば運動も餘り捗々しからねど、何分馬琴方にては例の八犬傳中の一騎當千の武者犬江親兵衞、犬村大角、犬塚莊作等を初め其他の面々應援に出掛けたることなれば其勢ひ侮り難く、白石方も少し手に餘りて見えたり、此處に又金看板甚九郎と云ふもの丈け八九尺もあらんと思はる〻大梯子を押立て其上に自分の身體を縛り付け乾兒の者に持たせて競爭場裡に押出したれば、其他の長兵衞、辰五郎等も負けじと必死になりて競爭しけるが、何しろ長兵衞方にては唐犬權兵衞を始め其他の乾兒、親分の爲を思ひ死を以て投票買收に從事したれば見る〳〵中に最高點を占めさうなれば、江戶ッ子の一手專賣を以て鳴る一心太助は長兵衞に對して反抗の聲を擧げ、競爭愈々激甚となりたるが、太助の方には有名なる大久保彥左衞門が附き居れば、長兵衞に取つても由々しき大敵なるべしと雖も、太助は江戶ッ子の事、大久保は貧乏を以て有名なるものなれば、一票と雖も金錢にて買收するを得ず、或る一部分にては人氣頗る宜敷けれども、何分金の世の中、當選或は六ケ敷からんと云ふ、不破伴左衞門に名古屋三左、これは吉原を根據地とせる事にて、雙方伍角の勢ひなれども始終鞘當てばかりして他の方面に切り入ることを爲さゞれば、若し新造かなんかの仲裁にてもあるにあらずんば、畢竟漁夫の利となとなることもあらんかと、お馴染筋の心配一方ならずと云ふ、又蜀山に川柳、これは古今無類の取り組みにて一方は

狂歌の大家、他方は川柳の開山、互に駄洒落や惡口を戰はして競爭激甚なりと云ふ

此外赤阪區青山、●●●鈴木主水は新宿を根據地として打つて出で、女郎屋の主人共の應援ありて運動甚だ盛んなり

尙郡部よりは塙保己一、畠山重忠、喜多川歌麿等の候補者も顯はれたれども、何れも餘り熱心にてはなき樣子、尤も塙檢校は盲蛇的に猛進すべしとの說もあり

▲大阪市　名にしおふ日本一の大港出船千艘、入船千艘、帆檣林立して烟突と數を競ふ大阪の事なれば、競爭も從つて景氣づき、候補者も多く、此處を專途と切り結ぶさま中々の見物なり、されど流石は商人の都とて、土着の人よりは他國のもの丶入り込みて、候補に立つもの多ければ、案外他國人の當選するもの多かるべしと思はるれど、先づ第一に名乘りを上げたるは、●●●●大鹽平八郎なり、得意の長廣舌を振ひて、良知の說を解き、洗心洞劄記數十萬部を印刷して、選擧有權者に分ちければ、其議論に感服するもの、其文章の妙に服するもの、何れも皆平八郎に投票せんとし形勢既に定まるべく見えたるところに、市の實業團體よりは、豫選投票の結果、政黨政派に關係なき初代住友、初代鴻池を起たしむるに決し、盛に金錢を撒き散らし、投票買收に着手したれば形勢一變して、非常の混戰となりたり、實業派にては、大鹽は由來謀反氣の絕えざる男なれば、何時大阪を燒き打にするやも知れず、其危險なる男に投票するは、大阪に忠實ならざるものなりとの意見を發表したりければ、大鹽大にヘコタレ、何か妙案もなきものかと、思案に暮れ居たるが、ハタと手を打ちこれならば、住友、鴻池を負かす事受合なりと、早速支那に使を遣し、先生たる王陽明を招くこと丶なりたれば、若し王陽明先生にして來阪せばと實業派は大に苦心し、一計を案出し、これ又早飛脚を以て陽明の許に黃金數萬兩を送りければ、陽明由來貧乏の事とて、殊に學者でも元來が支那人なれば金を見たら堪らず、平八郎の要求を拒絕したれば、平八郎益々閉口し昨今頭痛鉢卷きで思案最中なりと云ふ

玆に政府にては、大阪は關西に於ける實業上の中心なれば此地より味方を出だすことは、他の地方より十人を出すよりも優れりとなし、如何にかして御用黨を出さしめ、以て大阪以西の實業家より選出されたる代議士を支配せしめんとて苦慮したる結果、●●●淀屋辰五郎を起たしめんとし、「君も大分放蕩をするやうだが、それぢや破産も瞬く中ぢや、如何に、今代議士になつて其金を使つては……」と、言葉巧

みに説き付けたれば、淀屋も其氣になり、それてはと打て出づることになり、多くの幇間どもを運動員とし、ぱつぱつと金を撒きければ、鴻池、住友も大に狼狽し、此やうな亂暴な奴が打つて出ては堪らず、殊に御用黨とあれば、反對するも恐し、されど一度び打つて出でたる上は、今更引かれもせず、如何にせんかと案じ煩ひ居たるが、終に淀屋と勝敗を決する事となし、必死の運動を試みたり、唯旨い事をするは選擧民、元より無記名の事なれば三方四方よりの申込みを何れも承諾して金を只取りにすると云ふ寸法にて、これなら毎年選擧があれば可いなぞと誤託を吐き居る由、目下のところ淀屋最も優勢なれども、間際になれば如何に變化するやも知れずと云ふ

▲大阪府(河内) 眞先に名乘りを揚げたるは楠正成なり、其弟正儀、其子正行などの應援ありて花々しく打つて出でたるも、近頃になりて石川五右衛門、弓削道鏡等も候補者に立ちて正成の領分へ喰ひ入りたれば、流石の正成も大に困り千早城へ逃げ籠りたるが、五右衛門の勢ひ仲々に盛んなれば近日攝津の湊川へ落ち延びんかとも傳へらる、されば五右衛門は道鏡との競爭なれど道鏡は慾深坊主のことゝて評判甚だ宜しからず、旁々後家荒しの醜聞選擧民間に知れ渡りしが爲め、到底當選覺束なかるべし、之に反し五右衛門は惡事を爲せども能く金を撒きちらすを以て最高點を得ること疑ひなしと云ふ、五右衛門當選せば政友會の連中に推されて院内總理の椅子を占むる事なるべし

▲同(和泉) 小國の事なれば候補者も少なく、僅に曾呂利新左衛門、千利休の兩人あるのみ、共に一時は豊太閤に取り入り太閤の勢力を借らんとせしも、太閤は兩人とも昵近の間柄なれば其儀叶はずとて退けられしかば、止むを得ず獨力にて競爭せり、併し曾呂利は例の口車を廻はし、火の車のやうな金を借り出し投票買收に從事したれども、利休は至極呑氣なれば或は曾呂利の勝利となるべしとも云ふ

▲京都府 儒者詩人等を雲の如く輩出せしめし同府にしては何となく競爭も眠氣を帶び、さしたる事なけれど、流石に市内だけは稍活氣を帶びたるやうなり、第一に打つて出でたるは伊藤仁齋にて、朱子學を楯に取り數多の弟子を驅り集めて運動させたれば、其勢力他の候補者を壓し殆ど獨り舞臺の如く見えたるが、こゝに又石川丈山現はれ出で、賄賂として絹地の揮毫を選擧人に與へければこれも亦少からぬ勢力を得たり、之を見たる會津の小鐵と云へる大侠客は、何てう腐れ儒者に名譽の月桂冠を讓るべきぞと勢ひ込

んて、兩人の勢力範圍に喰ひ入り競爭愈々激甚となりたれば、市民は殆ど其煩に堪へず、別に實業派と呼べる一派を立て倶樂部を組織して京都實業倶樂部と稱し、友禪染の發明者なる宮崎友禪を同市より選出せんとし、儒者派、俠客派、實業派と分れたれば儒者派にては石川、伊藤の同士打をなせば終に一人も當選すること覺束なしと、流石は學者だけに悟りも早く終に石川をして伊藤に讓歩せしめ、此に三黨鼎立の形を爲すに至れり、然るに又儒者派の勢力の盛んなるを見て、保守文學派は嫉妬の念に堪へず、歌聖在原業平を立たしめんとし同氏の承諾を得て大競爭を始むるや酒商の茜屋半七と云へる色男は、色事に掛けては業平に劣らぬ强の者にて、業平に小町が附き居れば、我れには三勝がありいざ競爭せんと名乘りを揚ぐるや、大和からの輸入候補者、シカモ酒屋が代議士候補に立つは先代未曾有の事なりと驚きの餘り、半ば好奇心を以て投票するものもありさうなれば、兩人の間に中々激烈なる競爭を見るに至るべし、其他俳人として松永貞德あり、點取り主義に熱中せる多くの俳友を集めて運動者となし、發句狂の隱居などを擒にしたれば、此れ又侮り難き勢力を有し今日のところにては形勢未だ全く定まらずと云つて可なれども、彼の半七、小鐵等は或は確かならんかとも云ふ

▲兵庫縣(播磨) 第一に打つて出でたるは日本武士の好典型として其名天下に隱れもなき大石良雄なり、其後援には師匠の山鹿甚五左衞門あり、其子力彌、加古川本藏を始めとして、金穴には天川屋儀兵衞、其他四十七士の面々死力を盡して戰ひたるが、同士の一人小野九太夫が敵黨に內通したる爲め形勢稍や面白からずなりたるところ、股肱と賴みたる早野勘平はお輕の爲に身を持ち崩し、終に切腹の悲劇を演じたるため味方の意氣沮喪せんとせるに、赤松圓心と云へる陰險なる還俗僧現はれ出てゝ寺々を說き廻りたる爲め、大石良雄の領分を蠶食せしが、幸にも圓心は餘り賄路を使ひ過ぎし爲め其事發覺し選擧法違反として拘引せられしゆゑ、又々勢力を恢復したれども、强敵として宮本武藏が現はれ兩刀を使つて選擧民を切り從へ良雄と互角の勢力となり、一方は山鹿流の陣太鼓を叩き、一方は兩刀を以て互に必死の勇を揮つて競爭しつゝあれども、今日のところにては何れが優勢とも云ひ難し

尙右の外例の靑山鐵山も亦打つて出でんとの計畫ありしが去日案外にも犯罪事件起りて目下拘留中なりと云ふ、聞く所によれば少女虐殺とやらの大罪なりとか

▲和歌山縣　本縣紀伊國は高野山あり、熊野あり、坊主の勢力ある所なれば坊主にして打つて出づるもの頻々たるが中に最も優勢なるを武藏坊辨慶丈文覺上人の二人とす、辨慶は奥州高館にて義經と分れて紀州へ歸り、勢力仲々に侮り難く殊に靜御前を始め友人たる龜井、片岡、伊勢、駿河の面々も應援に來りたれば、辨慶大得意になり、例の七ツ道具を脊負ひて聲高々と投票勸進帳を天にも届けと讀み上げ勸進したれば、流石の文覺上人も少し閉口の體なりしが、茲に辨慶に取つて大敵こそ現れたれ、そは即ち紀伊國屋文左衞門にて、日本一の大金持の名を振り廻し、音無川の水上に本城を構へて金銀財寶さらり／＼と蒔き散らし、運動者としては東京吉原より幇間數十名を招き來りて一票百五十兩宛に買收し、且つ辨慶に向つて百萬兩にて候補辭退の交渉をなし來りたるが、辨慶は百萬兩あれば義經公の軍用金にもなる事と目下思案中なりと云ふ、若し辨慶にして候補辭退を承諾せば紀文と文覺上人との當選を見るに至るべし、文覺當選の上は再び宗教法案を提出する事ならん

▲滋賀縣　候補者として數ふべき者左の如し

菅原道眞、傳教大師、中江藤樹、石田三成、榎本其角、小野川喜三郎、法界坊の七人なるが、道眞公は國々の者共何れも乃公を無暗に擔ぎ廻つて居る故、日本中の人氣は乃公一人にありと少々鼻を高くし天神社のある國々へ照會せしが、何れも御生國より打つて出で玉ふ方得策ならんと申し出でしかば、それではと愈々太宰府より生國へ牛に乘つて歸國あり、此に愈々選擧準備に取り掛りしが、豫言者は故郷に尊まれずと申せし如く、近江にては受けのよからぬ方ゆゑ餘程苦戰ならんと云ふ、最も人氣のよきは中江藤樹なれども此人は聖人なれば當時流行の後進の道を開かんとて容易に進まず、其樣を見て傳敎大師幷に法界坊と云ふ俗僧打つて出でたれども、法界坊は由來墮落の人物なれば多分落選すべし、尙其角は山崎宗鑑の應援を得て例の俳人然として悠々打つて出でたれども、俳人だけに運動が下手なれば到底物にならざるべし、小野川喜三郎は澤山の褌擔ぎ連の後援を以て四十八手の秘術を盡くして運動し、石田三成は會津より遙に上杉景勝下向して大に助力し居ればこれは多分當選すべしと云ふ

▲山口縣（長門）　候補者として押されたる者は高杉晉作、近松門左衞門、大村益次郎、久坂玄瑞等にて尙追々に現はるゝ模樣なれども、今日のところにては右の四人のみなり高杉は例の放逸性なる質にて代議士なぞは如何でもよいと

濟まして居たれど、乾分の者共が承知せず、長閥の勢力も段々に衰微する事なれば、今日閣下自ら出馬し玉はずば到底餘命を保ち難しと說きければ、それではと終に候補者として立つに至りたれども、形勢甚だ面白からず、當選の見込殆ど立ち難ければ、高杉は大に肝癪を起し

　まゝよ三升樽橫手に提げて破れかぶれの頰冠り

と云へるを高吟して去り、終に候補を斷念したれば今は唯三人のみの天下となりしが、大村益次郎は九段坂よりノソリ／＼と搖ぎ出でたれども、陸軍の事にかけては此人に及ぶ者なけれども、代議士の競爭などは、碌々作戰計畫立ち難く見ゆるに大に氣を揉み居れりと、久坂玄瑞は例の風流人のことゝて、詩歌俳諧のみに耽けり居たるも、高杉にして立たずんば乃公立つより外なけんとて、大村、近松に對して戰を挑み、近松は大阪の劇場より金を引き出し、梅川忠兵衞、曾我五郎十郎、鎗野權三、堀川波十郎、大經師小春等の面々の後援あれば最も優勢にて當選疑ひなし、右近松にして當選せば直ちに心中奬勵法案と云ふを議會に提出すべしと云ふ

▲愛知縣(三河)　候補者は大久保彥左衞門、渡邊華山、大岡忠相、本多作左衞門の五人なり、其他三河武士十數名打つて出でんかとの評議ありたれども、大久保は貧乏なれば歲費二千圓が欲しければ公乃に讓り吳れよと云ひしため、口八釜しき親爺に反抗するは損と、何れも大久保を助けることゝなりたるを以て勢力おさ／＼他の三人を壓し居れど越前守大岡忠相は八代將軍の後援あり、これ又侮りがたし次に鬼作左事本多作左衞門は武道の達人の肩書を振り廻はし、天一坊と云ふ事に馴れたる惡漢を雇ひ來りて大岡の根據地に攻め入らしめたれば、これも仲々勢力あり、尤も天一坊が大岡の眼鏡にて見顯はさるれば從つて鬼作左の敗北となるべし、渡邊華山は勤王家の名ありて御用黨なればこれも多分當選するならんと云ふ

▲三重縣(伊賀)　眞先きに名乘りを擧げたるは松尾芭蕉なり、其運動者の多きこと前代未聞と稱せらる、所謂蕉門十哲を始めとして其他全國の有造無造共盡く伊賀國に集りたれば、運動者一人が一票を得れば忽ち、二千五百票を得べしと云ふに至る、そを見たる反對者の一人なる飛び入り荒木又右衞門はこは敵はじと、これも亦全國の劍客を集めて運動を始めたれば競爭愈々激しくなり、雙方の運動者が至る所に鉢合せをなし、大騷動を惹起する事あれども、何分荒木方は劍客の事なれば何時も松尾方散々になつて敗北し

荒木方遙に優勢となれり然るに此に又荒木に取つて容易ならぬ敵こそ現はれたれ、そは即ちかの志賀理齋にして、志賀の祖先は嘗て東照公を伊賀の厄に救ひしことあれば、將軍家より莫大の選擧運動費用を下賜せられ、殊に御用黨として打つて出でたることなれば、遙に他の二人に超越し、今日のところ殆んど最高點を占めさうなり

▲長崎縣(肥前)　鑄砲家高島秋帆、奇人賣茶翁、貿易商の開祖濱田彌兵衞三人の競爭なり、秋帆は自己の鑄たる大砲を賣つて選擧費用とし、彌兵衞は冒險によりて儲けたる金を蒔き散らして爭ひしが、賣茶翁に至つては人の施財を受けず、自ら茶を賣りて口を糊したる氣節高邁の士なれば一厘の貯へなけれど、而も名望隆々として一國を壓し當選の見込確かなりと云ふ

▲靜岡縣(駿河)　眞先きに打つて出でたるは世界一の剛の者の名を暹羅國にまで轟かしたる山田長政にして、久しく暹羅日本町にありて國王の女婿として威名列ぶ者なかりしが、何處にあるとも戀しきは故郷にて、久振りに歸國したるところ案外にも時勢は當時と異なりて、鎗先き功名も叶はねば、止むを得ずして郷里靜岡より代議士候補の名乘り上げたり、暹羅より齎らしたる金銀財寶雨の如く散じて選擧民の歡心を得たれば、中々の勢力となれり當選の上は容易に陸軍大臣の椅子を得べしと聲言し居れり、其次ぎは十返舍一九にて、元より囊中無一物の男、貯へとては三文もなければ、有名なる膝栗毛に鞭ちて、選擧區を七寸の草鞋に踏み躙らんばかりの勢ひ凄じなんど云ふばかりなし、股肱と賴む彌次郎兵衞喜太八も又必死となつて運動し、至る處輕口を叩き、御愛嬌を振り廻し偏に選擧民の心を收攬するに力めつゝあり、これ又當選疑ひなかるべし、當選の後は戲作者保護法案と云ふを提出すべしと云ふ、清水次郎長は郷里清水港を根據地として諸方へ手を配り、乳兒の者共をして運動せしめ居れり、由井正雪は何分謀叛人の旗頭にて、氣受はあまり宜敷からざれども、さりとて戰略に掛けては候補者中此人に優る者あらず、中にも乾兒の丸橋忠彌以下の面々、馳せ參じて運動する事なればこれ又侮るべからず、軍用金は紀州侯より出づる事故、金には困難せず選擧民の方より云ふも、若し落選させて又々慶安の故智を襲ひて、例の燒打などをやられては大變なればとて、大分投票も集まりたる模樣なり、候補者は以上の四人なりしところ、近頃になりて大變なる剛敵こそ飛び出したれ、そは即ち德川家康にて此人は元來三河の人との事なりしが、『史

疑』と云へる本が出て、家康の出生は駿河にて一雲水の子なりとせられしかば、終に同縣より打つて出づる事となりたるが、幕府の連中は之を非議して是非とも三河より推選せんとの運動最中なり、然し何れにするも現政府は知名の政治家に對しては、干渉を施す主義なるがゆゑ多分落選なるべしと云ふ

▲千葉縣(下總)　佐倉宗五郎縣民の推す所となりて逐鹿場裡に現はれしが、これは衆望の歸するところ無論最高點を以て當選すべし、田中正造氏これが應援に赴けりと云ふ、成田の不動明王も亦ノソリ〳〵と搖ぎ出で、全國の信徒を集めて一人に付き三票宛を得來らぬ者は予の信徒にては無きぞと仰せられければ、皆々必死となりて運動し見る間に一萬五千票を得たりと云ふ、尙不動明王には、東京魚河岸の兄イの肩入れありと云へば當選疑ひなかるべし

此外初代市川團十郎こと堀越才牛も亦候補を爭ひ、例の大目玉をむいて運動最中なるが、首尾よく當選すれば大に議會に活劇を演ぜんとの意氣込みなり、他に競爭者さへ出でざればこれも多分當選すべしと聞く

▲香川縣(讃岐)　定員は七名のところ候補者は非常に多く我も〳〵と打つて出づるもの十餘人にも及び、各々必死となりて運動し居れるが先づ眞先きに名乘りを上げたるは弘法大師にて、國々の信徒を集めたるばかりにても投票數既に四千票に達したりと聲言し、例の奥の手を用ひて病人を療し、跛兒を立たしめ、秘術を以て選擧民の歡心を得るに力め、又一方に於ては得意の麗筆を揮ひて、絹地一枚宛を選擧民に贈る等運動中々に拔目なければ、目下のところ縣下には最大多數を占め居れるが、片方の識者の側にては何の俗僧めが何ほどの事かなさん、唯一息に蹴散らして呉れんと、弘法の領分に切り入るもの甚だ多く、此先き如何なる變化を見るやも知れずと云ふ、次ぎに柴野栗山、之れは當時有名の儒者にて、一時は滿天下の儒者をして驚倒せしめたる傑物なれば、空海如き俗僧の跋扈を憂ひ空海をして當選せしむるは夷狄の道を傳播せしむるものなり、とて大に憤慨し猛烈なる勢を以て空海和尚に喰つて掛りたれば、流石の空海もたぢ〳〵の氣味となりたるところに、同國の實業團體よりは山師坊主や珍紛漢の儒者どもを、選出するは議會を腐敗せしむる根元なり、實業家中の人物を出だすべしとて豫選會を開きたるに、最高點を以て左甚五郎を推すことゝなり、甚五郎に交涉を試みたるに、甚五郎は終生美術家を以て送る積りにて、銅臭紛々たる議會に入るが如

きは平生の素志に反することなりとて堅く辭退したるが、それでは實業團體が承知せず、國家の爲め代議政體の爲出て出陣ありたしと歎願に及びたれば、甚五郎は辭するに言葉なく止むを得ず候補者たることを承諾したり、何分名聲滿天下に隱くれなく三歲の童子尙甚五郎の名を說くことなれば、見る〳〵中に優勢となり、今日にては當選最早や疑ひなからんと云ふ、初代谷風梶之助は享保年間の名力士にて殆ど負けと云ふ事を知らざりしものなれば、時人以て英雄となし買物をするにも商人は負けぬ事を谷風と云ひし程なれど、野心深き彼は單に一の大關たるにては滿足せず、更に政治界に乘り出さんとし、多くの犢鼻褌擔ぎや頭取等を集めて會議を凝しけるに、川上音次郎の如き大根役者ですらも候補者に立ちたる事あり、同じ藝人でも役者と角力とは品格が違へり、關取にして起ち給はゞ天下は忽ち關取のものたらん、早く打つて出で給ふがヨウゴンスと何れも口を極めて煽動しければ、谷風忽ち其氣になりヨイショと四股を踏み鳴らし、何奴でも此奴でも四十八手の手の中にあり、イザ來い來れと身構へたれば、腰の弱い連中は何れも其威風に壓せられて大へコみにへコみて、こそ〳〵と逃げ出したるが中に更に名乘りを上げたるは田宮坊太郎なり

遠からんものは音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ、我れこそは不俱戴天の父の仇堀口源左太衞門を打ち取つて名天下に轟かしたる田宮坊太郎なり、此度び選擧の合戰に初陣の武者振り見せん爲め候補者として打つて出たり、我れと思はん者どもはイデお出合ひ候へと、流石は本場だけに金毘羅樣の利生の程を祈りつゝ現はれたる樣こそ雄々しなんど云ふばかりなし、次ぎには曲垣盛澄、曾てお江戶の眞中にて愛宕山の男阪を一息に馬にて驅け上りたる馬術の達人なるが、これも此度び生國讚岐に立ち歸り逐鹿場裡の人となりたるが勢力は田宮と同等位のものなりと、暫時は此六人の競爭なりしが、こゝに又平賀源內と云ふ江戶時代の奇人が飛び出し盛に奇焰を吐き散らし、一方に於ては例の風來山人の名を以て滑稽諧謔を恣にし縱橫に他の候補者連中を罵倒したれば、他の候補者の面々は大に怒りて源內の領分に我れ一と手を入れ競爭愈々劇烈になり、動々もすれば、選擧法違反として拘引せられんとするものもあるに至りたるが、源內は少しも屈せず、益々舌に筆に力を盡して此處を專途と戰ひたるが敵手には名ある弘法大師等の事なれば運動も餘り捗々しからず、殊に源內は平生より惡口家なれば味方は少く、敵は多く、運動上の不便少なからざれ

ば、深井志道軒遙に來りて源内を助け、奇怪なる如意を揮ふて大道演說を試み大に源内の爲めに聲援を張りたるが、尙當選は甚だ覺束なく形勢日に非にして源内の肝癪玉屢々破烈するも、又如何ともすべからざるに至りしかば、茲に其生國を同うし、又兼ねては源内の性格を慕へる宮武外骨は俄かに歸鄕して源内を援け、尙他の候補者たる弘法大師その外の選擧法違反事件を告發しつゝあり

私有慾の田一反金千圓

南河内の山間では一反の田地を八百圓以上千圓にも賣買して居る、米價及び地租率に據つて計算すると、一反の田地は三百圓以内でなくば年五分の利にも當らないから、何處でも大抵二百圓内外の賣買相場であるに、ソレを八百圓以上にも買つては利益どころか毎年幾分の損害であらうと質問して見ると、其答が頗る奇である、「ナルホド算盤上からは不利益ですが、此邊では農家が一般に富裕で、容易に其地所を賣らないのみか、互に競爭して之を買ひたがる結果偶々賣物が出ると、彼の男が五百圓で買ふと云ふなら俺は六百圓出す、イヤ俺は八百圓で買はう、九百圓で買はうと云つて糶上げる爲め、遂には千圓以上にも賣買さるゝに至り、それを買得た者は村中の大評判になつて、何某は今度田地を殖やしたさうだと方々で言囃される、それで其名譽を得たいが爲めに高價をも厭はず買ふのである

さういふ次第であるから、若し其者等に向つて、馬鹿な買物を爲ないが可いと忠告でもする者があると、彼等は皆、「馬鹿といへば馬鹿だらうが、世間には一幅の掛物を二千圓も三千圓も出して買ふ者すらある、さうして其掛物が果して眞筆であるかないかも分らない樣な物でも、一家の寶物として愛重して居る、ツマリ吾々は他の者が掛物を買ふのと同樣、一家の寶物とする料見で高い田地を買ふのである、然も亦何千圓出した掛物でも、それから得る收益は一文も無く、おマケに火難盜難等の憂もあるが、千圓の田地からは毎年一石五斗程の收益が上つて來る寶物としてこれ程結構なものはあるまい」と辯ずる、然らば何も態々こんな山間で高價な地所を買ふには及ばない、一里か二里隔つた地方へ出れば、二三百圓位で廉い地面が買へるぢやないかと反問すると、「イヤそんな遠方で地面を買つては近所の者が知つて呉れないからダメだ」と辯明する

學を修め德を積むと云ふ心的の富を圖る向上心も無く、斯の如き虛榮の惡風に浸染するのは嘆ずべしである

件といふ人面獸身の動物

人間と畜生と相姦するのは、倫道に悖つた行爲に相違ないが、其事實は多くあるものと見えて、往昔から隨分其樣な物語が殘つて居る、彼の希臘古代の神話には或神が白鵞に化けて女と交つたとあるし、又支那でも章安の一女が鵞と交つた物語があり、突厥人の祖先は狼と交つて出來たと謂はれて居る、日本古代の神話には、禽獸と通じた話は餘り見受けないが、作り譚にしろ信田の杜の狐は人間と交つて竟に兒まで生んだとあり、八犬傳の伏姫は犬に思はれて八犬士を生んで居る、先頃(明治三十八年)名古屋新聞社が擧行した汽車栗毛の記事中に、左の如くあつた

△肥前の「件」　人面獸心といふことはあるが、これは人面牛體だ、今より十年前肥前國五島の奥島の或る百姓家の飼牛が產んだもので、今は剝製になつて長崎市の八尋博物館に陳列されてゐる、何でも生後三十一日目に「明治三十七年には日本は露西亞と戰爭をする」と云ふて死んだのださうな、件だけに豫言が的中してゐる、それで本當に依つて件の如しだ

普通の牛が斯る牛體人面の兒を產む筈はない、これは察するところ、人面の種ではあるまいかと思はれる、聞くところに依ると實際ある地方抔では近頃でも牛と姦すると梅毒が治るとか、犬と通ずると癩病が癒ゆる抔と迷信して、淺ましい眞似を敢するものがあるやうであり、又血氣盛んな船乘などは幾日も遠洋に出て制欲しきれない時分には赤鱏を利用するといふ咄もある、數年以前には神戸の一外人が其愛犬の爲めに狐のお豐といふ白痴女に金を與へて、所謂煩惱の犬の獸欲を滿足せしめやうとして、女を氣絶せしめた爲めに大問題を惹起した事もある

是等は云ふ迄もなく、人間の行ふべき事でなく、其行ひたる者ありとするも亦人間界の恥辱であるに、今八尋博物館に此「件」の剝製を陳列されるのは、つまり動物學上の參考に供されて居るのであつて、吾々人類中にも斯る淺間しい者のある事を證明されるのは悲むべきであるが、學術研究の犧牲となるものと思へば、又是非もない事である

さて此「件」といふ獸は、前記の長崎縣で生れたのが初めてゝ無い「件」といふ字が昔からある位だから、昔も「件」といふ獸があつたのだ、諸君は借用證書などに「爲後日……因て如件」と書くのを知つて居られるだらう「件の如し」とは何の意であるか、その字義も知らずに「因て斯の如し」

といふ事だらう位に獨り合點して居るであらうが、そんな淺薄な字義では無いのである

古今和漢洋の動物書は勿論、三才圖會にでも、國語辭典にでも、また會玉篇などにでも「件」といふ獸の解釋をしたのは無い、モットモ「事件」とか、「要件」とかいふ場合に使ふ「件」は「ワカツ」と訓ずるのであるが「クダン」とよむ意は知らない者が多いやうだ、我輩とても書物上で見て知つて居るのでは無い、或る物識老人から聞いたのである

それは「件」といふ獸の言つたことは少しも間違はない、未來の出來事について言つても、その豫言が必ず的中する（前記の「件」は日露戰爭を豫言したと云ふ）そこで、金子借用中候事實正也、然る上は何月何日迄に元利取揃へ無延滯御返濟可仕候因て爲後日證書差入候て如件」と書くのは「件」といふ獸が言つた事に間違のないのと同様、此金は間違なく豫言通り御返濟いたしますとの意であるさうな、ナルホドと感心すべき講釋である

然るに世は季となつて「件」の如く即ち間違なく返濟しないので、終には貸金請求訴訟などが起つて「如件」が「事件」と變ずるやうなことになる

＊　＊　＊　＊

眼尻の上つた日本人

日本人が西洋人を見ると、最初はドレも同じ顔に見え、又西洋人が日本人を見ても、同じ顔に見えるのである、西洋の新聞雜誌に描いて居る日本婦人の顔は、大概同じ型で、いつも眼尻の上つた女のみである、これは日本婦人が古來結髪のために眼尻を引上げられた生理的の變化もあるだらうが、要は頬骨が張つて眼尻の上つた蒙古人種の特點である、我々日本人同士ではサホドに思はないが、西洋人にはヒドク眼尻が上つた様に見えるのであらう、又或人の説に、日本の田舍から初めて都會に出て來た者には、總ての女の顔が眼尻の上つたキツイ顔に見えるさうであると云ふ事だが、それは都會住居の女は、精神が緊張して居るので、自然眼尻が多く上るのであらう



右の繪は『サンフランシスコ、クロニクル』より轉載

瀧澤家のお路　馬琴日記鈔を讀ての感想

古來烈婦とか、節婦とか、賢女とか、才女とか云はれる人も多くあるが、我輩は婦女として瀧澤お路のやうな人は外にあるまいと感じた、烈婦、節婦、賢女、才女等を搗交ぜた理想の婦女である、お路のやうな女を自分の妻にして見たい、お路のやうな女を息子の嫁にしてやりたい、お路のやうな女を母に持ちたい、と思はない者は、ロクナ人間であるまいと云ひたい程に感じた

そわ瀧澤馬琴の日記を讀んで、馬琴の息子宗伯の妻たるお路が、夫に仕へ、舅姑に仕へ、子を養育し、家事を處理し、夫を亡ひ、舅が眼を失つて後は、著作の手助け、丸藥の手内職など、倦まず、怠らず、怒らず、悲しまずして、三十幾年間始終なく立働いた堅忍孝貞の性情に就て云ふのである、マーそろ〳〵讀んで貰ひたい

世間には、舅姑がヤカマシイと云つて實家に逃歸り、夫が死んだから辛抱して居てもツマラナイとて離縁を求め、家が貧乏になつたとか、親族の仕打が氣にくにぬとか、夫と趣味が合はぬとか、彼是の事を言ひ立てゝ、再縁を何とも思はぬ女もあるに、お路は慳貪な姑に仕へて柔順、病身の夫を扶けて貞實、子も多い貧乏世帶の中で、盲目となつた嚴格の舅馬琴の手助けをして、有名な八犬傳を完成せしめ、日夜來訪の客應接、文書授受の代筆役、日記掛、此上にまだ手内職、よくマー長い間、斯樣な辛抱が續いたものだ奇特至極の女も世にあつたものだと、我輩は感嘆に堪へないのである

近頃でも新聞雜誌などに、何某伯の令夫人は親孝行で、十日とあげずに實家の母上に見舞の使をやるとか、何某博士の細君は家事の暇に手づから何々を拵へて、養育院へ贈つた特志の賢夫人だとか云ふことが、よく出て居るが、虛僞と虛榮にあこがれて居る當世の貴婦人、金があり暇があり餘つての所作事、我輩はチットモ感心な者だとは思はない人物の眞價は逆境貧苦に處したのでなければ分らない、と昔から相場の式が定まつて居る

可愛夫に先だゝれた女ほど、世に味氣ない者はあるまいと思ふ、其味氣ないのを味氣ないともせず、寢ても起きても溫い慰藉をして呉れる人はないのみか、姑のお百は朝から晩まで愚痴と小言の百萬遍、子供はうるさく、舅は盲目、世帶は貧乏、それも一年や二年のことでなく、長の年月、其間に處して瀧澤家を持續したお路の苦心は、實に並大抵

の事でない、ナント感心の女もあればあるものではないか
古い言種だがお路の爪の垢でも煎じて、世間の女共に服ませてやりたい

茲に饗庭篁村翁が抄編された『馬琴日記鈔』の中から、要點を拔載して、我輩の感想が起つた根元を紹介する

但し茲に拔載するのは、其一部分に過ぎない、日記の事であるから、同じやうな事が度々出て居るが、それは採らないで、變つた事のみを擧げる

馬琴日記鈔の鈔録

△天保八年三月十五日　去冬十一月轉宅以來お路殊に立はたらき實に寸暇なし彼なくばあるべからず、二郎は勤あり且不實にてあれどもなきが如し

△天保九年五月五日　晝後予お路に月代をそらせ、其後諸神家廟等禮拜し畢

△天保九年九月晦日　予滯食且つ時候あたりにて水瀉兩三度且しぶり且腹痛す、黒丸子服用、今夜四時就枕、お路は九時過迄夜なべ縫刺いたし、九半時就枕、八半時頃厠へ行く、お路出燈を秉る

△天保十年七月十七日　八犬傳九輯三十五の口板下寫本誤寫六七ヶ處予書き直しお路に張入させ拵おく

△天保十年九月二十三日　今夕お路に申付、金瓶梅七集一二の寫本令㆑讀㆑之予聞㆑之、衰眼にて細字の寫本見えざる故也、誤字なし

△天保十一年正月十二日、精丸お路一人にて丸し候に付予今朝より多く丸し夜に入り四時頃お路と予兩人にて皆丸し畢、予眼氣いよ〳〵衰へ細字見えず、八犬傳九輯三十七の卷の末板下寫本校訂、(假名か)は更に見えざる故に明日お路によませ聞かん爲に丸藥手傳ひ日を暮し畢

△天保十一年二月十二日　お路二郎交代に篠齋八犬傳評を讀ましむ、共に字を知らざれば讀み得ずして止む、
(漢語交りにて傍訓なきものなりしならん)

△天保十一年五月十七日　昨夕着致候松阪殿村佐六書狀二通長文お路に讀せ是を聞、よみかねてひま入、夕七時讀み畢

△天保十一年六月十三日　老眼此節彌々かすみ細字稿本出來兼候間、書時より予作文にてお路に敎へ書せ二丁半二の卷の終迄是を綴る、言葉書同斷

△天保十二年正月六日　八犬傳九輯四十六の卷口お路に口授致字を敎て下書をなさしむ、八つ半時より夕方

迄也三丁出來

△天保十二年十月三日　當春より毎月金銀出入我等お路と算用す、不眼にて算盤手に取かね候間胸算用にて埒明かね未だ果さず

△天保十三年八月二十六日　我等暗記の古人發句多くお路に錄さしむ、終日にして未レ果

△天保十四年四月十二日　篠齋八犬傳結局下編評の上冊五十丁お路に讀せ是を聞く

（芳賀矢一氏これに註解を加へて曰く、天保十一年の頃にはお路に讀めかねたりし篠齋の批評も今は容易に通讀し得るに至れり、失明の身を以て口授し、此所に至らしめたる翁の苦心は推察するに餘りあり

△天保十五年六月二十日　今朝竹の皮買來る、お路少々取出し見せ候所（自家の庭に生じたる竹の皮）五月中雨にてふけ候間價三分一にも成かね候よしにて僅に三十二文差置持去

△弘化三年九月二十一日　お路代筆默老童女訓評書追答一ヶ條半丁弱右二通り書レ之、其後默老書狀一通代筆致候處長文にて未だ果さず

（黒板勝美氏これに附記して曰く、翁老後たゞお路に便つて錦心繡腸の文藻を行ることを得たり八犬傳後篇の如き多く口授筆受に成る、お路に感謝すべきものは何ぞ翁のみならむ）

以上はお路が、馬琴の手助けをした事、手內職の事等が主であるが、此外に姑お百が愚圖々々云ふこと、子供養育のこと、使ひ步きする事なども、皆日記中に出て居るのである、そして其日記も馬琴が盲目になつて後は、馬琴の口授をお路が筆記したのである

さて此お路は何處から嫁入して來たものかと、調べて見ると、馬琴記述の「後の爲の記」に左の如く出て居る、琴嶺といふのはお路の夫宗伯の號である

文政十丁亥、琴嶺三十歲、此春偶ま氷人あり、父歡びて土岐村氏を妻らしむ、春三月婚姻整ひしより、明年戊子の春二月二十二日男兒誕生せり、瀧澤太郎是なり

琴嶺こと宗伯は、病氣勝のため三十歲まで妻を迎へなかつたらしい、そして又琴嶺の病狀を記して後に

此故に家業（醫）を廢して、松前侯へ參る事も稀になりぬ

然れども庚寅の年（文政十三年）閏三月十八日女子（名はつぎ）生れ、天保四年癸巳の秋八月十七日又女子（名

はさら）生れたり、父は年來多病なるに、一男二女を生ぜしは一奇といふべし、かゝりし程に、琴嶺は患ふる所咳痰にあり、其勞咳（肺病）にならん事を怖れて、自療に手を盡せども大効なし

夫の病中、お路の身體と精神の苦勞は一方でなかつた、長男の太郎をつれて妻戀稻荷へ夫の大病平癒の祈願をこめたこともある、實家の父も三浦監物抱えの醫者であつたので其父に夫の病氣治療をも頼んで毎日來て貰つた

媳婦の父土岐村老も日毎に來診して、琴嶺が自療の藥方を問はる

とあるので知れる、そして夫琴嶺は終に天保六年五月八日に三十八歳で死んだ

お路が夫に連添つて居たのは、僅に八年ばかりである、それも過半は重態の病氣を介抱して居た看護婦に過ぎない、其上世話のかゝる三人の子供を殘されたのである、實に不幸悲慘の女ではないか

そして、夫に別れて後は、舅馬琴の口授の筆記、是亦尋常の業でない、瀧澤一家の米櫃たる八犬傳や金瓶梅等の如きものならば、家職として手傳はなければならぬかも知れぬが、其目的でない馬琴が嗜好性癖の雜記類までも、お路は筆記の役を仰付けられたのである、『著作堂雜記』に

吾等雜記は文化元年初て筆を起したり、幵はかりそめの事にて一二の卷は麁末にして見るべくもあらざりしを第三卷より漸次に冊を倣したる也、約莫百枚を一卷とす夫より紙の多きも亦少きもあるべし、多くは讀書の抄錄にて、漢文のみなる卷もあり、俗事は纔に其間に交記したるに、今より六七年以前、天保十二年十月以來、失明の患に嬰りて、みづから筆をとるべくもあらずなりしを尙懲りずまに興邦が母おみちに代書を課せて、今に至るまで卷を繼ぎぬ、此雜記吾生涯に全四十卷に至らば幸なるべしと思ひしに、今は第三十九卷の半分に過ぎたり、代書の後は皆俗事のみにて、讀書の抄錄は要せず、されども子孫の爲に小補なくんばあるべからず、吾佛の記と後の爲の記と此雜記は、吾子々孫々に至る迄、よろしく秘藏すべき者也、總て失ふべからざる要書は、箱を定めて二つばかりにをさめてあり、幵はおみち興邦が知る所也、夏月毎に虫を拂ふと、火災の折に早く取出す事を忘れずば、冀くは長く家に傳へん、興邦等よろしくこの義おもふべし

こんな事を筆記して殘したのもお路の業である、馬琴は天

保十二年の末頃盲目になつてから、七年存命で、嘉永元年の十一月六日に八十二歳で歿したのである、此七年間の著述物と雜記類は皆お路の代筆である、實に其御苦勞察するに餘りあるではないか

此お路のやうな人が無かつたならば、今日の我々までが、八犬傳の九輯を見たり俗事を記した有益の雜記類を見ることが出來ないのである、馬琴は子孫のために小補なくんばあるべからずと云つて居るが、其子孫でない人々にまで大補を與へて呉るのは、皆是れお路殿のお蔭であると、黒板氏の云ふ如く一同感謝せずばなるまい、お路は實に我文學界の一大恩人である、此お路を我輩が理想の婦人として尊敬するのには、何方も反對はなからうと信ずる

蚤は切支丹バテレン蟲か

ペストは鼠から人間に傳染するばかりでなく蚤が媒介する事もあると云ふので、伊勢の四日市では、鼠の買上げと共に蚤をも買上げる事にしたさうである、之を聞いて思ひ出したのは、大正五年七月の『關西日報』に出た、蚤取粉屋の本舗松本金時堂主人の談話である

「蚤は元來日本の蟲では無い、原籍は和蘭にある、夫れで足利時代に初めて輸入された毛氈に從いて日本に渡來した、其頃の記錄に依ると蚤に對する一國の驚怖は非常なもので「今度オランダから渡つて來た切支丹の毒蟲に咬まれる時は忽ち人體は赤脹れに脹れ上つて、大變な熱が出て床に就く、捕へやうとしても神變不思議の術を具へて小さい體に及びもつかぬ高飛びをして」とある、夫れ程恐れられた後は、次第〳〵に日本人の血に慣れ、中世の祖先から咬まれつけた人間は、終に免疫性の微細な反應を示すばかりに進化し」云々

日本の蚤は足利時代に和蘭から渡來したものだと云ふのは根據なき妄説である、シカモ其頃の記錄に云々とあるなどは、チャラッポコも甚だしい、蚤は日本の神代頃にも居たのだが、物の本に蚤の事が出て居るのは、平安朝時代に源順の著はした『倭名類聚抄』が初めてあらう、同第十九卷蟲の部に「蚤(和名乃美)は人を嚙み跳ねる蟲なり」とある、又清少納言の「枕草紙」第三卷にも「蚤もいと憎し、衣の下に跳り歩きて、人を閊えるやうにするよ」とあるから、足利時代より數百年前に蚤の居た事が確かである、故に蚤は切支丹バテレン蟲でなく、我神州固有の蟲であつて、神々の御血をも吸つた歷史を有する大和蟲族と知れ

思案橋とわざくれ橋

江戸時代から歡樂の巷として、日本一である今の吉原は、明暦大火の後に、淺草田圃へ移轉したものである、それより前は、日本橋の禰宜町(今の堺町東一帶)に在つたのであるが、所謂大門に入る前に二筋の堀があつて、それに思案橋、次にわざくれ橋といふのがあつた、「此橋の名如何なる仔細ぞと問へば、諸人吉原町ゆかしさに心うかれ、何となく此橋もとまで來るといへども、さすが此橋渡ること大事に思ひ、渡るべきか渡るまじきかと薄氷を踏む心地して立とまり暫く思案をなす所に、淫慾深き人は渡りて行き、ハヤ大切なりと思案し渡らで歸る人もあり、是によつて思案橋と云ふ、さて又一丁程過ぎ行き吉原町の近所に又橋一つあり、此橋もとへ踏みかゝりては思案にも及ばず、わざくれと云ひて皆人渡る故わざくれ橋と云ふ」と寛永版の「そゝろ物語」(三浦淨心著)に出て居る、思案橋は説明する迄もないが、古語のわざくれは知らない人が多からうから説明を要する、わざくれとはエ、まゝよの意である、寛永頃の武門の俠客山中源左衞門が切腹を命ぜられた時の辭世に、「わんざくれ踏反るべいか今日ばかり明日は鴉がかッかじるべい」と云ふわんざくれも同じ意である

さて是は古い講釋であるが、之を今日の心理學的知識で考へて見ると、世渡りといふ人生も亦此橋に類する事が多い

其一例を云へば、玆に一個の官吏があつて、其家へ賄賂を持つて來る者がある、收賄は官吏服務規則のみか刑法の犯罪行爲であるが、女房はかじり付いて春衣のネダリ、自分も近頃は旨い酒も飮めないから、イッソ貰つて置かうか、イヤ貰ふまいかと思案し、其惡玉が善玉に勝つて賄賂を取る事にした後は、エ、まゝよ、賄賂は官吏の役得だ、「わんざくれふんだくるべいか金ばかり今夜も嬶がかじりつくべい」と官職を笠に被て脅喝的に賄賂を取るに至る者が多い、人生の思案橋も亦大切なる哉である

人と鳥との緣故

日本の古書に據ると、男女の性交は鶺鴒に敎へられ、夫婦の伉儷は鴛鴦に敎へられたのである、其人間が何故鳥の如く「卵」を產まぬかと云ふ事は問題らしいが、人間もそこまではマネられないので、其代り鳥の「卵」を食つて腎氣を養ひ、鳥の敎へを守つて家内安全國家長久、成金全盛、官僚跋扈、養鷄流行なのである

新聞雜誌を白紙に變ぜしめる發明

近時諸物價の暴騰に乘じて、製紙業者の横暴を極むる事も亦甚だしく、其紙價の暴騰は出版業者を非常な苦惱に陥れて居る、各新聞社に於ては特別廉價に購入して居るが、其他の者は高價を支拂つて使用して居る、是れが延いては人文の發達を阻害する事の大なるは何人も熟知する所であるが、此緩和策として工業發明家に望みたい事がある、それは一度使用した新聞又は雜誌を再び利用する方法として、印刷用の油墨を數日内に消滅せしむる發明、即ち讀了の新聞雜誌を三四日捨置くと、空氣の酸化作用か何かによつて白紙に變ずる方法である、烏賊の墨汁で書いた文字は間も無く消滅するとの話を聞いた事もあるが、理化學の進步せる今日、右の如き發明は其道の專門家なれば、茶飯事であらうと思ふ、此方法が案出され一般に應用さるゝに至つたならば、紙價の暴騰を逆利用して面白い現象を呈するに至るてあらう、今假に毎日八頁新聞を一ヶ月四十錢で購讀して居るとすれば、それが白紙に變ずれば優に四十八錢で賣る事が出來、讀者は無料て讀み、尚其上金儲けになるといふ譯、又雜誌は立派な帳簿その外の用に供する事が出來得るのである

此案は個人經濟は勿論、國家經濟の上から見ても、紙屑同樣の新聞雜誌を處分する方法としても、共に有利な事であるから、一日も早く發明されん事を希望する、新聞雜誌が數日内に白紙に變化する事に成ると、又別に面白い事が起るであらう、それは秩序紊亂とか風俗壞亂とかで檢擧された時、事件の證據物として添付した新聞雜誌が、公判開廷の頃には白紙に成つて居て、檢事に口アングリさせる快事も生じ隨つて裁判費用も節約にも成る

家憲と金持一代論

ある日予を訪ねて來た某の要談に、「或成金の富豪が子孫の爲めに家憲を作つて置きたいから、何か其參考ともなるべき昔からの家憲の例を調べて貰ひたい、と依頼されましたので、若しや先生に其御心當りの事でも御座いましたなら一つ御取調べを願ひたいと思つて、お訪ねしたのです」と云つたので、我輩は言下に其事を拒絕し、且つ平常の持論たる「金持一代論を」滔々と述べ、大いに此男を說諭して歸らせた、其論の要點を擧ぐれば、世の投機者流が、僥倖にして巨萬の富を得たのは、敢て咎むべき事ではないとし

ても、其富を永久に子孫に繼承せしめやうとするのは甚だ陋劣なる心事と謂はなければならぬ、抑も一家の財產は一家族の生活を支持して行く爲めに之を必要とするのであるが、若し生活の程度から非常に超過した財產がある場合には、其金を國家の有益なる事業に流用するのが至當である然し金持の息子にそんな氣の利いた者は尠く、大抵は其財產をアテにして何等の活動もせず、却つて逸樂を恣にして遂に破產する奴が多い、斯の如き子孫に家憲を設けて置いたとて、何の役にも立たないのであるから、よしや遺產を與へるとも、家憲などは寧ろ設けない方がマシである、そして社會の爲めに金を善用する事を知らない馬鹿息子には費ふだけの金を費はせて、果には法界節屋にでも成らせた方がよいとの主張である

現代人の活字恐怖病

これは強迫觀念といふ恐怖症の中にもない新らしい病名である、洋畫家の三宅克己氏が「讀賣新聞」にて、自己の信念と抱負を發表された現代畫界論の標題であつた活字恐怖病……、其所說の大意は、現代の畫家は新聞紙上に現はれる俗論の活字に恐怖して、時勢に迎合すべく俗了し評判本位を專一として藝術の眞髓を失つた繪商人に墮落せりと云ふのである、これは誠に痛切の論であるが、我輩に云はせると、豈に啻に畫界のみならんやで、現代社會で活動して居る多數人中に活字恐怖病者でない者が幾人あらう乎見よ、國家を支配する官僚共は、外國新聞に何とか書かれたと云つてオゾ毛をふるひ、市井の商人共は、夕刊新聞に何とか出はしないかと、氣にし、學者評論家は、新聞がコワイと云つて自己の信條を曲げ、其外法律家といふ者、宗敎家と云ふ者、敎育家と云ふ者、藝人と云ふ者、滔々皆是れ活字恐怖病者ではないか、シカモその病は膏肓に入れる者のみである、此村の廣きに醫者の無かりけりかネ

昔の晴雨計

古い本に「晴雨を豫じめ知るには堅炭と何なりと同等の目方にて竿の兩端に懸け中分に絲をつけ天秤の如くなして家の内に揭げ置べし雨降んとすれば炭の方重くなり又晴んとすれば炭の方輕くなるものなり」とあつた、これは炭が低氣壓の水分を多く吸收するからである、古い褌が晴雨計に成るのも同じ理であらう

月世界と鼻糞（人情の愛憎）

人には各自愛憎の念といふものがあつて、之を小にしては一家の中にても誰々は好きだとか嫌だとかいふ區別を立てゝ、其自分の氣に合つた者を特別に愛する風があるが、一歩戸外に出ると自家の者は互に相親み、相愛して他家の者を疎外する、併し又其居村を離れると、同村の者同士互に相親んで他村の者を疎外する風がある、それては他村人同士は何處までも角突合をして居るかといふに、足一たび其國を出てゝ他郷の客と成ると、君は秋田縣ですか僕も御同樣です以後御別懇になどゝ互に其胸襟を披いて語り、亦其同縣人相親んで他縣人を疎外する傾があるが、若しそれが日本を離れて外國で出逢ふ樣な事があると、假令それが他縣人同士であつても、ヤ君は何處です石川縣です、僕は三重縣です、日本人同士異邦に逢ふのはお懐しいですナなど相親愛する事に成る、だから若し此地球の外なる月世界星世界との交通ができて、吾々地球の住民が地球を離れて夫れ等の世界へ往く事がありとすれば、ヤ君は露西亞人てすか僕は支那人です、ソレでは同じ地球の人間ですから以後御別懇になどと、平生仲の惡い國人同志でも互に懐しく思ふに相違ない

右の道理よりすれば同じ地球上の人類は、常々互に相親み相愛すべき筈であるが、事實は然らずして、一種の人種的感情から互に他を排斥して、イヤ露西亞人は慘忍でいけないとか、支那人は野卑であるとか種々の惡口を言合つて居る、それでは同國人同士は互に相親愛して居るかといふに是亦其間に偏狹なる地方的感情を挾んで、彼奴は三重縣の奴ぢやから乞食根性だとか、相模女だから淫亂だとか云つて他を排斥し合つて居る、それでは同縣の者は互に相親愛して居るかといふに、是亦何郡の奴はヅルイ奴ばかりだから寄附くなとか、何村の奴は人氣が荒いとか何とか云つて攻擊する、それでは同町村の者は互に親睦して平和に暮して居るかといふに、同じ町内でも、隣の家は山師で內輪は火の車だなどゝコソコソ惡口を言合ふ、それでは一家の內はいつも波風立ずに安穩に暮らして居るかといふに、親子喧嘩をしたり、姑と嫁との角突合が絕えない、又其姑の身體の中へ入つて見たら、疳の蟲は胃の蟲が面白くないといひ、鼻糞の黴菌は目クソの黴菌を罵つて居るであらう要するに、人間は己れに近き者を愛し、遠き者を疎んずるといふ自分勝手の動物である

文身の女

文身とは通俗に「いれずみ」と云ふことで、東京では「彫物」又は「モン〳〵」とも云ひ、大阪では「入れ黒子」とも云ふが、字には刺墨、雕青、鯨などと書く、此文身は、我國では神代頃から既に行はれ、江戸時代には俠風を衒ふ一種の裝飾となつて居たもので、古今の奇談珍圖も少からずであるが、明治四十二年十一月發行の『時事新報』に

東京上野精養軒のお半などと來ると、年は廿七八の年增盛り、スツキリと水際立つて姿の好いのが、お膳搬びの裾さばき玉か氷かむつちりした白い脛に赤ものがチラチラする、お客が氣にして根強く聞くと、初めは中々見せないが終には自慢さうに出して見せる、脹脛に燃え立つやうな緋房が彫つてあつて、其紐がクル〳〵と向脛から卷上つて内股に般若の面、アッと言つて舌を卷くお客の顏を流眄に見たお半は、貴郎、人に言つちや厭ですよと嫣然する、その笑顏が素敵に美しいさうだ

女が文身することは珍しい話でもないが、その極端な例は幾つもある『近世風俗志』に

文政頃江戸に於角と云女のいすりを業とする惡女あり、全身種々に彫り、又河童玉門に指さす形をほりて大丸屋で美服を誂へ、製成に至て店前にて裸體と成て新衣に更る、衆人見之て笑るより金をいすりしことあり、彼のほり物は元よりありし也、見之て笑はんことを察して謀りし也、又或仕事師は、「年老て笑はれ草と思へども彫らねばならぬ鳶の附合」と云ふ一句を彫たる者もありしとぞ

又『骨董協會雜誌』第二號に

往昔は婦人の文身を施すもの亦鮮なからず彼の演劇にある蟒のお芳などは作者の理想に過ぎざるべきも、所謂女伊達と稱して俠風男子を凌がんとする一派の婦人が文身を施したる消息を解するに難からず、聞く舊幕の時或る婦人が肩に雷鬼の留まり居る所を彫り、雷鬼が錨を下げ居りて、其の錨に太鼓を下げ居る普通の圖案を變じ、錨を臀部に下げ居る圖を彫りたるものありしと云ふ

明治卅二年三月發行の『都新聞』附錄「都の華」に

女も藝者なんか文身をした連中がありましたが鳥渡綺麗なは赫耶姫を腕へ彫ッたんで、畢竟腕を竹と見せて、肱の節に竹の節を彫り、一の彫に赫耶姫を彩色彫にして竹の中から透いて見えるやうに彫ッたんです、何でも深川の假宅時分で吉原あたりの藝者でした

尚此外にも、女の文身に關する珍談は多いが、その極端な圖を彫るのは、男の手にをへぬアバズレ者であつたらしい文身は野蠻の遺習として、德川幕府の末及び明治の代となつて以來、法律で嚴禁されて居るにも拘らず、隱に行はれて其術を業とする者少くない、特に諸外國人は好んで日本式の文身を施すさうである『官報』に「海外在留本邦人職業別」と云ふ統計表が載つて居たが、何國何市にも日本の「文身師」が數人ある、野蠻と呼ばれる事が、文明國で盛んに行はれて居る事が分る

船は不動産なり

日本の民法第八十七條に「土地及ヒ其定著物ハ之ヲ不動産トス、此他ノ物ハ總テ之ヲ動産トス」とある、即ち動かない土地、動かない家屋樹木塀石等を不動産と云ふ事に成つて居る、故に自轉車自動車などは無論動産である、又汽車電車なども動産である、然らば同じく人を載て走る汽船も亦動産であらうと云ふに、こればかりは動産と見ず不動産と見るのである、ハテ變てこなり、船は移動を主として居る物體、日夜動き續けて居るのが船の役目であるのに、それを不動産と見るのは矛盾なり非條理なりと誰も思ふであらうが、我國の法律では船を不動産と見て居るのであるから可笑い、民法でも商法でも船を動産とは見ない、先づ船舶、(二十噸以上又は二百石以上)を新造すると、根據地を定めて其管轄廳へ不動産登記法に據つて登記せねばならぬ、そして船舶國籍證書といふ免許狀を受けねば、航海する事が出來ない規則に成つて居る、米國へ行つて居る船が横濱の不動産であり、英國へ行つて居る船が神戸の不動産であるのだ、成田の不動尊が東京へ出張し、不動貯金銀行の金が賄賂に化けて散らばるのよりも不思議な事である

それからマダ一つ面白い事がある、其不動産たる船が老朽して廢物に成り、それをバラ〳〵に解き放して陸上へ引揚げると、法律はそれを動産と見るのである、水の上で日夜動いて居る間は不動産であつて、陸の上へ引揚げられて動かなくなると動産だとは、サテも妙痴奇珍ではないか

面白半分 了

大正十二年七月下旬印刷
大正十二年八月十日發行

（面白半分）　定價金貳圓

編纂兼發行者　東京市下谷區上野櫻木町二十二番地
（宮武）外骨

印刷者　東京市本郷區動坂町三百十七番地　明正舍　小國直太郎

發行所　東京市下谷區上野櫻木町二十二番地
半狂堂
電話下谷六五九〇番
振替東京三九四二〇番

和紙和装既刊書目

一日本擬人名辭書　全一冊

一賣春婦異名集　全一冊

一一癖隨筆　全一冊

一半男女考　全一冊

一奇態流行史　全一冊

一私刑類纂　全一冊

一此中にあり　全一冊

一猥褻風俗史　全一冊（非賣品）

一賭博史　全一冊

一川柳語彙　全一冊

一面白半分　全一冊

法學博士　中田薫先生著
一徳川時代文學と私法　全一冊

辯護士　澤田例外先生著
一緣切寺（川柳松ケ岡）　全一冊

一變態知識　新古隨筆と古川柳研究　毎月一回發行

一猥褻と科學　全一冊（非賣品）

郵便ハガキにて御申込あれば詳細の目録を呈す